教科書文庫
4
210
42-1920
2000065507

43022
教科書文庫
4
210
42-1920
20000
65507

Kodak Color Control Patches
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak

資料室

教科書文庫
4
210
42-1920
2000065507

大正九年一月三十一日
文部省檢定濟

女子用國史教科書

下巻

文學士
藤岡繼平著

東京
合資會社
六盟館

広島大学図書
2000065507

女子用國史教科書 下卷

目次

天皇御在位 將軍在職 對照表

第四編 近古（後鳥羽天皇より後陽成天皇まで）

第一期（後鳥羽天皇より後醍醐天皇まで）

第一章 源頼朝 鎌倉幕府……一
第二章 北條氏の執權……四
第三章 鎌倉時代の文物・佛教……八
第四章 蒙古と高麗 元寇……一三
第五章 朝廷と幕府……一六
第六章 北條氏の滅亡……二一

広島大学 教 65507 図書

第二期（後醍醐天皇より後龜山天皇まで）
第七章　建武中興　足利尊氏の叛　楠木正成……二六
第八章　新田義貞等の勤王……三一
第三期（後小松天皇より正親町天皇まで）
第九章　吉野の朝廷……三六
第十章　室町幕府……三八
第十一章　關東管領　嘉吉の亂……四一
第十二章　應仁の亂……四三
第十三章　室町時代の文物・佛教……四七
第十四章　皇室の式微　室町幕府の末路……五〇
第十五章　群雄割據……五六
第四期（正親町天皇より後陽成天皇まで）
第十五章　明との交通　高麗と朝鮮　歐羅巴人の來航……五六
第十六章　織田信長……六〇
第十七章　豐臣秀吉……六四
第十八章　朝鮮征伐……六九
近古略年表
第五編　近世（後陽成天皇より孝明天皇まで）
第一期（後陽成天皇より後光明天皇まで）
第十九章　德川家康　關ケ原の戰　豐臣氏の滅亡……七三
第二十章　江戸幕府　德川家光……七九
第二十一章　海外諸國との交通……八四
第二十二章　天主教の禁　島原の亂……八七
第二期（後光明天皇より仁孝天皇まで）
第二十三章　德川綱吉……九〇

第二十四章　江戸時代の文物・佛教……九三
第二十五章　德川吉宗……九八
第二十六章　德川家齊　諸藩の治……一〇一
第二十七章　國史・古典の研究　尊王論……一〇七

第三期（仁孝天皇・孝明天皇・明治天皇）

第二十八章　露國人の來航　蝦夷地の開拓　海防論
西洋學術の傳來……一一一
第二十九章　亞米利加合衆國使節の來朝　和親條約
開港・攘夷の論……一一六
第三十章　假條約　安政の大獄　幕府の衰頽……一一九
第三十一章　長州征伐……一二九
第三十二章　大政奉還……一二九
第三十三章　鳥羽・伏見の戰　明治戊辰の役……一三一

近世略年表

第六編　現代（明治天皇・今上天皇）

第三十四章　明治時代……一三七
第三十五章　大正時代……一四六

現代略年表

下卷目次終

天皇御在位 將軍在職 對照表

一、鎌倉時代

文治元 (一八四五)

天皇	將軍
後鳥羽	源頼朝
土御門	頼家
順德	實朝
仲恭	藤原頼經
後堀河	頼嗣
四條	宗尊親王
後嵯峨	惟康親王
後深草	久明親王
龜山	守邦親王
後宇多	
伏見	
後伏見	
後二條	
花園	
後醍醐	

元弘三 (一九九三)

二、吉野時代

建武元 (一九九四)

天皇
後醍醐
後村上
後龜山

元中九 (二〇五二)

三、室町時代

明德三 (二〇五二)

天皇	將軍
後小松	足利義滿
稱光	義持
後花園	義量
後土御門	義教
後柏原	義勝
後奈良	義政
正親町	義尚
	義稙
	義澄
	義稙
	義晴
	義輝

永祿十 (二二二七)

四、安土桃山時代

永祿十一 (二二二八)

天皇	將軍
正親町	義榮
後陽成	義昭

慶長三 (二二五八)

五、江戸時代

慶長四 (二二五九)

天皇	將軍
後陽成	德川家康
後水尾	秀忠
明正	家光
後光明	家綱
後西院	綱吉
靈元	家宣
東山	家繼
中御門	吉宗
櫻町	家重
桃園	家治
後櫻町	家齊
後桃園	家慶
光格	家定
仁孝	家茂
孝明	慶喜
明治	

慶應三 (二五二七)

天皇御在位 將軍在職 對照表

建武元（一九九四）
後醍醐
後村上
後龜山
元中九（二〇五二）

三、室町時代

明德三（二〇五二）

天皇：後小松、稱光、後花園、後土御門、後柏原、後奈良、正親町

將軍：足利義滿、義持、義量、義敎、義勝、義政、義尙、義稙、義澄、義稙、義晴、義輝

永祿十（二二二七）

四、安土桃山時代

永祿十一（二二二八）

天皇：正親町、後陽成

將軍：義榮、義昭

慶長三（二二五八）

五、江戸時代

慶長四（二二五九）

天皇：後陽成、後水尾、明正、後光明、後西院、靈元、東山、中御門、櫻町、桃園、後櫻町、後桃園、光格、仁孝、孝明、明治

將軍：德川家康、秀忠、家光、家綱、綱吉、家宣、家繼、吉宗、家重、家治、家齊、家慶、家定、家茂、慶喜

慶應三（二五二七）

女子用國史教科書 下卷

文學士　藤岡繼平　著

第四編　近古（後鳥羽天皇より後陽成天皇まで）

第一期（後鳥羽天皇より後醍醐天皇まで）

第一章　源頼朝　鎌倉幕府

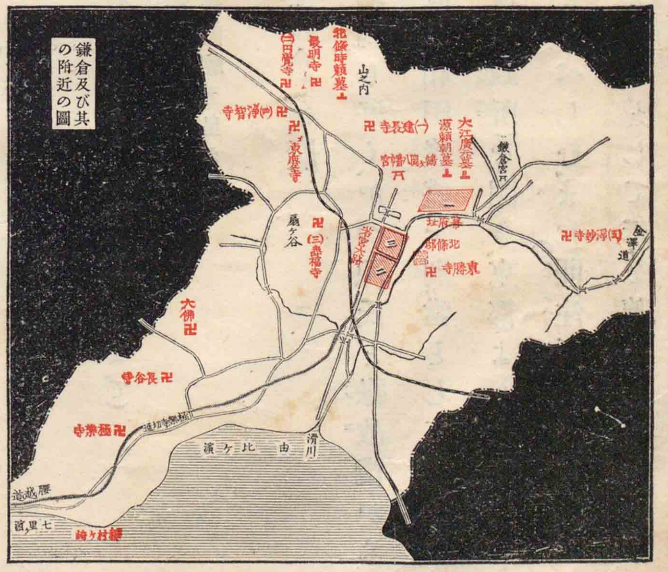
（一）鎌倉幕府の創立
（一）侍所
（二）政所
（三）問注所

さきに頼朝の兵を擧ぐるや、地利も好く、かつ源氏と縁故淺からぬ鎌倉の地に據り、まづ侍所を置き、和田義盛を別當として武士をとりしまらしめ、ついで公文所（後の政所）を開き、京都より大江廣元を招きてその別當に任じ、庶政をすべしむ。また問注所を設け、同じく京都より下したる三善康信を執事として訴を聽かしめたり。こ

こに於て幕府の基はじめて成れり。

㈡守護・地頭を置く

然るに頼朝は、弟義經とむつましからず、遂にこれを殺さんとしければ、義經は諸處に逃げかくれ、一時その行方をくらませり。よりて頼朝は大江廣元の意見を用ひ、義經等を捕ふるを名とし、朝廷に請ひて、國ごとに守護を置きて、軍事・警察を掌らしめ、また公領・莊園にあまねく地頭を置きて、年貢をとり立てさせ、何れもおのが家人を以てこれに任じたり。ここに於て國司の權は守護に移り、莊園の領主はその權を地頭に奪はれ、天下の實權おの



㈢頼朝海内を統一す

づから頼朝に歸するに至れり。時に後鳥羽天皇(八二)の文治元年（紀元一八四五）なり。

しづやしづしづのおだまきくりかへし昔を今になすよしもがな　（義經の妾靜）

義經は遙かに陸奥に逃れて、藤原秀衡によりしが、秀衡の死するに及び、その子泰衡は頼朝にせまられて、遂に義經を殺せり。されど頼朝は、泰衡が早く義經を討たざりしを責め、自ら大軍を率ゐてこれを伐ち滅ぼしければ、天下一統の業全く成れり。ここに於て建久三年（紀元一八五二）頼朝遂に征夷大將軍に任ぜられ、これより後凡そ七百年の間武家政治の基を開きたり。

源頼朝

秋風に草木の露を拂はせて、君が越ゆれば關守もなし　（梶原景季）

㈣頼朝の政治

頼朝は、平氏が藤原氏の如く文弱に流れて、早く亡びたるにかんがみ、常に武藝を勵まし、儉約をすすめ、その政令簡易にしてよくゆきとどきたれば、人人みな悦び服せり。されど頼朝は性質甚だ疑ひ深く、さきには義經を除き、ついで範頼をも殺しければ、源氏の家運はおのづから衰へ、かへつて外戚北條氏の勢を增すに至れり。

第二章　北條氏の執權

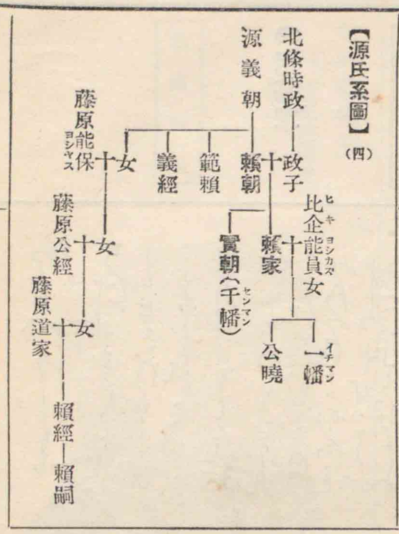
㈠北條時政・義時の執權

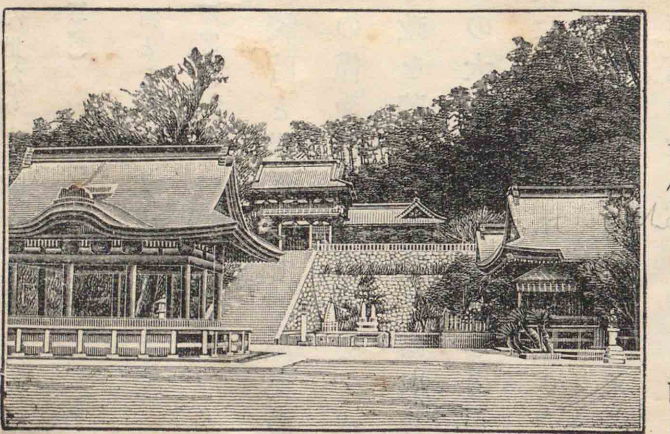
土御門天皇(八三)の御代に、頼朝薨じて、その子頼家つぎしが、年なほ若かりければ、母政子實權を握り、その父北條時政威權をほしいままにせり。時政遂に政子と謀りて、頼家を廢して、その弟實朝をして將軍職をつがしめ、自ら執權となりて益〻權力をふるひ、遂にはまた實朝を廢しておのが女婿を立てんとしければ、政子は之を退けて、時政の子義時をして、代りて執權たらしめたり。されど義時の權略は父にもまさり、和田義盛の一族を除きて、自ら侍所の別當を兼ね、文武の權を握りて、いよいよ勢を振ひたり。

㈡源氏の滅亡

されば、實朝また外戚の權力におさへられて、如何ともする能はざるを悟りて、頻りに官位の昇進を望み、遂に右大臣に任ぜられ、順德天皇(八四)の承久元年(紀元一八七九)その拜賀の禮を鶴ヶ岡八幡宮に行へり。時に頼家の子公曉、父の仇なりとて實朝を弑し、己れもやがて義時の爲に殺されたれば、源氏は僅か三代二十八年にして亡びたり。

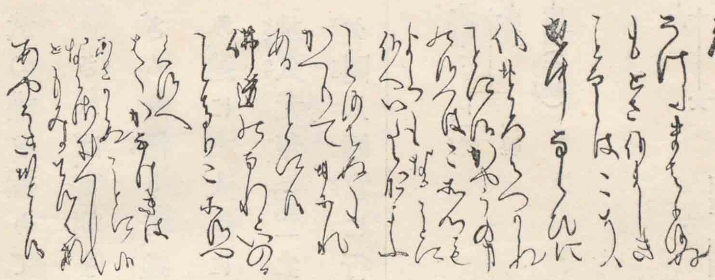
【源氏系圖】(四)





鶴ヶ岡八幡宮

㊂尼將軍



政子の手蹟

㊃泰時の良政

山はさけ海はあせなん世なりとも、君に二心（フタゴコロ）我があらめやも（源實朝）

いでていなば主（ヌシ）なき宿となりぬとも、のきばの梅よ春を忘るな（源實朝）

ここに於て政子は義時と謀り、少しく源氏の縁をひける藤原頼經（ヨリツネ）の僅かに二歳なるを迎へて鎌倉の主とし、自ら政を聽きたり。政子は男まさりの婦人にて、頼朝の大業をなせるは、その内助（ナイジヨ）の功少なからず。夫におくれたる後は尼となりてなほ幕府の政にあづかり、よく將士の心をなつけ、世に尼（アマ）將軍と呼ばれたり。

かくて北條氏の權勢はもとの如く、義時の子泰時（ヤストキ）ついで執權となれり。泰時は寛仁にして民

をめぐみ、その政は公平を旨（ムネ）とし、また簡易なる法律を作りて、これを貞永式目（ジヤウエイシキモク）といひ、永く武家政治の本となれり。

事しげき世の習（ナラヒ）こそものうけれ、花の咲くらん春も知られず（北條泰時）

【北條氏系圖】(一)

- (一)北條時政
  - 政子
  - (二)義時
    - (三)泰時 — 時氏
      - (四)經時
      - (五)時頼
    - ○ — 實時
  - 時房

天皇御系圖(一)

- 高倉天皇
  - 守貞（モリサダ）親王 — 八六 後堀河（ゴホリカハ）天皇 — 八七 四條（シデウ）天皇
  - 後鳥羽（ゴトバ）天皇
    - 八三 土御門（ツチミカド）天皇 — 八八 後嵯峨（ゴサガ）天皇
      - (一)將軍 宗尊（ムネタカ）親王 — (二)將軍 惟康（コレヤス）親王
      - 八九 後深草（ゴフカクサ）天皇 — (三)將軍 久明（ヒサアキ）親王 — (四)將軍 守邦（モリクニ）親王
    - 八四 順德（ジユントク）天皇 — 八五 仲恭（チユウキヨウ）天皇

㊄時頼の治

(一) 親王將軍を迎ふ

北條時頼

泰時卒して、孫經時（ツネトキ）・時頼（トキヨリ）相ついで執權となる。時頼は頼經の子將軍頼嗣（ヨリツグ）を廢し、後嵯峨（ゴサガ）（八八）天皇の皇子宗尊（ムネタカ）親王を迎へ奉りて將軍となせり。これ親王の將軍となりたまひし始めにて、その後も北條氏はつねに幼き親王を將軍に仰ぎ、長

鎌倉時代の風俗

（二）民政

じたまへば之を廢し、自らその實權を握りたり。

時賴はその母松下禪尼の敎を守りて、常に節儉を以て下を率ゐ、執權をやめて最明寺に入りたる後も、諸國を行脚して民の困苦を問ひたり。されば士民皆これになつき、時賴の卒するや之を悲しみて出家するもの甚だ多かりしと云ふ。

第三章　鎌倉時代の文物・佛敎

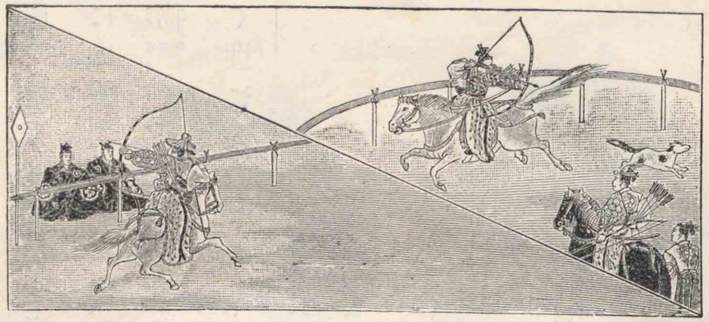
㈠鎌倉武士と婦人

（一）男女の氣風

泰時時賴が善政を施して、國內の穩かなりし時に當り、京都の男女は、なほ平安時代の遺風をうけて、遊樂を事とせるに反し、鎌倉武士の間には一種の氣風あふれたり。すなはち武士は賴朝以來の風にならひ、一般に武勇にして質素を守り、また主從の義を重んじ、禮儀をつつしみ、名を惜しみて死を恐れざるの美風を養ひたり。隨つて女子にも、往往板額の如き勇女出で、賤しきものに至るまで貞節

(二) 男女の風俗

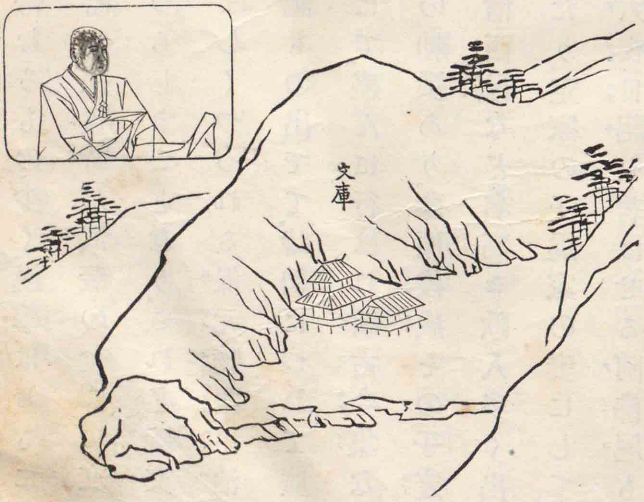
犬追物と流鏑馬



のほまれ高きものありき。

されば武士は、遊戯にも犬追物・流鏑馬・相撲などのいさましきものを喜び、また衣・食・住もすべて簡易を旨とせり。當時男子は常に直垂を着し、烏帽子を冠り、女子は被衣を用ひ、また市女笠を被れり。

北條實時及び金澤文庫とその印



㈡當時の學問
(一)漢學衰ふ
(二)新體の國文あらはる
(三)和歌の隆盛

阿佛尼

かかる尙武の時代なれば、學問を修むるもの少く、㈠漢學はおもに僧侶の手にうつりたり。ただ北條義時の孫實時が武藏の金澤に文庫を建て、子弟をも教育したるはめづらしきことなり。されど㈡國文には、假名交り文の一新體を以て勇ましくつづれる保元物語・平治物語・平家物語・源平盛衰記などの軍記もの出でて、時勢につれて廣く世に愛讀せらる。また㈢和歌は京都にて盛んに行はれ、新古今集などの勅撰あり。藤原俊成その子定家・僧西行など名高き歌人多く出でたり。定家の子爲家の妻にして、十六夜日記を著はせる阿佛尼も、また和歌に巧なりき。

㈢佛教の新宗派

宗教も、さきの天台・眞言の二宗は、その說くところ高尙に過ぎし上に、僧徒等の暴行は久しく世の厭ふところとなりて、もはや上下の信仰をつなぐ能はず。ここに於て平易を尊ぶ時勢につれ卑近なる新宗派つづいて起れり。

(一)禪宗
(二)淨土眞宗
(三)法華宗

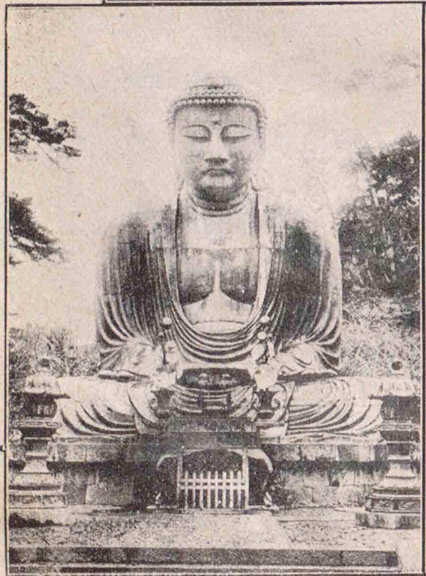
僧榮西

親鸞及び日蓮とその筆蹟

はじめ僧榮西は、宋に學び歸りて臨濟宗を傳へ、その弟子道元も亦宋より曹洞宗を傳へたり。臨濟・曹洞は共に禪宗にして、武人の氣風に適しければ、多く上流武士の間に行はる。

また淨土宗をはじめたる法然上人(源空)の弟子に、親鸞上人(範宴)ありて、新に淨土眞宗(一向宗)を開き、その女覺信尼は本願

上圖　鎌倉圓覺寺舍利殿



下左圖　鎌倉大佛

下右圖　奈良東大寺南大門仁王尊

四美術工藝

(一)建築

(二)彫刻

(三)繪畫

(四)刀劍

(五)陶器

寺の開祖たり。その後僧日蓮はまた法華宗をはじめたりしが、これ等は何れも簡易なる宗旨にて、能く當時の民情に適し、廣く民間に行はるるに至れり。

新佛教の流行につれ、寺院の建築には新に支那風を傳へ、邸宅も質素を尊ぶ世風に伴ひて、實用に適したる武家風のもの起れり。また彫刻には運慶・湛慶など出でて、勇壯なる佛像を刻み、繪畫には土佐光長・藤原信實等あらはれて、戰爭その他の繪卷物など行はれたり。

また武具の製作は、時代の必要につれて大に發達し、岡崎正宗の如き名工出づるに及びて、よく日本刀の精巧をあらはし、陶器は、加藤景正支那よりの製法を傳へて尾張の瀬戸窯を始めてより、その技著しく進歩したりき。

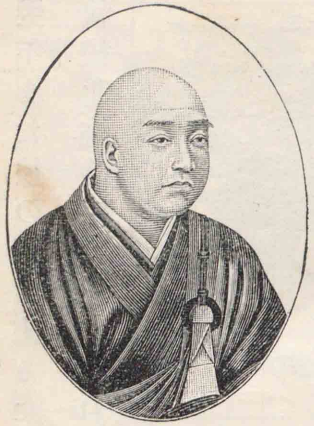
第四章　蒙古と高麗　元寇

泰時・時頼が執權の頃は、國内太平なりしが、間もなく時頼の子時宗の時に至りて、元の大寇起りぬ。

㊀蒙古と高麗

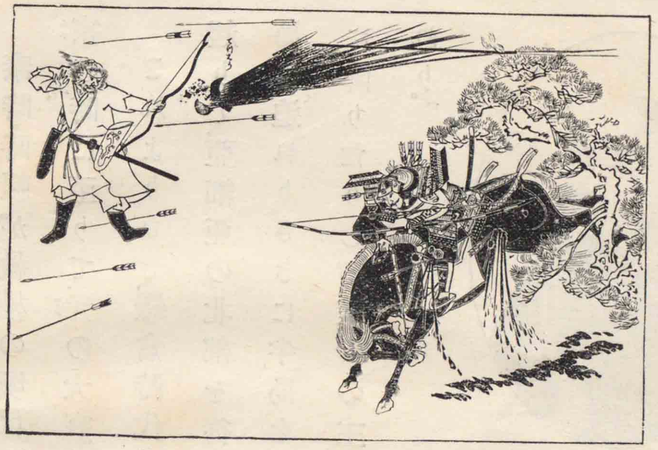
これよりさき、鎌倉時代の初め頃、支那の北部に蒙古といふ强國起りて、亞細亞の北部を從へ、西は歐羅巴の東部を侵し、東は朝鮮半島に迫れり。さきに半島を統一せる高麗は、これに敵する能はず遂に降りたりしが、蒙古の主忽必烈の時に至りて、全くその屬國となれり。

㊁蒙古と我が國



北條時宗

忽必烈は、その勢に乘じて遂に我が國をも從へんとし、龜山天皇の文永五年（紀元一九二八）高麗王を經て國書を我に贈り來れり。されどその文辭甚だ無禮なりければ、朝廷これに答へたまはず、

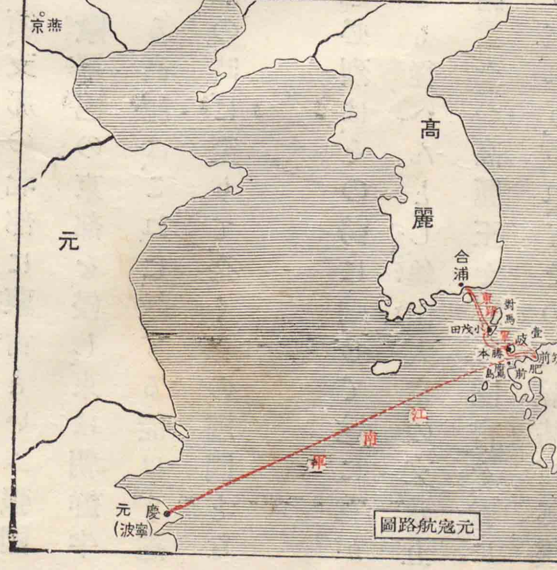


文永の陸戰

翌年また彼の使者來るに及び、執權北條時宗は斷然これをしりぞけ、西國に令して嚴に兵備を修めしめたり。

上天眷命大蒙古國皇帝、奉書日本國王云々

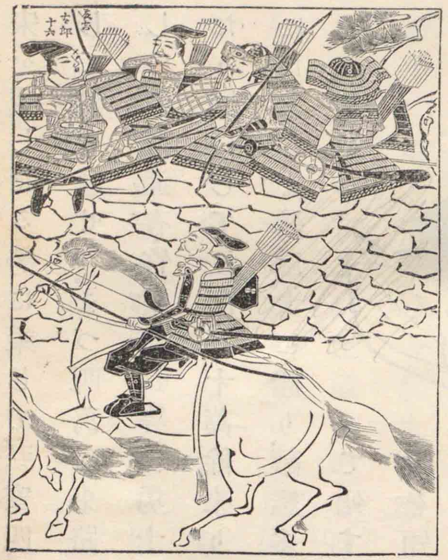
（蒙古の國書）



元寇航路圖

㊂文永の役

時に蒙古は國號を元と改め、また屢〻使を遣はして我が入貢を促せしも、常に追ひ歸されしを怒りて、後宇多天皇の文永十一年（紀元一九三四）遂に四萬の兵を發して來り寇し、先づ對馬壹岐をあらし、進みて博多に迫り、鐵砲を用ひて大いに我が軍を苦しめたり。されど西國の將士勇敢にこれを拒ぎしかば、敵おそれて逃げ去れり。これを文永の役といふ。



石壘

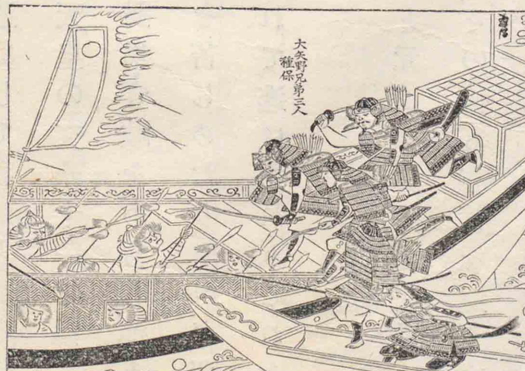
㊃弘安の役

されど元はなほこの失敗に懲りず、その後も亦使を送り來りしが、時宗はこれを斬り、石壘を筑前の海岸に築かしめて、ますます防備を嚴にし、更に進みて敵國を伐たんと企てたり。されど未だ發せざるに、元は新に

宋を滅したる勢に乘じて、弘安四年（紀元一九四一）東路・江南の兩軍を發して來り寇せり。まづ四萬の東路軍壹岐を侵し、進みて博多に迫りしに、河野通有・竹崎季長等の勇士よく戰ひて大に敵軍をなやましたり。既にして江南軍十萬餘來り會せしにたまたま暴風大に起り、敵艦多く覆りて死するもの數を知らず。我が軍これに乘じて殘兵をつくせり。これを弘安の役といふ。

龜山天皇

末の世の末の末まで我が國は萬の國にすぐれたる國



弘安の海戰

㊄國威の發揚

この役は實に我が國始まりてよりの大難なりしに、上下心を一にしてよく之にあたり、畏れ多くも龜山上皇は、宸筆の願文を伊勢神宮にささげ、御身を以て國難に代らんことを祈りたまひ、時宗は勇斷事にあたり、全國の武士も亦よく賴朝以來養はれたる武士道をあらはしたるを以て、かかる大勝を得て大に國威を擧ぐることを得たり。さしも強大なる元も、この後屢〻再擧を企てしかども果さず、遂に永く我が國をうかがふの念を絶ちたり。

建治二年三月廿五日御書下、昨日閏三月二日到來畏拜見仕候了、抑被仰下候爲異國

征伐人數交名幷乘馬物具員數等事、子息三郎光重・聟久保二郎公保以夜繼日企參上候へば、令申上候、以此旨且可有御披露候、恐惶謹言、

閏三月三日

北山室地頭尼眞阿

第五章　朝廷と幕府

㊂北條氏衰微の一因

㊃承久の亂

(一)原因

後鳥羽上皇

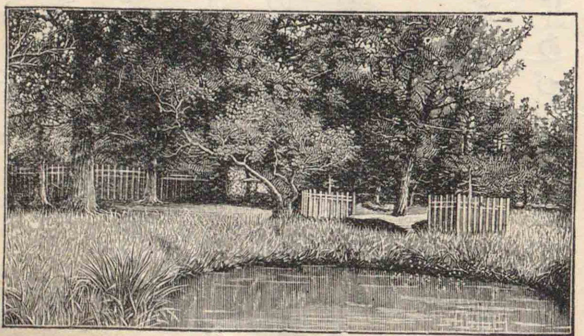
北條氏は元寇の役に大功を立てたるも、軍費の莫大なりし上に、寺社の祈禱料及び戰功の恩賞などのために、財政次第に困難となり、その勢また前日の如くならざりき。

かかる間に、北條氏の京都に對する政策は、ますます進みたり。これよりさき、後鳥羽上皇は政權を朝廷に回復せんとの御志あり、執權義時のしばしば上皇の御旨にそむきしを憤らせたまひ、承久三年（紀元一八八一）順德天皇をして御位をその御子(八五)仲恭天皇に讓らしめたまひ、順德上皇と謀りて遂に義時追討の院宣を下したまへり。

おくやまのおどろが下をふみわけて道ある世ぞと人に知らせん（後鳥羽上皇）

(二)戰爭の始末

義時これを聞き、京都を攻めんとするや、子泰時大義を說きて諫めたれども聞かず、ただちに泰時及び時房(義時の弟)等をして大軍を率ゐて京都に打ち入らしめたり。かくて義時は畏れ多くも天皇を廢して(八六)後堀河天皇を立てたてまつり、後鳥羽上皇を隱岐に、土御門上皇を土佐(後に阿波)に、順德上皇を佐渡に遷したてまつり、なほ官軍に從ひし人人を罪せり。これを承久の亂といふ。



隱岐に於ける後鳥羽上皇仙宮址

我こそは新島守よおきの海の、
　荒き浪風心してふけ
　　（後鳥羽上皇隠岐にて御製）

この亂後、北條氏は六波羅府をひらきて泰時・時房をその探題となし、近畿・西國を鎭め且ひそかに朝廷に備へしめたれば、京都の實權はますます北條氏にうつりたり。

天皇御系圖（二）

- 御嵯峨天皇
  - （八九）後深草天皇（持明院統）
    - （九二）伏見天皇
      - （九三）後伏見天皇 ― 量仁親王
      - （九五）花園天皇
  - （九〇）龜山天皇（大覺寺統）
    - （九一）後宇多天皇
      - （九四）後二條天皇 ― 邦良親王
      - （九六）後醍醐天皇

(三) 結果

後堀河天皇につぎて御子（八七）四條天皇立ちたまひしが、皇子おはさざりしかば、泰時は土御門上皇が、承久の御企にあづかりたまはざりしを德とし、その皇子（八八）後嵯峨天皇を御位につけ奉れり。

三 兩皇統の交立

後嵯峨天皇の後には、その皇子（八九）後深草・（九〇）龜山の二天皇相ついで御位に即きたまひしが、後嵯峨上皇は龜山天皇の英明なるを愛したまひ、その御子孫をして永く皇位をうけしめんことを遺詔したまへり。よりて龜山天皇の次には、その皇子（九一）後宇多天皇立ちたまひしに、後深草上皇はこれを御不快に思召ししかば、時宗奏して上皇の皇子を後宇多天皇の皇太子となし奉る。（九二）伏見天皇是なり。これより幕府はいよいよ皇位の御繼承にまで立ち入り、伏見天皇の次にはその皇子（九三）後伏見天皇を立て奉りしかば、後宇多上皇は使を鎌倉に下して、後嵯峨上皇の遺詔に違ふを責めしめたまへり。執權貞時、よりて後深草・龜山兩上皇の御子孫代る代る御位に即きたまふべきことと定めたり。世に後深草上皇の御後を持明院統、龜山上皇の御後を大覺寺統と申し奉り、これより兩統たがひに立ちたまひて、（九六）後醍醐天皇に至れり。

第六章　北條氏の滅亡

一 後醍醐天皇

後醍醐天皇は英武におはして、かねてより北條氏の專横を憤り

【北條氏系圖】（二）

時頼━（六）時宗━（七）貞時━（九）高時━時行
　　┗（八）宗政━師時（モロトキ）

たまひ、後鳥羽上皇の御志をつぎて、政權を回復せんとの御志あり。時に鎌倉にては、元寇の後財政の困難となりたるに、執權高時は奢（オゴリ）に耽（フケ）りて政を顧みざりければ、人心次第に幕府をはなるるに至れり。

後醍醐天皇

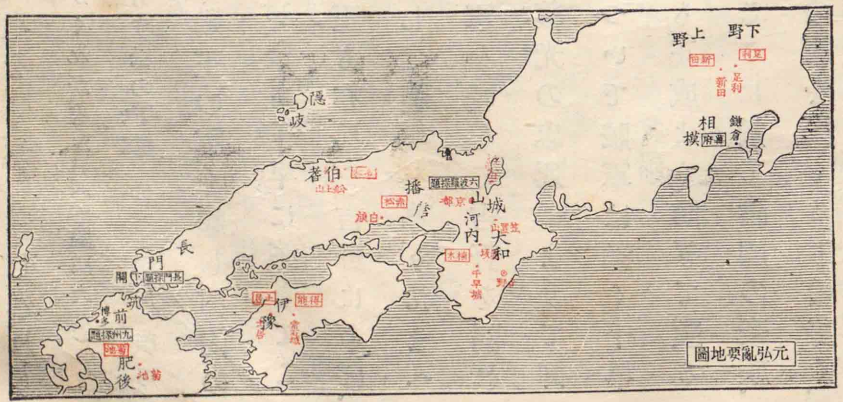
されば天皇は、この時に乘じて幕府を討たんと欲したまひ、日（ヒ）野（ノ）資（スケ）朝（トモ）・俊（トシ）基（モト）等と謀り、ひそかに諸國の武士を召したまひしが、事あらはれて果さず。

二　元弘の亂

さきに天皇は、後二條天皇の皇子邦（クニ）良（ナガ）親王を皇太子となしたまひしが、その薨じたまふに及び、天皇は御子の中より新に皇太子を選ばんとしたまひしを、高時は御意に背

きて、後伏見上皇の皇子量（カズ）仁（ヒト）親王を立て奉れり。ここに於て天皇ますます御憤あり、皇子護（モリ）良（ナガ）親王等をして僧徒に結ばしめ、再び事を擧げんと謀りたまへり。高時これを知り、元弘元年大兵を京都に上（ノボ）して廢立を行はんとするや、二（ニ）階（カイ）堂（ドウ）貞（サダ）藤（フヂ）これを諫むれども聞かず。天皇は神器を奉じて、ひそかに笠（カサ）置（ギ）山（ヤマ）に行（ミ）幸（ユキ）したまひ、高時は量仁親王を立てて天皇と稱せり。これを光（クワウ）嚴（ゴン）院（ヰン）

笠置山の圖



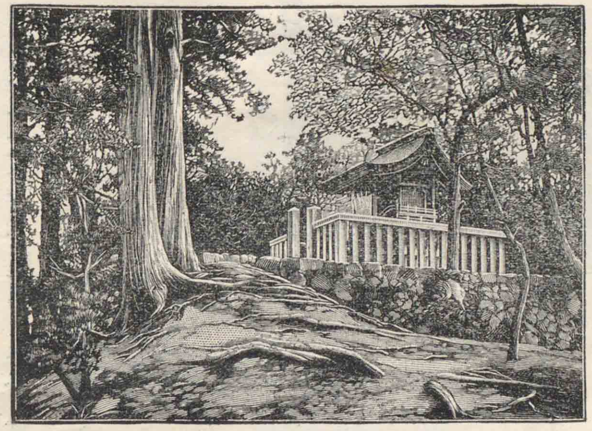
元弘亂要地圖

と申す。やがて賊軍は笠置を陥れ、畏くも天皇を隠岐に移し奉れり。

さして行く笠置の山を出でしより、あめが下にはかくれがもなし（後醍醐天皇）

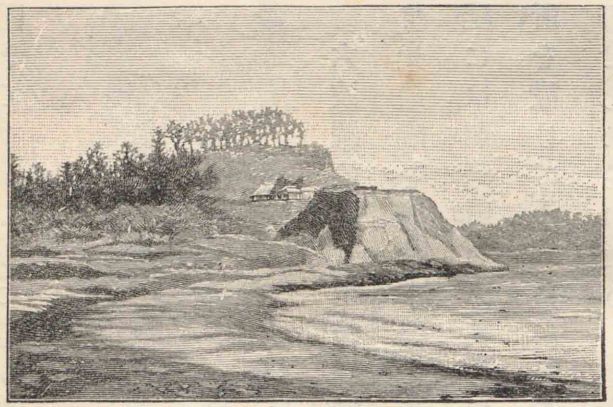
いかにせんたのむかげとて立ちよれば、なほ袖ぬらす松の下露（藤原藤房）

(三)諸國の勤王軍


千早城址の圖

これよりさき、楠木正成まづ勅を奉じて勤王の軍を起し、河内の赤坂城に據りしが、後ち千早に築きてこれに移り、護良親王も亦兵を吉野にあげ、令旨を四方に下して義兵を募りたまへり。高時さらに大軍を發して吉野を陥れしが、親王は村上義光の忠死によりて御身を遁れたまひ、ついで賊軍は悉く千早城におしよせしも、正成よく防ぎて頗る敵をなやませり。ここに於て諸國の豪族、傳へ聞きて、勤王の旗を揚ぐるもの多く、

(四)北條氏の滅亡


稲村ヶ崎の圖

赤松則村は播磨に、土居・得能氏は伊豫に、菊池武時は肥後に起りて、各々その勢を振へり。

天皇は隠岐におはして、この有様を聞こし召し、ひそかに島を出でて伯耆に渡りたまひ、名和長年によりて船上山を行在とし、山陰・山陽の兵を京に向はしめたまへり。時に高時の命にて西上せし足利高氏（のち尊氏）は、俄かに勤王の軍に加はり、則村等と共に六波羅を攻めてこれを陥れたり。この時新田義貞も護良親王の令旨を奉じて、兵を上野に起し、遂に鎌倉にうち入り、高時以下一族悉く自殺したりしかば、北條氏ここに亡びぬ。時に元弘三年（紀元一九九三）なり。頼朝幕府を

開きてより、ここに至るまで凡そ百五十年を經たり。

第二期

(後醍醐天皇より後龜山天皇まで)

第七章　建武中興　足利尊氏の叛　楠木正成・新田義貞等の勤王

(一)建武中興の新政　(一)中央

六波羅の陷るや、後醍醐天皇は船上山を發したまひ、途にて詔して光嚴院を退け、京都に還らせられて、新政を施したまへり。まづ朝廷には、㊀記錄所を再興して、天皇政を親からしたまひ、新に㊁雜訴決斷所を設けて、土地にかかる訴を聽かしめ、㊂武者所を置きて武士を監督せしめられたり。

(二)地方

また地方の政治を整へたまはんため、新に諸國に國司を任じ、殊に北畠顯家をして皇子義良親王を奉じて奥羽を鎭めしめ、足利尊氏の弟直義をして皇子成良親王を奉じて鎌倉に居て東國を治めしめ給へり。なほ又護良親王の征夷大將軍に任ぜられしを始め、尊氏・義貞・正成・長年等の功臣は皆諸國の國司に任ぜられ、それぞれ所領を賜はりたり。ここに於て天下一統して、政權再び朝廷に歸りぬ。やがて年號を建武と改められしにより、世に之を建武の中興といふ。

(二)中興の業破る

されど內奏盛んに行はれ、朝廷の賞罰しばしば公平を失ひて、不平の徒多く、加ふるに戰後の訴は日を追ふて積れども、朝臣政に慣れざるを以てこれを決する能はず、ますます紛爭を重ねたれば、人心漸く朝廷をはなれて、また武家の政治を慕ふに至れり。

㊀サセル忠功ナケレドモ、過分ノ昇進スルモアリ、定テ損ゾアルラント、仰デ信ヲトルモアリ、天下一統メヅラシヤ(二條河原落書の一部)

【新田・足利兩氏系圖】(一)

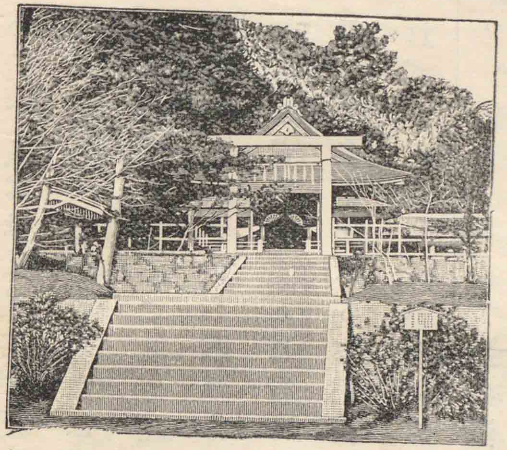
- 源義家—義國
  - 新田義重……朝氏—義貞
    - 義顯
    - 義興
    - 義宗
  - (朝氏)—脇屋義助—義治
  - 足利義康……貞氏
    - 尊氏
      - 義詮
      - 基氏
    - 直義

尊氏は義貞と同じく源義家の子義國の後

㊂尊氏の野心

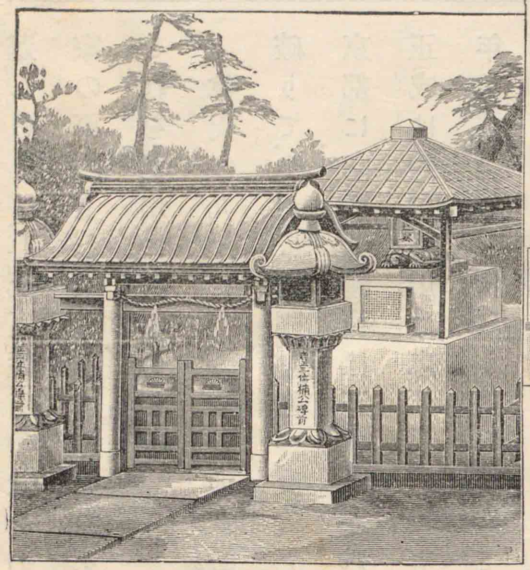
にて、もと源氏より出でながら、家臣の家筋なる北條氏の下に立つを快しとせず、はやくより源氏の幕府を再興せんとの志あり。さればひそかに新政を喜ばざる武士の心を收め、まづ威望高き護良親王と大功ある新田義貞とを除きて、その野心を果さんとせり。

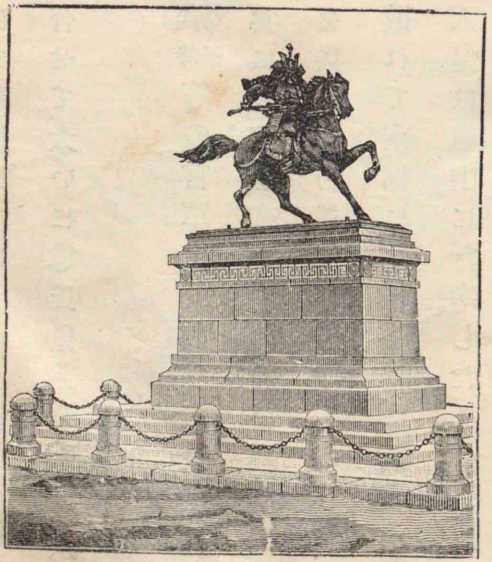
㊃尊氏の反



護良親王御木像と鎌倉宮

護良親王はやくも之を察し、尊氏を除かんとしたまひしに、かへつてその讒にあひて鎌倉に幽せられたまへり。のち北條高時の子時行兵を信濃に起して、鎌倉を攻むるに及び、直義これを拒ぐこと能はず、人をして親王を弑し奉らしめて西走せり。尊氏よりて自ら時行を討たんことを請ひ、御許を待たず東下して時行を破り、遂に鎌倉に留まりて反き、ほしいままに征夷大將軍と稱し、義貞を除くを名として兵を集めたり。





楠木正成銅像と湊川の碑

天皇は義貞に勅して、陸奥の北畠顯家と共に尊氏を討たしめたまふ。顯家いまだ到らざるに、義貞は賊軍と戰ひ、敗れて都に引き

（五）正成の忠死

返しければ、尊氏・直義その後を追ひて京都に攻め上れり。程なく顯家の軍西上し、義貞・正成等と力を合せて、大いに尊氏兄弟を破りて、これを九州に走らせたり。

尊氏の九州に到るや、菊池武敏（武時の子）等の官軍を筑前多多良濱に破りて、やがて西國を從へ、直義と共に大軍を率ゐ、海陸竝び進みて京都に向へり。義貞は正成とこれを兵庫に防ぎたれど、戰利あらず、正成は遂に湊川に忠死し、義貞も敗れて京都に返れり。時に延元元年（紀元一九九六）五月なり。ここに於て天皇は叡山に行幸したまひ、尊氏等再び京都に入れり。この後も官軍しばしば敗れて、諸將相ついで戰死せり。

第八章　吉野の朝廷

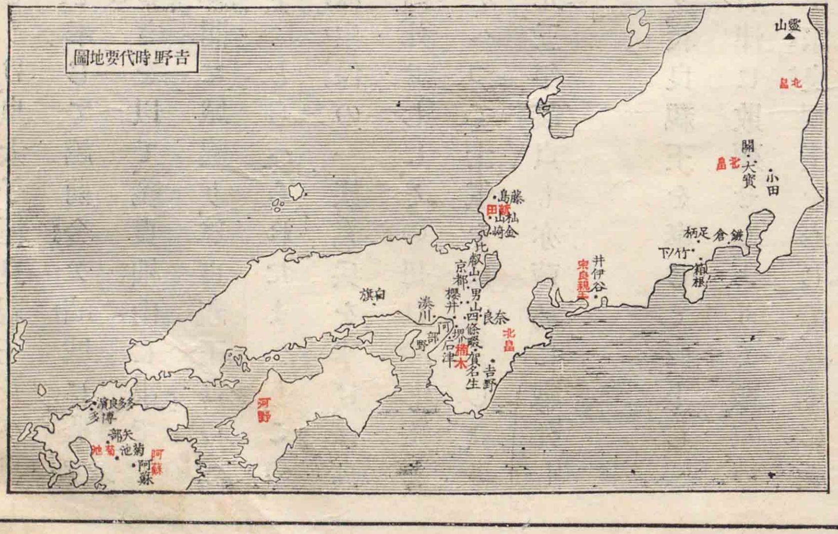
（一）吉野の遷幸

尊氏は入京せる後、賊名を避けんがために、光嚴院の御弟光明院を立てて天皇と稱し、さらに使を叡山に遣はして、後醍醐天皇の御還幸を請ひ奉れり、天皇かりにこれを許したまひ、京都に御還りありしに、尊氏直ちに幽し奉りしかば、天皇は延元元年の末、ひそかに神器を奉じて吉野に遷りたまへり。

此にても雲井のさくら咲きにけり、ただかりそめの宿と思ふに、（後醍醐天皇吉野行宮にての御製）

（二）北國の形勢—義貞の戰死

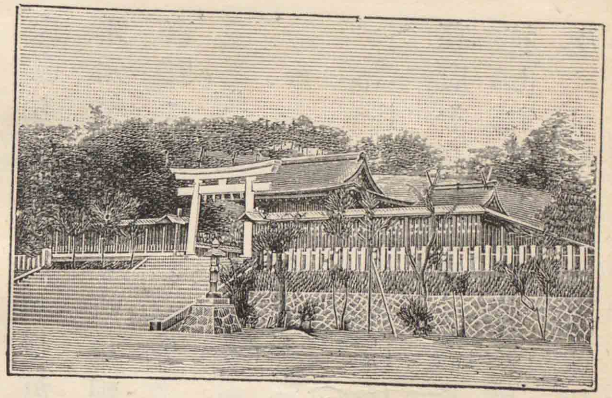
これより後、尊氏はほしいままに幕府を京都に開き、吉野の朝廷に反抗したりしかば、是より戰亂全國に及べり。北國に於ては新田義貞かね



吉野時代要地圖

㈢東國の形勢―北畠顯家戰死、北畠親房の經略

て天皇の勅をうけ、皇太子恒良親王及び皇子尊良親王を奉じて、越前金ケ崎城に據りしが、兵食乏しきを以て、義貞杣山に出でてこれを調ふる間に城陥り、尊良親王は自殺せられ、皇太子はとらへられたまへり。この頃杣山には、瓜生保の一族義兵を擧げ、保は弟等と共に討死せしに、その母は少しもこれを悲まず、かへつて士氣をはげましぬ。されどのち延元三年義貞も亦藤島に戰死して、北國の官軍また振はず。



藤島神社

この頃陸奥の北畠顯家も、勅により義良親王を奉じて西上し、延元三年賊將高師直と戰ひて和泉の石津に敗死せり。よりて顯家の弟顯信は、父親房と共に義良親王及び宗良親王を奉じて、陸奥に赴かんとし、海上暴風にあひ、義良親王・顯信等は伊勢に吹きもどされ、親房獨り常陸に到りて東國の官軍を指圖し、かたはら陣中に筆をとりて神皇正統記を著はし、吉野朝廷の正統なるを明かにしたり。また宗良親王は遠江の井伊谷に據りて、諸所に轉戰したまへり。

【北畠氏系圖】

村上天皇―具平親王……北畠親房―顯家
　　　　　　　　　　　　　　　　└顯信

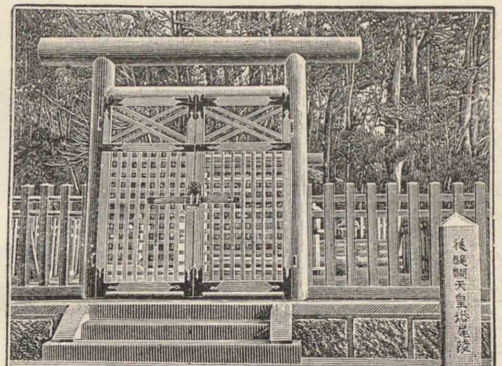
君がため世のためなにか惜しからむ棄ててかひある命なりせば　（宗良親王）

身のうさはさもあらばあれ治まれる世を見るまでの命ともがな　（北畠親房）

北畠親房

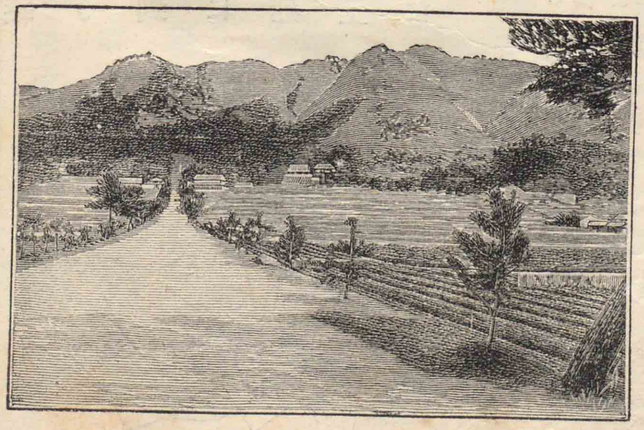
㈣近畿の形勢―楠木正行の戰死

時に吉野の朝廷にては、延元四年後醍醐天皇叡慮安からざる中に病を以て崩ぜられ、義良親王位に卽きたまふ。これを後村上天皇（九七）とす。楠木正成の子正行は、その母に勵まされてよく父の遺訓を守


後醍醐天皇御陵

り、一族を率ゐて行宮を守り奉りしに、程なく親房も吉野に返り來りて、官軍の勢また振へり。然るに正平三年（紀元二〇〇八）高師直の大軍來り攻むるに及び、正行死を決して、これを河內の四條畷に防ぎてつひに討死し、天皇は難をさけて賀名生に遷りたまひ、朝廷の柱石とたのまれし親房もついで薨ぜり。

かへらじとかねて思へば梓弓、無き數にいる名をぞとどむる（楠木正行）


四條畷の圖

【楠木氏系圖】

橘諸兄……楠木正成—正行
　　　　　　　　　　—正儀

【菊池氏系圖】

藤原隆家……菊池武時—武重
　　　　　　　　　　—武敏
　　　　　　　　　　—武光—武政—武朝

(五) 九州の形勢—菊池武光の忠節

九州地方にありては菊池武敏の弟武光、征西將軍懷良親王を奉じて、賊將少貳氏を筑後川に破り、武光の子孫も亦常に節を變ずることなかりしも、遂にその家衰へ、九州の官軍もまた振はずなりぬ。

(六) 後龜山天皇の京都還幸

かくて官軍は到る處にその勢を失ひ、ついで後村上天皇崩じて（九八）後龜山天皇の御代となり、勢いよいよ振はず。また京都にては、これより先き尊氏は弟直義と和せず、遂にこれを鎌倉に攻め殺し、部下の將士も屢〻叛き、內爭絶ゆるひまなき間に尊氏死し、子義詮を經て義滿に至れり。義滿すなはち大內義弘を吉野に遣はして、後龜山天皇の御還幸を請ひ奉らしめたれば、天皇は、なほも戰亂のつづきて人民の困苦を重ねんことをあは

【天皇御系圖】(三)

後醍醐天皇—尊良親王
　　　　　—護良親王
　　　　　—宗良親王
　　　　　—恒良親王
　　　　　—成良親王
　　　　　—懷良親王
　　　　　—(九七)後村上天皇—(九八)後龜山天皇

後伏見天皇—光嚴院—崇光院
　　　　　　　　　—後光嚴院—後圓融院—(九九)後小松天皇
　　　　　—光明院

れみたまひ、これを許して京都に還らせられ、神器を後小松天皇に傳へたまふ。時に元中九年（紀元二〇五二）にして、後醍醐天皇の吉野に遷幸したまひてより、ここに至るまでおよそ六十年なり。

第三期

第九章　室町幕府

（後小松天皇より正親町天皇まで）

㈠室町幕府の成立

足利義滿

尊氏より義詮までの間は、功臣恩になれて、往往その命に從はざりしが、義滿に至り、文武に長じたる細川頼之の輔佐によりて、山名氏清を除きて、父祖のおさゆること能はざりし豪族を威壓し、ついで後龜山天皇の御還幸を仰ぎて、多年の紛爭を鎭めたれば、これより義滿は征夷大將軍として大いに威を振ひ、幕府の制度を整へたり。義滿は新に花御所を室町に設けて、政をここに執りしより、世に室町幕府といふ。

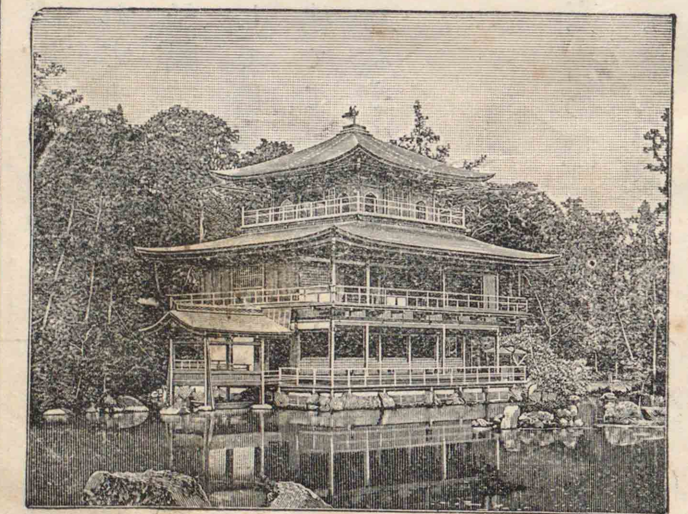
㈡室町幕府の組織　（一）幕府

金閣

室町幕府の組織は、概ね鎌倉幕府にならひ、將軍の次に執權の職を行ふものを管領といひ、斯波・細川・畠山の三氏より之に任ずるを以て、これを三管領と稱す。その下に政所・問注所・侍所あり、中にも侍所の權力最も強く、その長官を所司といひ、山名・一色・赤松・京極の四氏の中よりこれを命じたればこれを四職といふ。また

（二）地方

地方には、鎌倉に關東管領、奥羽と九



㊂義滿の驕奢

㊉關東管領
（一）關東管領の起り

州とに探題を置きたる外、諸國に守護・地頭ありき。

かくて義滿は幕府の基を固めたれども、その勢の盛んなるにつれて漸く奢にふけりたり。義滿職を子義持に讓りたる後、太政大臣の高官に昇りしが、やがてこれを辭して出家し、別莊を北山に構へて林泉の美を極め、その內に金閣を建てて風流をつくし、また出入の行列を上皇にならふなど、僭上のふるまひも少なからず。世呼んでこれを公方と稱せり。

第十章　關東管領　嘉吉の亂

義滿の後に、子義持・孫義量相つぎて將軍となりしが、室町幕府はこの頃より漸く衰へはじめ關東管領家の勢はかへつて將軍をしのぐに至れり。

初め尊氏は、その子基氏を關東管領となし、上杉氏をその執事に

（二）關東管領の反抗（應永の亂）

（三）關東管領家の滅亡（永享の亂）

任じ、賴朝以來の要地なる鎌倉にありて、東國を鎭めしめたり。基氏はよく治めたるも、その後勢漸く加はり、ややもすれば幕府を輕んずるに至れり。

その頃周防の豪族大內義弘は富强をたのみて將軍を輕んじ、後小松天皇の應永六年遂に兵を擧げ、基氏の孫滿兼は遂に之に應じたりしが、義滿直ちに義弘を亡ぼしたるを以て、滿兼やむなく將軍と和せり。これを應永の亂といふ。

そののち幕府にては、義量早く卒して子なく、一旦出家したる叔父義敎入りて將軍となれり。時に滿兼の子持氏關東管領たりしが、自ら將軍職を望みて得ざりしかば、不平に堪へずして屢〻幕府に反抗せり。執事上杉憲實諫むれども聽かず、かへつて之を殺さんとせしかば、義敎すなはち憲實を助け、持氏を討ちてこれを滅ぼしたり。時に後花園天皇の永享十一年（紀元二〇九九）にして、世にこれを永享の亂

【足利氏系圖】(二)

將軍家＝尊氏─義詮─(一)義滿─(二)義持─(三)義量
　　　　　　　　　　　　　└(四)義教─(五)義勝
　　　　　　　　　　　　　　　　　　└(六)義政
關東管領＝(一)基氏─(二)氏滿─(三)滿兼─(四)持氏

といふ基氏よりここに至るまで凡そ九十年にして、關東管領家亡び、これより東國の實權は上杉氏の手に移れり。

㊁嘉吉の亂

足利義教

將軍義教は性果斷にして、幕府衰運の後をうけてその威を張らんとし、既に持氏を滅ぼし、またしきりに强族の勢をそがんとせしかば、これを怨むもの少なからず。たまたま赤松滿祐おのが領地の削られんとするを聞き、嘉吉元年(紀元二一〇一)遂に將軍を弑して、本國播磨に走れり。よりて義教の子義勝立ち、山名宗全等をして滿祐を討ち滅ぼさしめたり。これを嘉吉の亂といふ。ここに於て赤松氏衰へ、一時衰微せる山名氏再び興れり。

第十一章　應仁の亂

㊀亂の原因

(一)將軍義政の非政

將軍義勝早く卒して、弟義政幼にして職をつぎたれば、管領權を專らにして、將軍の威ますます衰へたり。然るに義政長じて後も、これを回復せんとはせず、夫人富子と共に常に遊樂を事とし、費用足らずして屢〻重稅を課し、士民の苦しみを顧みず。後花園天皇詩を賜ひて、これを戒めたまひしことさへありき。

殘民爭採首陽薇　處處閉爐鎖竹扉　詩興吟酸
春二月　滿城紅綠爲誰肥（後花園天皇御製）

(二)勝元・宗全の爭

足利義政

そのころ管領家のうち、斯波・畠山の兩氏は、共に家督の爭ありてその家亂れ、管領細川勝元獨り威權あり。その妻の父山名

宗全亦嘉吉の功によりて頗る勢あれば、遂に勝元と權力を爭ひて、互に相反目せり。然るにまた、將軍義政はじめ子なく、弟義視を世嗣と定め、勝元をその後見となしたるに、後義尚の生るるに及び、母富子これを立てんことを望み、ひそかに宗全に託しぬ。ここに於て宗全は義尚を奉じ、勝元は義視を戴き、各〻斯波・畠山兩家の味方をかたらひて相爭ふに至れり。

應仁亂の圖

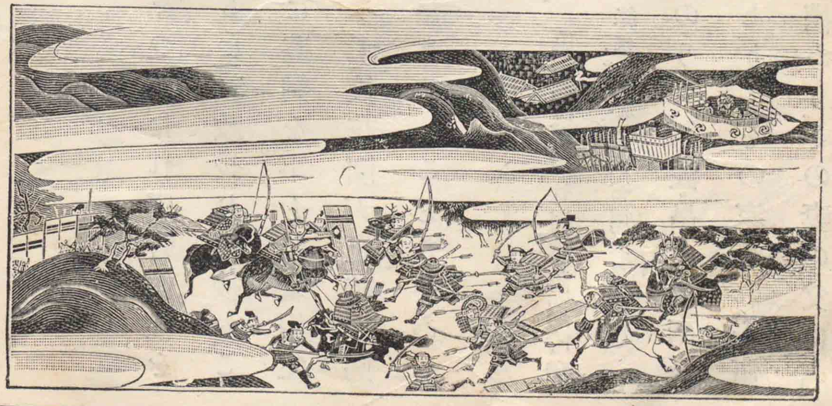
將軍家＝義政―義尚
　　　　　└義視

畠山家＝持國―政長(養子)
　　　　　└義就

斯波家＝義健―義廉(養子)
　　　　　└義敏(養子)

戰況

かくて後土御門天皇の應仁元年(紀元二一二七)勝元・宗全の二人、各〻味方の大軍を諸國より集めて、いよいよ戰端を開きぬ。これより勝元は東方に陣し、宗全は西方に陣して、京都の內外に戰ひて互に勝敗あり。既にして宗全・勝元相ついで卒し、諸將も戰に倦むに至り、文明九年(紀元二一三七)兩軍始めて解けたり。これを應仁の亂といふ。



亂の結果

かかる大亂の前後十一年に亘りしこととて、京都はおほかた兵火にかかりて、花の都も燒野とかはり、朝廷は衰へて、公卿は多く地方に落ちゆき、また幕府の威信は全く失せて、豪族各地に據りて、漸く亂世に移りゆけり。

なれや知る都はのべの夕雲雀、あがるを見ても落つる淚は、(飯尾彥六左衞門)

第十二章　室町時代の文物・佛敎

東山時代

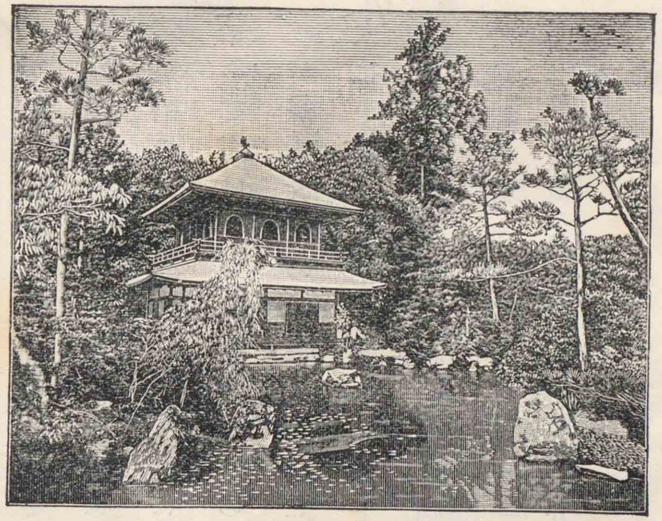
將軍義政は、戰亂の中に職を義尚に讓りし後、東山に別莊を營み、金閣にならひて銀閣を作り、ここに和漢の名畫・古器を集め、しばし

上右圖 明兆筆五百阿羅漢の畫　上左圖 雪舟筆山水畫と其の像　下圖 狩野元信筆山水畫

㈡美術工藝

㈠繪畫

銀閣



ば茶會を催して、風流の遊びにふけりたり。されば義滿以來漸く復興したる文藝は、ここに至りて大に發達したり。世にこの時代を東山時代といふ。

わが庵は月待山のふもとにて、かたぶく
空の影をしぞ思ふ　（足利義政）

将軍の風流につれて、豪奢の風世に行はれ、ために美術・工藝の進歩を促せり。まづ繪畫には、さきに僧明兆出でて佛畫をよくせしが、義政の頃には、僧雪舟明に遊びて歸り、殊に山水の墨繪にその妙筆をふるひ、ついで狩野元信(古法眼)は和漢の長所をとりて狩野の一派をはじめ、元信の

(二)漆器
(三)陶器
(四)金工
三佛教
(一)禪宗
(二)一向宗・法華宗
四學問

妻の父土佐光信は大和繪を再興したり。また漆器の術大に進み、蒔繪は殊に精巧を極め、陶器も茶道の流行につれて、その製法ますます進歩し、後ち祥瑞五郎大夫明に渡りてその製法を傳へ、唐津燒を起せり。なほ金工の名人に後藤祐乘あり、後世その道の祖と仰がる。

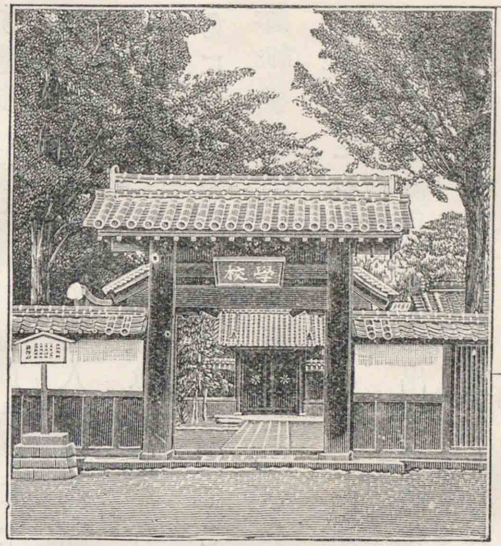
この時に當り、佛教は鎌倉時代の後をうけて、禪宗盛んに上流社會に行はれ、殊に足利氏は深くこれを信じ、尊氏・直義は僧疎石(夢窓國師)を尊び、また全國に安國寺を建てしめ、義滿は京都及び鎌倉に五山を定めたり。民間には一向・法華の兩宗廣く行はれ、義政の頃一向宗に兼壽(蓮如上人)出でて教化につとめ、盛んに男女の信仰を得て、本願寺の勢俄かに盛んとなれり。

京都五山―南禪寺(五山の首)天龍寺相國寺建仁寺東福寺萬壽寺
鎌倉五山―建長寺圓覺寺壽福寺淨智寺淨妙寺

學問は、戰亂の世の中なりしを以て、一般に衰へしも、公卿には一

室町時代の風俗

(一)儒學・詩文
(二)和歌・連歌
足利學校と上杉憲實の寄進書奥書
(三)謠曲・御伽噺
(五)風俗



上杉安房守藤原憲實寄進
禮記正義卷第七十

條兼良博學の名高く、また五山の僧侶には、儒佛に精しく詩文に巧みなるもの少なからず、學問の業は次第にその手に移れり。武人中上杉憲實は下野の足利學校を再興し、太田道灌は和歌をよくし、なほ和歌の一體なる連歌起りて宗祇最も名あり。また義滿・義政は能樂を好みしより、謠曲なる一種の文學これに伴ひて行はれ、御伽噺もこの頃に始まれるもの多し。

露おかぬかたもありけり夕立の空よりひろき武藏野の原　（太田道灌）

この時代には幕府は京都にありしを以て、鎌倉時代の剛健なる

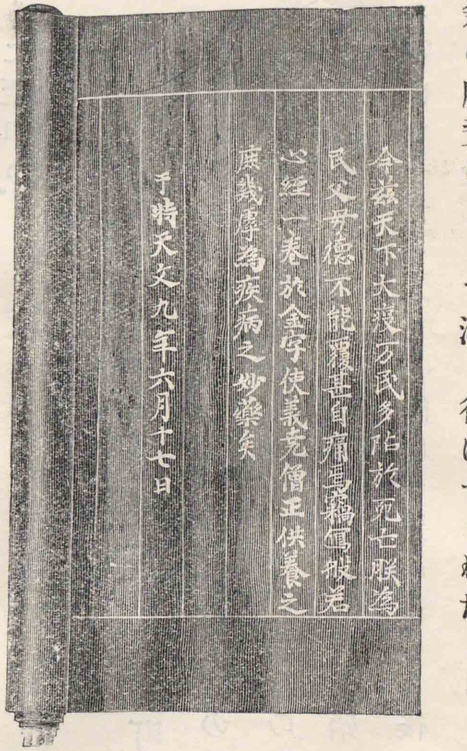
皇室の式微

氣風次第に失せ去ると共に、禪宗の影響をうけて、一般に淡泊にして氣品あるを好むに至り、遊戯にも茶の湯・香合・挿花など盛んに行はれたり。家屋は多く書院造となりて、玄關・床の間等を設け疊を敷きつめ、武士の衣服は、素襖より後には肩衣・半袴などにうつり、女子は小袖を袿衣として着る風行はれ、食物にも種種料理の式を備ふるに至れり。

第十三章　皇室の式微　室町幕府の末路

京都はさきに應仁の大亂に荒れはて、その後國内にも戰亂うち續ける間に、後土御門(一〇三)・後柏原(一〇四)・後奈良(一〇五)・正親町の四天皇相つぎて世を知しめしたまへり。この頃御料所より收入殆んど絕えたれば、朝儀を擧げさせたまふこと能はず。畏れ多くも後土御門天皇の御大葬は佐佐木高賴の獻金により、後柏原天皇御卽位の大禮は本願寺光

兼の獻資によりて、漸く行はせられたり。



後奈良天皇宸筆經文の末

ことに後奈良天皇の御代は、御衰微最も甚だしく、内裏の御垣破れて内侍所の燈火は遠くもれ、宸筆の色紙・短册を下して、その謝禮を以て御用度を補ひたまひしといふ。されど天皇は、かかる際にも深く下を憐みたまひ御みづから經文を寫して民の疾苦をはらはせたまへることあり。又敬神の御志厚く、いたく伊勢神宮の荒廢をなげきたまひて、度度之を修めんとしたまへり。ここに於て慶光院清順といへる尼、勅許を得て廣く資を諸國に募り、遂に外宮を造營し

奉り、諸國の豪族も亦心を皇室に傾け、大内義隆・毛利元就は、それぞれ天皇及び次の正親町天皇の御卽位の資を獻じ、やがて織田信長の起るに及びて、大に朝威を復興し奉れり。

天皇御系圖（三）

光嚴院─┬─崇光院……一〇一後花園天皇─一〇二後土御門天皇─一〇三後柏原天皇─一〇四後奈良天皇─一〇五正親町天皇─誠仁親王─一〇六後陽成天皇
　　　　└─後光嚴院─後圓融院─後小松天皇─一〇〇稱光天皇

二　幕府の衰微

幕府もまた應仁亂後はますます衰へて、權力次第に下にうつり、將軍はただ名のみにして、臣下のために自由に廢立せらるる淺ましき有樣となりぬ。獨り將軍義尙は文武を兼ね備へて、幕府の威權を回復せんとはかりしも、不幸にして早く薨じ、義視の子義稙入りて職をつぐ。時に細川勝元の子政元權を專らにし、義稙を排して義澄を立てたり。義澄の子義晴・孫義輝相つぎて將軍たりしが、この頃細川氏の家臣三好氏強大となりて主家を凌げり。既にして三好氏

【足利氏系圖】(三)

義政(七)―義尚
　├政知(堀越公方)―茶々丸
　│　　└義澄(九)―義晴(一〇)―義輝(一一)
　│　　　　　　　│　　　　　└義昭(一三)
　│　　　　　　　└義維―義榮(一二)
義視―義稙(八)

の臣松永久秀また三好氏に代りて威權を振ひ、正親町天皇の永祿八年(紀元二二二五)將軍義輝を弑して義榮を立てたり。よりて義輝の弟義昭は難を地方に避け、遂に織田信長にたよるに至れり。

第十四章　群雄割據

(一)戰國時代

應仁亂後京都の有樣右の如くなれば、地方には幕府の威令少しも行はれず、群雄各地に起りて、相爭ふこと百餘年の久しきに亙れり、之を戰國時代といふ。この間に、從來の名家は概ね衰亡して、實力あるもの次第に強大となれり。

(二)東北方面の形勢

(一)關東の分裂

關東にては、さきに持氏亡びてより、上杉氏實權を握りしが、やがて幕府に請ひて、持氏の子成氏を鎌倉に迎へて關東管領となせり。然るに、成氏は上杉氏を父の仇なりとして怨み、上杉氏等これを攻

【古河公方系圖】

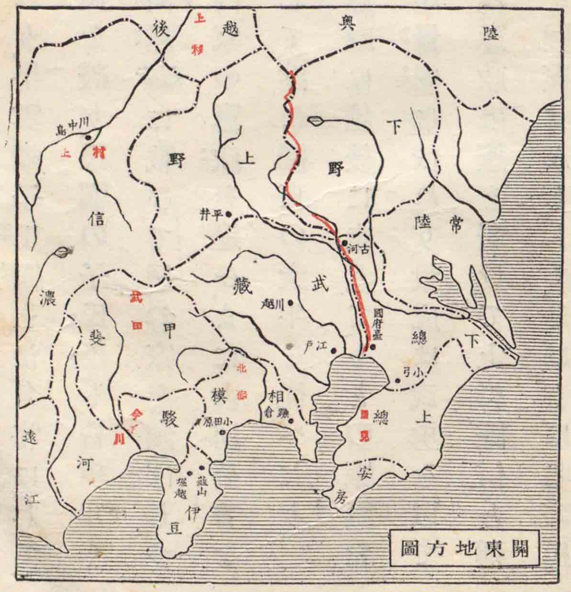
持氏―成氏―政氏―高基―晴氏―義氏
　　　　　　　└義明(小弓公方)

【兩上杉氏系圖】

上杉頼重―○―憲顯(山内)……憲實―……顯定……憲政
　　　　　　　　　　　　　　└憲忠
　　　└○―○―顯定(扇ヶ谷)……定正……朝定

太田道灌木像と同人の筆蹟

めて、成氏を下總の古河に走らせ、ついで義政の弟政知を伊豆の堀越に迎へて關東の主となし、以て古河に對したれば、これより古河・堀越の兩公方並び立ち、關東の諸將は二つに分れて相爭へり。時に上杉氏にも山内・扇谷の兩家あり、扇ヶ谷家には賢臣太



關東地方圖

田道灌出でて、江戸城を築きて古河に備へ大に勢ありしが、のち山内家の讒によりて殺され、兩家また相爭ひて共に衰ふるに至れり。

北條早雲及び氏康

(二) 北條氏の興起

この時に當り、北條早雲浪人より起り、後土御門天皇の延德三年（紀元二一五一）堀越公方家を滅ぼして伊豆を取り、更に相模の小田原城を奪ひて之に據れり。早雲の子氏綱また名將にして、房總の豪族里見氏を破り、氏綱の子氏康も智勇すぐれ、兩上杉の軍と河越（武藏）に戰ひて扇ヶ谷家を滅ぼし、ついで山内家の憲政を追ひ、また古河公方をも滅ぼして、遂に關東の大半を從へたり。

(三) 上杉謙信と武田信玄との爭

上杉憲政は越後に走りて、もとの家臣たりし長尾景虎に依れり。景虎は武勇を以てあらはれ、憲政の讓を受けて上杉謙信と稱し、關東を回復せんとして、しばしば北條氏

上杉謙信とその筆蹟

武田信玄とその筆蹟

と兵を交へたり。時に甲斐に武田信玄あり、頗る智謀に富み、信濃を侵して村上義清を越後に追ひければ、謙信はまた義清を助けて、しばしば信玄と川中島（信濃）に戰へり。

(四) 奥羽の伊達氏

なほ奥羽によれる諸族の中にて、伊達氏最も勢を得たりしが、その地東北にかたよれるを以て、自ら中央の大勢に影響する所少なかりき。

(三) 近畿・東海方面の形勢

(一) 近畿の諸族

近畿・東海道方面にありては、近江の淺井氏、美濃の齋藤氏、越前の朝倉氏等次第にあらはれ、殊に尾張の織田氏は、もと管領斯波氏の家臣にし

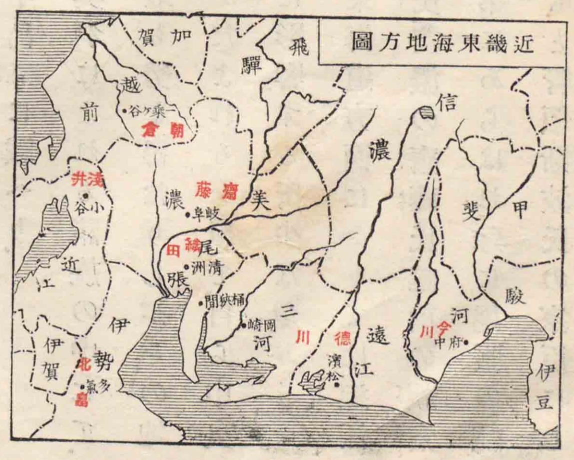
(二)今川義元と織田信長との爭

て、信秀・信長父子に至りて大に勢を得たり。時に駿・遠に今川義元あり、三河を併せて、正親町天皇の永祿三年(紀元二二二〇)さらに尾張に攻め入り、桶狹間に信長と戰ひて敗死し、これよりその家衰へ、遂に信玄に滅ぼされたり。

四 西南方面の形勢

毛利元就とその筆蹟

中國にては、出雲に尼子氏起り、山名氏の舊領を併せて山陰道の大半を從へ、また屢〻大內氏と戰へり。大內氏は義興の時安藝・周防・長門・石見・豐前・筑前の六國を有し、かつ明國と貿易の利を收め、富强たぐひなか



近畿東海地方圖

(一)毛利元就の勃興

りしが、その子義隆に至りて漸く奢侈に流れて武備を怠りければ、遂に家臣陶晴賢のために弑せられたり。ここに於て義隆の將毛利元就義兵を擧げ、後奈良天皇の弘治元年(紀元二二一五)晴賢を嚴島に討ち滅ぼして大內氏に代り、更に尼子氏をも滅ぼして、遂に十餘國を領したり。

(二)四國の長曾我部氏

四國にては、管領家の一族細川氏の衰ふるに及び、長曾我部元親土佐より起りて四國の大部を併せ、

(三)九州の三氏

九州には、豐後の大友・肥前の龍造寺・薩摩の島津の三氏漸く勢を得たり。中にも大友氏は、支那及び新に來航せる歐羅巴人

中國四國九州地方圖

と貿易してその國富みたりき。

第十五章　明との交通　高麗と朝鮮　歐羅巴人の來航

㊀支那との交通

永樂通寶

支那との交通は元寇の後もわが商船なほ私に往來したりしが、足利尊氏天龍寺を建つるや、その費用を得んがために、船を元に遣はして通商せしめたり。やがて元亡びて明代るに及び、義滿はこれと交を修めて貿易の利をはかりしが、その利を求むるに急なるより、明より日本國王の號を受け、自らも明に對し臣と稱するなど甚だしき失體ありしかば、その子義持は、これを恥ぢて一旦明との交通を絶ちたり。されど義教またこれを開き、義政は錢を彼に請ひて財政を補ひたりしが、後ち幕府の衰ふるに及び、大內氏專ら兩國の貿易の事にあづかれり。

㊁高麗と朝鮮

【高麗王系圖】
(一)太祖王建……(三一)恭愍王……(三四)恭讓王

高麗は、弘安の役に元の軍に加はりしより、財力大に衰へ、わが邊民の侵入にあひて、その勢いよいよ振はず。遂に李成桂なるもの功をこの間に立て、吉野の朝廷京都に還りたまひし年、高麗王を廢して自ら王となり、國を朝鮮と號せり。これ今の李王家の祖にして、やがて使を足利氏に通じ、のち對馬の宗氏その貿易の事を掌れり。

㊂邦人の冒險

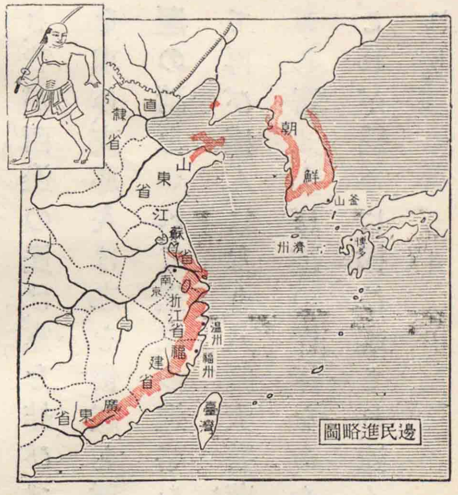
これより先き、我が西邊の民は、黨を結びて支那・朝鮮に渡り、武力を振ひて商利を求め、支那人は之を倭寇と稱して大に恐れたり。義滿は明及び高麗の請をいれて、邊民の進略を禁ぜしが、のち幕府の衰ふるにつれて再び盛んになり、八幡大菩薩と書ける旗をおし立てて彼の地におし寄せ、大に彼の沿岸をあらしたり。されば我が國民の冒險心は、これが爲めに振ひ起され、遠く南洋諸島に移住するものあるに至れり。

㊃歐羅巴人の來航

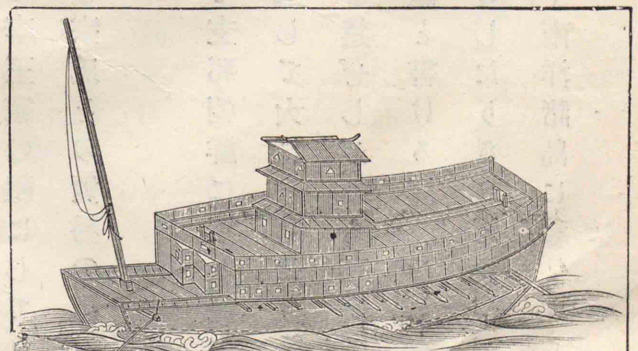
邊民と用船圖

(一)鐵砲の傳來

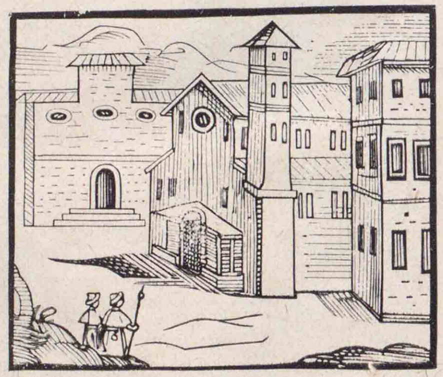
かく我が國民の海外に發展する時に當り、歐羅巴にても航海の術大に進み、東洋に往來するもの漸く多く、後奈良天皇の天文十二年（紀元二二〇三）葡萄牙の商船始めて我が種子島（大隅）に來りて、鐵砲を傳へたり。折しも戰國時代のこととて、鐵砲は忽ち四方に廣まりて、わが戰術・築城法などを一變せしめぬ。やがて西班牙人もまた來り、これより西洋人との通商行はれたりしが、當時わが國にては、これらの外人をす

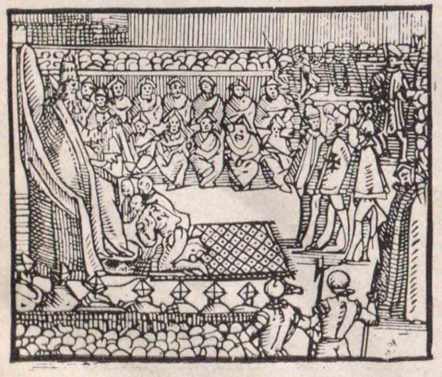


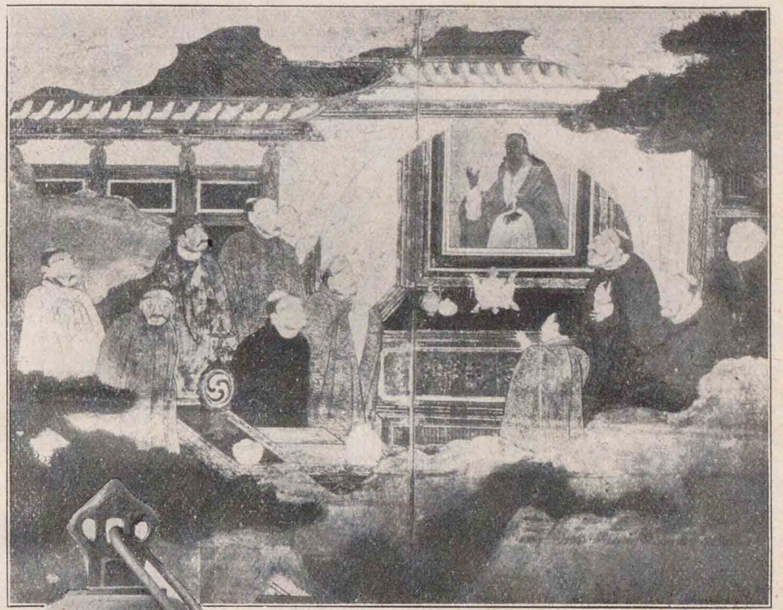
邊民進略圖



サビエル像


豐後の學院の圖


歐洲遣使法王拜謁の圖

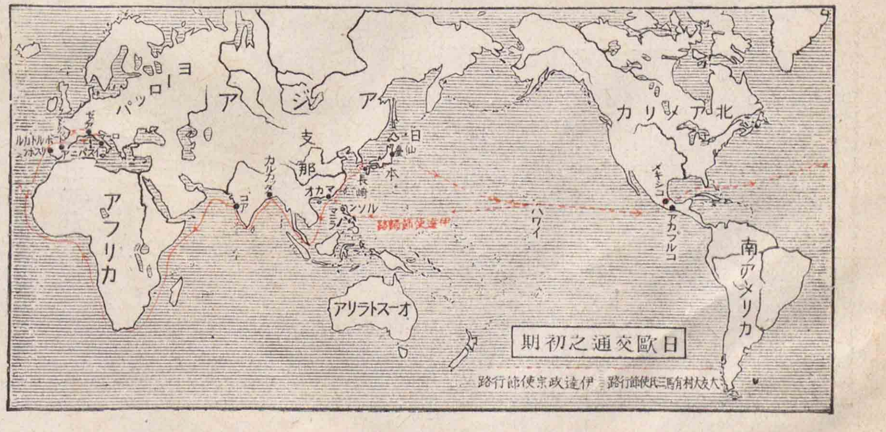


南蠻人渡來繪屛風

南蠻寺の鐘

黒田如水　黒田長政

ローマ字刻印(三種)
大友宗麟



(二)キリスト教の傳來

べて南蠻人と呼べり。

この頃キリスト教もまた傳來したり。天文十八年ザビエルといへる葡萄牙の宣教師鹿兒島に來りて、始めてキリスト教を傳へしが、世にこれを天主教又は切支丹宗といへり。その教は、九州・中國より次第に奥羽地方にまでひろまり、教會堂・學校など諸處に設けられて、西洋の學藝を習ひ、また女子にも熱心なる信者ありき。中にも信長はその布教を許して之を保護し、九州の大友・大村・有馬の三氏は篤くこれを信じ、遙かに使を羅馬に遣はすに至れり。

カネキン、メリヤス、ラシヤ、サラサ、ボーロ、カステラ、
パン、タバコ、ボタン、サボン、カルタ、
(葡萄牙語より起れる通用語)

第四期 (正親町天皇より後陽成天皇まで)

第十六章　織田信長

(一)信長の入京とその勤王

織田信長とその朱印

織田信長、さきに桶狹間の戰に勝ちてより、武名俄かにあがり、ついで三河の德川家康と結びて東方にそなへ、やがて美濃の齋藤氏を滅ぼして岐阜に移れり。正親町天皇遙かに信長の武名を聞こしめされ、叡感の勅を下して、御料所の回復を命じたまふ。信長大に感激し、天下を平げて大御心を安んじ奉らんことを期し、たまたま足利義昭のたより來りしを機とし、永祿十一年(紀元二二二八)之を奉じて入京し、遂に義昭を立てて將軍となしたり。信長は父信秀の志をうけて勤王の念深く、やがて内裏を修造し、御料を上り、或は朝廷の儀式を再興し、公卿の領所を復したれば、久しく衰へたる朝廷の御有樣はやうやくもとに立ちなほるに至れり。

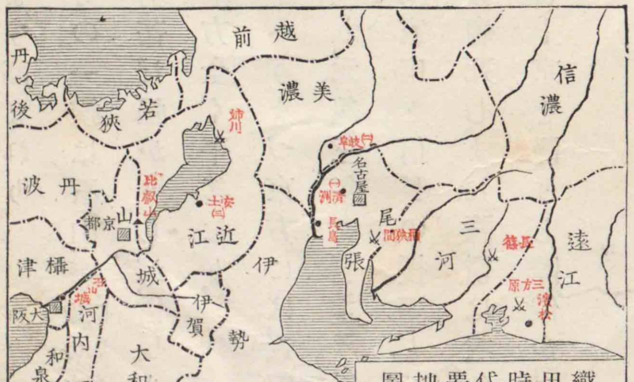
(二)近畿の平定

(一)姉川の戰

時に越前の朝倉義景信長の命に應ぜざるを以て、信長これを伐ちしに、近江の淺井長政・叡山の僧徒等また義景を援けたり。元龜元年(紀元二二三〇)信長は朝倉・淺井の兩軍を姉川に破り、ついで叡山を燒きはらひて、僧徒の橫暴をこらしたり。

(二)足利氏の滅亡

このころ將軍義昭漸く信長の威名を忌みて、之を除かんとせしが、天正元年(紀元二二三三)かへつて信長に追はれ、足利氏遂に亡びたり。この年信長は淺井・朝倉兩氏をも攻め滅ぼし、間もなく壯大なる城を近



織田時代要地圖

(三) 安土城

江の安土に築き、ここによりて威勢ますます高まれり。

(四) 一向一揆の亂

されど一向宗の一揆はなほ屈せず。本願寺の一揆は石山城(後の大阪城)により、伊勢長島の徒と共に信長に抗し、勢甚だ强かりしが、信長まづ長島を平げ、のち本願寺と和して、近畿地方全く平ぎたり。

㊂東國方面＝武田氏の滅亡と上杉氏

(一) 三方ケ原の戰

(二) 上杉謙信の病死

かかる間に、東西の群雄もまた信長と爭へり。まづ東方には、武田信玄・上杉謙信共にかねてより西上の志あり、元龜三年(紀元二二三二)信玄自ら大軍を率ゐて遠江に攻め入り、德川家康と信長の援軍とを三方原に破りしかど、後ち間もなく陣中に病死し、また謙信は次第に北陸を從へ、天正六年(紀元二二三八)いよいよ上京を謀りし際俄かに卒して、何れもその目的を果さず。

(三) 武田氏の滅亡

信玄の卒後その子勝頼また屢〻德川氏と戰ひしが、長篠(三河)の役に大敗してその勢大いに衰へ、遂に天正十年(紀元二二四二)信長・家康等の聯合軍に攻め滅ぼされたり。時に勝頼の妻北條氏歳なほ若きも、貞節のほまれ高く、夫に殉じて自刄せり。

黒髪のみだれたる世ぞはてしなき、おもひにきゆる露の玉の緒、(勝頼夫人の辭世)

㊃中國方面＝毛利征伐

【毛利氏系圖】

大江音人……廣元……毛利元就┬隆元—輝元
├吉川元春—廣家
└小早川隆景—秀秋

中國にては、毛利元就既に卒して孫輝元嗣ぎ、叔父吉川元春・小早川隆景これをたすけ、十餘國を領して勢甚だ盛んなり。羽柴秀吉信長の命を受けてこれを伐ち、諸城を下して、進みて備中高松城を圍みしが、輝元大軍を率ゐて來り助けしかば、秀吉もまた助を信長に請へり。

㊄本能寺の變

信長よりて自ら赴き助けんとし、安土より入京して本能寺に宿せしに、その臣明智光秀信長を怨めることあり、俄かに反きて信長を襲ひて弑し、またその長子信忠をも攻め殺しぬ。時に天正十年六月なり。ここに於て、信長の功業は半ばにしてくじけしも、天下治平の基はここに開け、秀吉その後をうけてよくこれを完成せり。

㊀秀吉の興起
（一）山崎の弔合戰

【織田氏系圖】
信秀―信長―信忠―秀信
　　　　　├信雄
　　　　　└信孝

㊁大阪築城

第十七章　豐臣秀吉

秀吉はもと尾張の農家より出で、信長に仕へて次第に重く用ひられ、遂に中國征伐を命ぜらるるに至れり。秀吉高松の陣中にて本能寺の變を聞くや、毛利氏と和して直ちに軍をかへし、山崎（山城）の一戰に光秀を滅ぼして、主君の仇を報じ、ついで諸將とはかりて、信忠の子秀信を立てて信長の後をつがせたり。

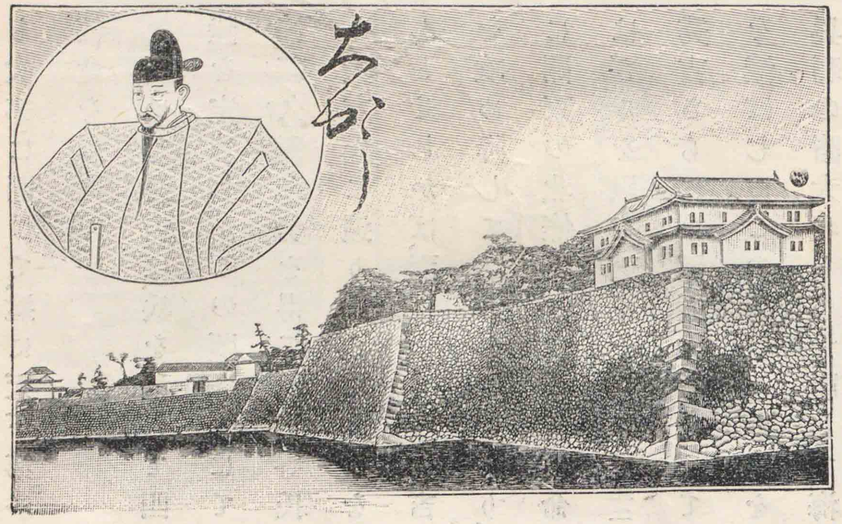
これより秀吉の威名獨りあらはれければ、織田氏の老臣柴田勝家等これを忌み、信長の第三子信孝と結びて、秀吉を除かんとして

秀吉の生母

（二）賤ケ嶽の戰

豐臣秀吉とその筆蹟及び大阪城

（三）小牧の役



兵を擧げたり。天正十一年秀吉勝家を近江の賤ケ嶽に破りて、遂にこれを滅ぼし、ついで信孝は自殺せり。既にして信孝の兄信雄もまた秀吉を除かんとし、助を德川家康に請ひしかば、家康舊好を重んじてこれを諾し、翌年尾張の小牧山に陣し、秀吉の別軍を大に長久手に破りしより、秀吉たやすく勝ち難きを知り、遂に信雄・家康と和を結べり。かくて織田氏の遺業は全く秀吉の手にうつり、前年秀吉は、もと本願寺一揆の據りし大阪城を修築してここに居り、市街

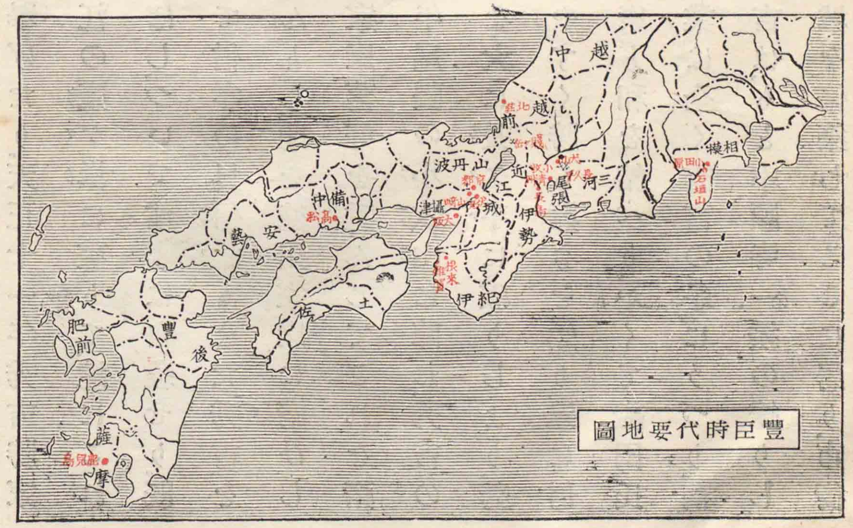
も次第に開けて、遂に天下第一の大都會をなせり。

(三)全國平定

(四)島津征伐

(五)小田原征伐

ついで秀吉は、兵を移して四國・北陸を定めしが、この頃九州にては、島津義久獨り勢を得て、龍造寺氏を破り大友氏に迫り、まさに九州を併さんとせしかば、天正十五年秀吉義久を攻め降してこれを平げたり。然るに關東の北條氏なほ秀吉の命に従はざるを以て、天正十八年(紀元二二五〇)秀吉さらに小田原城を攻めてこれを滅ぼしぬ。この時伊達政宗を始め奥羽の諸大名もまた服して、海內も

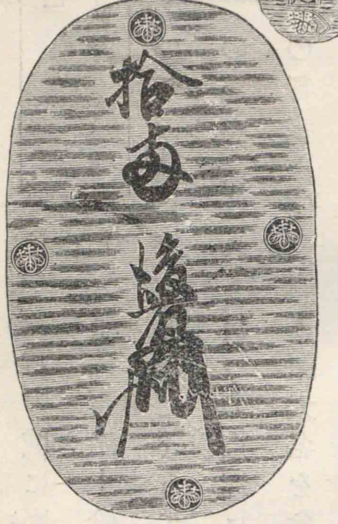


豐臣時代要地圖

後陽成天皇

聚楽第行幸圖

小判圖



大判圖

【小田原北條氏系圖】
長氏(早雲)―氏綱―**氏康**―氏政―氏直

四 秀吉の尊王と政治
(一) 皇室の尊敬
(二) 政治

五 桃山時代

はや秀吉の威に靡かぬものなく、應仁以後亂れに亂れし天下は、百二十餘年にしてここに始めて統一せり。

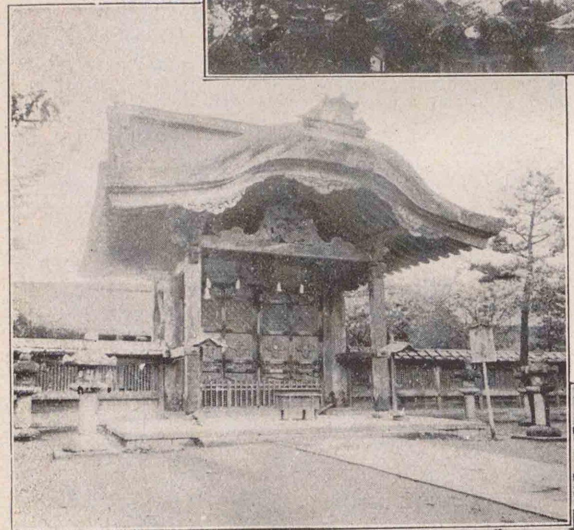
この間に秀吉は、功によりて關白太政大臣に任ぜられ、新に豐臣の氏を賜はれり。かつて京都に壯麗なる聚樂第を造り(一〇六)後陽成天皇の行幸を仰ぎ奉り、諸大名を會して、皇室を尊ぶべきことを誓はしめ、また皇居を修造し、御料を増し奉る等、大に朝廷を敬ひたり。秀吉は又よく心を政治に用ひ、まづ五奉行を置きて政務をわかち掌らしめしが、なほその上に五大老を置きて大事を決せしめたり。又諸國の土地を檢して田制を整へ、大判・小判などを鑄て貨幣をも一定せり。

秀吉は常に壯大華麗の風を好みて、さきには大阪城・聚樂第を作りしが、後ちまた新に伏見城を築きて頗る華美をきはめたり。隨つて美術・工藝も大に進歩し、繪畫には狩野永徳同山樂等あり。建築彫

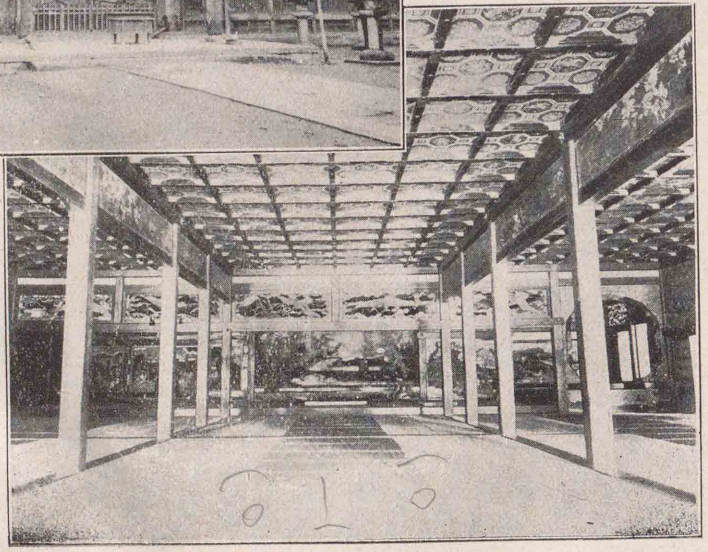
狩野山樂筆花鳥屏風と桃山時代の婦人

京都西本願寺飛雲閣の圖

桃山城の瓦



豐國神社唐門の圖



京都西本願寺書院の圖

桃山時代の建築物

刻はもとよりその他の製作品、何れも秀吉の氣象につれて壯麗の風をあらはし、女子の服裝などもまた優美なり。世にこの時代を桃山時代といふ。

第十八章　朝鮮征伐

㊀朝鮮征伐の起り

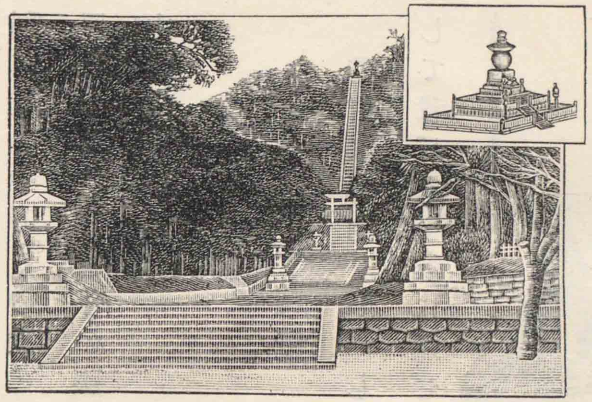
秀吉は海內を統一したる後、さらに明と交を修めんとし、朝鮮をして我が意を彼に通ぜしむ。然るに朝鮮王李昖は明を恐れてこれに應ぜざりしかば、秀吉はまづ朝鮮を征して後ち明に及ばんとし、關白職を養子秀次に讓りて太閤と稱し、自ら肥前の名護屋に至りて親しく軍事を指圖したり。

加藤清正とその鎗

㊁文祿の役

後陽成天皇の文祿元年（紀元二二五二）

宇喜多秀家總大將となり、小西行長・加藤清正先鋒となり、別に水軍を編成して朝鮮に向ふ。その軍およそ十四萬なり。水軍は屢〻敵になやまされたるも、陸軍は釜山に上陸し進んで京城を陷れ、行長は國王を追ひて平壤を取り、清正は咸鏡道に入りて二王子を虜にし、殆ど朝鮮全國を從へてまさに明に入らんとせり。明は朝鮮の請により大軍を發して來り援けたるに、我が軍復大にこれを擊ち破れり。


阿彌陀峯の秀吉墓地（京都）

㊂和議

ここに於て明は大に恐れ、行長について和を求めたれば、秀吉これを許し、一旦諸將を召し還せり。然るに明は講和の條件を實行せざるのみならず、慶長元年（紀元二二五六）その使のもたらせる國書に、秀吉を封じて日

本國王となすとありければ、秀吉大に怒りて使を追ひ返し再征の令を發せり。

㊃慶長の役

翌年小早川秀秋大軍を率ゐて再び朝鮮に入り、加藤清正等は蔚山の籠城に勇名をあげたりしも、この役に我が軍の働きしは多く半島の南部に限られぬ。然るに慶長三年秀吉病みて伏見城に薨じ、遺命して出征軍を引きあげしめたり。秀吉は賤しき身分より起りてかかる大業を成し遂げたるが、その妻杉原氏はまた稀なる賢夫人にして、秀吉の未だ顯はれざる時に嫁してより內助の功少なからず。北ノ政所または高臺院といふはすなはちこれなり。

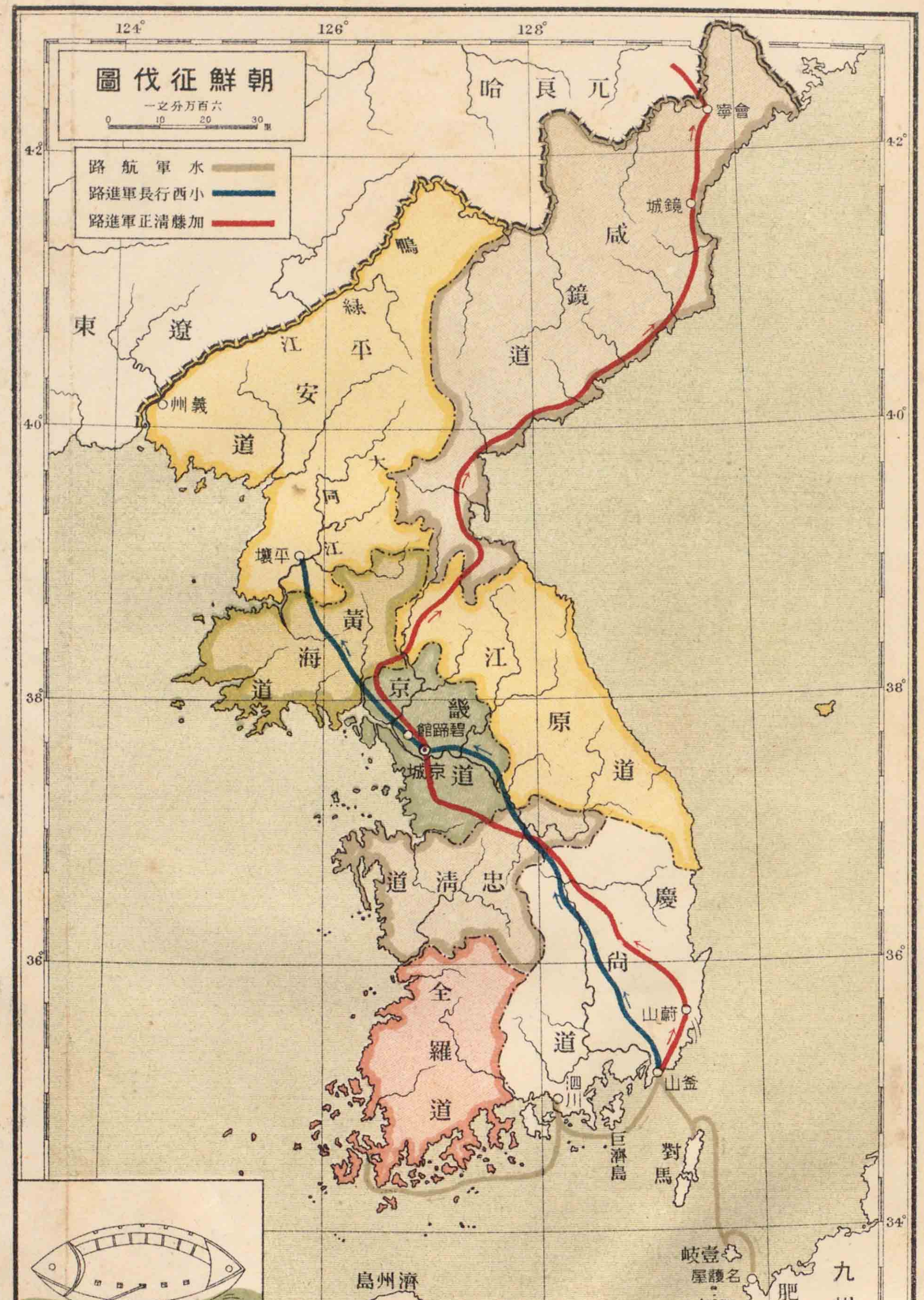
秀吉の北ノ政所

㊄結果

露とおき露と消えぬる我が身かななにはの事は夢のまた夢（豐臣秀吉辭世）

高野山の供養碑

かくてこの役は、初めの目的を達すること能はずして止みたるが、もと秀吉外征の志は、ただに明・朝鮮の二國にとどまらず、さきにフィリッピン・臺灣にも書を送りてその服從を促せしかど、何れもその志を果さざりしは惜むべきことなり。されどこの朝鮮征伐によりて、わが國威を海外にかがやかし、大いに國民進取の氣象を振ひ起しぬ。



ことなり。されどこの朝鮮征伐によりて、わが國威を海外にかがやかし、大いに國民進取の氣象を振ひ起しぬ。

近古略年表

御代數	天皇	紀元	重なる事項
第一期（鎌倉時代）約一五〇			
八二	後鳥羽（一八四五）	一八四五 一八五二	文治元年源賴朝守護地頭の制を布く 榮西宋より禪宗を傳ふ 建久三年賴朝征夷大將軍に任ぜらる
八三	土御門		北條氏始めて執權となる
八四	順德	一八七九	承久元年源氏亡ぶ
八五	仲恭	一八八一	承久三年承久の亂、六波羅探題を置く
八六	後堀河	一八九二	貞永元年貞永式目の制定
八七	四條		
八八	後嵯峨		
八九	後深草		
九〇	龜山	一九二八	文永五年蒙古の使者來る
九一	後宇多	一九三四 一九四一	文永十一年文永の役 弘安四年弘安の役
九二	伏見		
九三	後伏見		
九四	後二條		
九五	花園		
九六	後醍醐	一九九三	元弘三年北條氏の滅亡
第二期（吉野			
	後醍醐（一九九四）	一九九四 一九九六 一九九八	建武元年建武の中興 足利尊氏反す 延元元年楠木正成湊川に戰死す 天皇吉野遷幸 延元三年新田義貞・北畠顯家戰死
		二〇〇八	正平三年楠木正行四條畷に戰死す

御代數	天皇	紀元	重なる事項
第三期（室町時代）約一八〇			
九九	後小松（二〇五二）	二〇五九	室町幕府の制度整ふ 應永六年應永の亂 足利義滿遣明使を發す
一〇〇	稱光		
一〇一	後花園	二〇九九 二一〇一	永享十一年永享の亂、關東管領家亡ぶ 嘉吉元年嘉吉の亂、足利義教弑せらる 雪舟明より歸る
一〇二	後土御門	二一二七 二一三七 二一五一	應仁元年應仁の亂始まる 文明九年應仁の亂止む 延德三年北條早雲勃興す
一〇三	後柏原		
一〇四	後奈良	二二〇三 二二〇九 二二一五	天文十二年鐵砲の傳來 天文十八年天主敎の傳來 弘治元年川中島の戰、嚴島の戰
一〇五	正親町	二二二〇 二二二五	永祿三年桶狹間の戰 永祿八年足利義輝弑せらる
第四期（安土桃山時代）約三			
	正親町（二二二八）	二二二八 二二三二 二二三三 二二三八 二二四二	永祿十一年織田信長入京す 元龜三年三方ヶ原の戰 天正元年足利家滅亡 天正六年上杉謙信卒す 天正十年武田氏滅亡、本能寺の變 山崎合戰
一〇六	後陽成（二二五八）	二二四七 二二五〇 二二五二 二二五七	天正十五年秀吉の島津征伐 天正十八年秀吉の小田原征伐 文祿元年朝鮮征伐 慶長二年再び朝鮮を伐つ

近古略年表

第一期（鎌倉時代）約一五〇

御代數	天皇	紀元	重なる事項
八二	後鳥羽（一八四五）	一八四五	文治元年源頼朝守護地頭の制を布く
			榮西宋より禪宗を傳ふ
		一八五二	建久三年頼朝征夷大將軍に任ぜらる
八三	土御門		北條氏始めて執權となる
八四	順德	一八七九	承久元年源氏亡ぶ
八五	仲恭	一八八一	承久三年承久の亂、六波羅探題を置く
八六	後堀河	一八九二	貞永元年貞永式目の制定
八七	四條		
八八	後嵯峨		
八九	後深草		
九〇	龜山	一九二八	文永五年蒙古の使者來る
九一	後宇多	一九三四	文永十一年文永の役
		一九四一	弘安四年弘安の役
九二	伏見		
九三	後伏見		
九四	後二條		
九五	花園		
九六	後醍醐	一九九三	元弘三年北條氏の滅亡

第二期（吉野時代）約六〇

御代數	天皇	紀元	重なる事項
	後醍醐（一九九四）	一九九四	建武元年建武の中興
			足利尊氏反す
		一九九六	延元元年楠木正成湊川に戰死す
			天皇吉野遷幸
		一九九八	延元三年新田義貞・北畠顯家戰死
九七	後村上	二〇〇八	正平三年楠木正行四條畷に戰死す
			天皇賀名生遷幸
			關東管領始まる
			北畠親房薨去
			元亡び明起る
九八	後龜山	二〇五二	元中九年吉野の朝廷京都に還御す
			高麗亡び朝鮮國建つ

第三期（室町時代）約一八〇

御代數	天皇	紀元	重なる事項
九九	後小松（二〇五二）		室町幕府の制度整ふ
		二〇五九	應永六年應永の亂
			足利義滿遣明使を發す
一〇〇	稱光		
一〇一	後花園	二〇九九	永享十一年永享の亂、關東管領家亡ぶ
		二一〇一	嘉吉元年嘉吉の亂、足利義敎弑せらる
			雪舟明より歸る
一〇二	後土御門	二一二七	應仁元年應仁の亂始まる
		二一三七	文明九年應仁の亂止む
		二一五一	延德三年北條早雲勃興す
一〇三	後柏原		
一〇四	後奈良	二二〇三	天文十二年鐵砲の傳來
		二二〇九	天文十八年天主敎の傳來
		二二一五	弘治元年川中島の戰、嚴島の戰
一〇五	正親町	二二二〇	永祿三年桶狹間の戰
		二二二五	永祿八年足利義輝弑せらる

第四期（安土桃山時代）約三〇

御代數	天皇	紀元	重なる事項
	正親町（二二二八）	二二二八	永祿十一年織田信長入京す
		二二三二	元龜三年三方ヶ原の戰
		二二三三	天正元年足利家滅亡
		二二三八	天正六年上杉謙信卒す
		二二四二	天正十年武田氏滅亡、本能寺の變
			山崎合戰
一〇六	後陽成（二二五八）	二二四七	天正十五年秀吉の島津征伐
		二二五〇	天正十八年秀吉の小田原征伐
		二二五二	文祿元年朝鮮征伐
		二二五七	慶長二年再び朝鮮を伐つ
		二二五八	慶長三年秀吉薨ず

第五編　近世（後陽成天皇より孝明天皇まで）

第一期（後陽成天皇より後光明天皇まで）

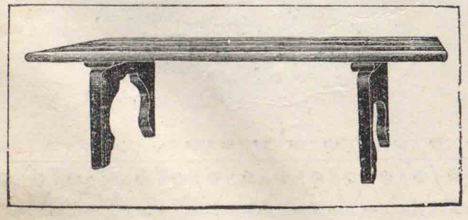
第十九章　徳川家康　關ヶ原の戰　豐臣氏の滅亡

(一)徳川家康の經歷

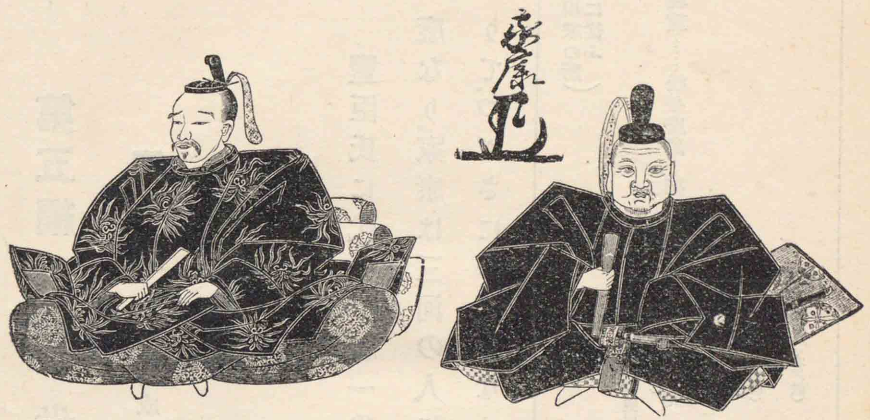
豐臣氏に代りて統一の業を完うしたるは、徳川家康なり。家康は三河の人にて、幼時今川氏の人質となりて、つぶさに辛苦をなめたりしが、桶狹間の役後織田氏と結び、小牧山の義擧に大に名望を高めたり。これより秀吉に從ひ、小田原の役に功を立てて、北條氏の領せし關東

【徳川氏系圖】(一)（徳川家の所傳に從ふ）

源義家—義國—新田義重……松平廣忠—(一)徳川家康
- 結城秀康（越前）
- (二)秀忠—(三)家光
- 義直（尾張侯）
- 頼宣（紀伊侯）
- 頼房（水戸侯）



家康幼時所用の机



徳川家康とその筆蹟

の地をうけ、江戸城に居りてますます勢力を養ひたり。

二　關ヶ原の役

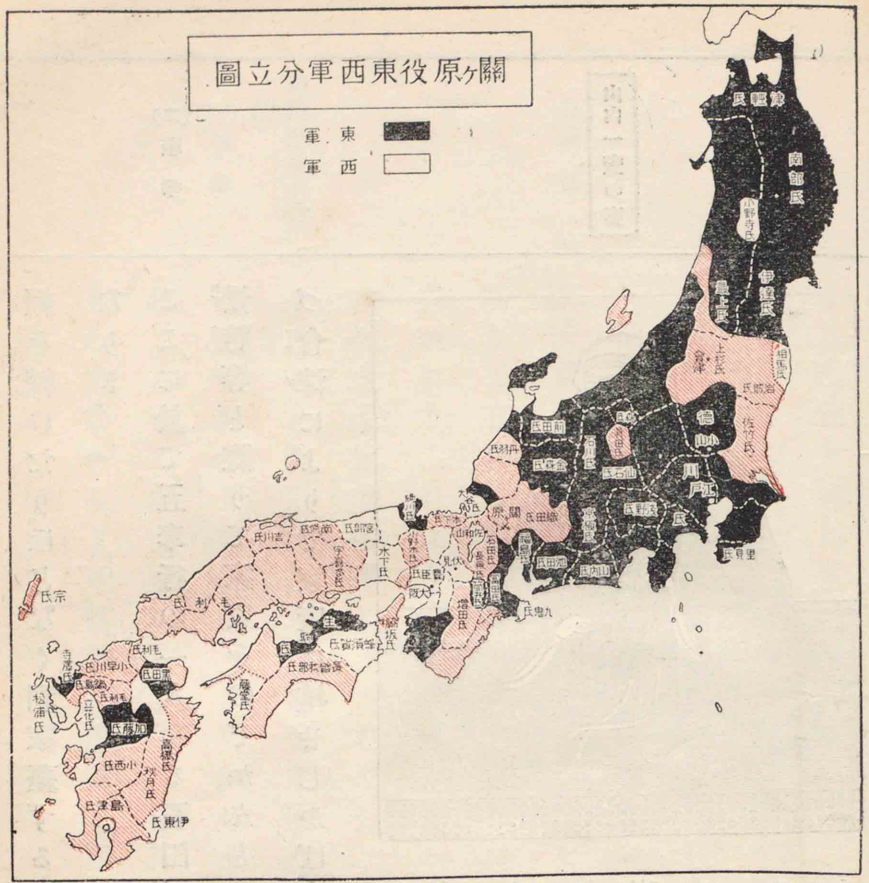
(一) 原因

前田利家

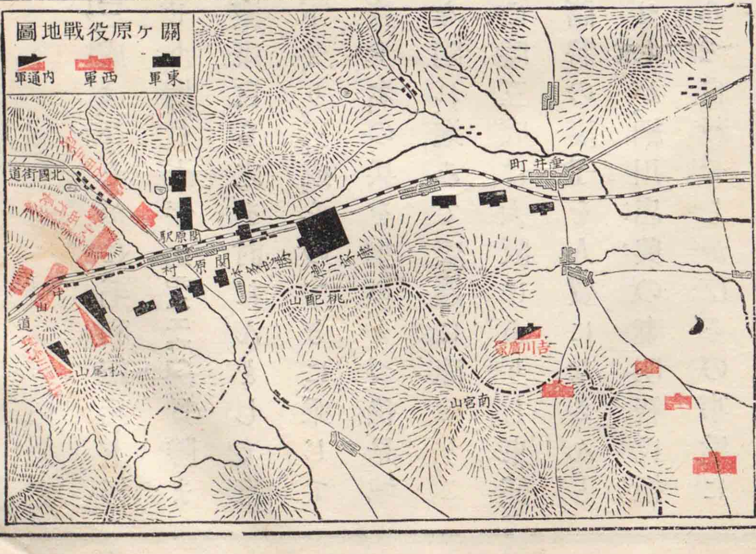
徳川家康の生母

されば秀吉の晩年にあたり、家康は前田利家等と共に大老となりて人望最も高かりしかば、秀吉の薨ずるや、その遺命によりて、家康は伏見城にありて政を執り、利家は大阪城にありて秀吉の幼子秀(ヒデ)

關ヶ原役東西軍分立圖



關ヶ原役戰地圖



頼を輔けたり。ほどなく利家薨ずるに及びて家康の威權獨り盛んなりき。

(二)戰爭

ここに於て五奉行の一人なる石田三成は、ひそかに毛利輝元・上杉景勝等と謀りて家康をのぞかんとせり。慶長五年(紀元二二六〇)景勝まづ會津によりて家康に抗せしかば、家康自ら之を討たんとして東下せり。三成そのすきに乘じて諸大名の兵を集め、まづ伏見城を陷れ、進みて美濃に陣せり。この時三成は大阪にありし東征諸將の妻子を人質になさんとせしが、細川忠興の妻明智氏拒みて自殺せしかば、その事遂に止み、また山内一豐の妻は、大阪

山内一豐の妻

より密使を發して、家康の軍に從へる夫に速かに變を知らせたり。家康直ちに軍をかへして大に關ヶ原に戰ひ、勝敗容易に決せざりしに、西軍の將小早川秀秋等東軍に内應せしかば、西軍遂に大敗せり。世にこれを天下分け目の戰といふ。

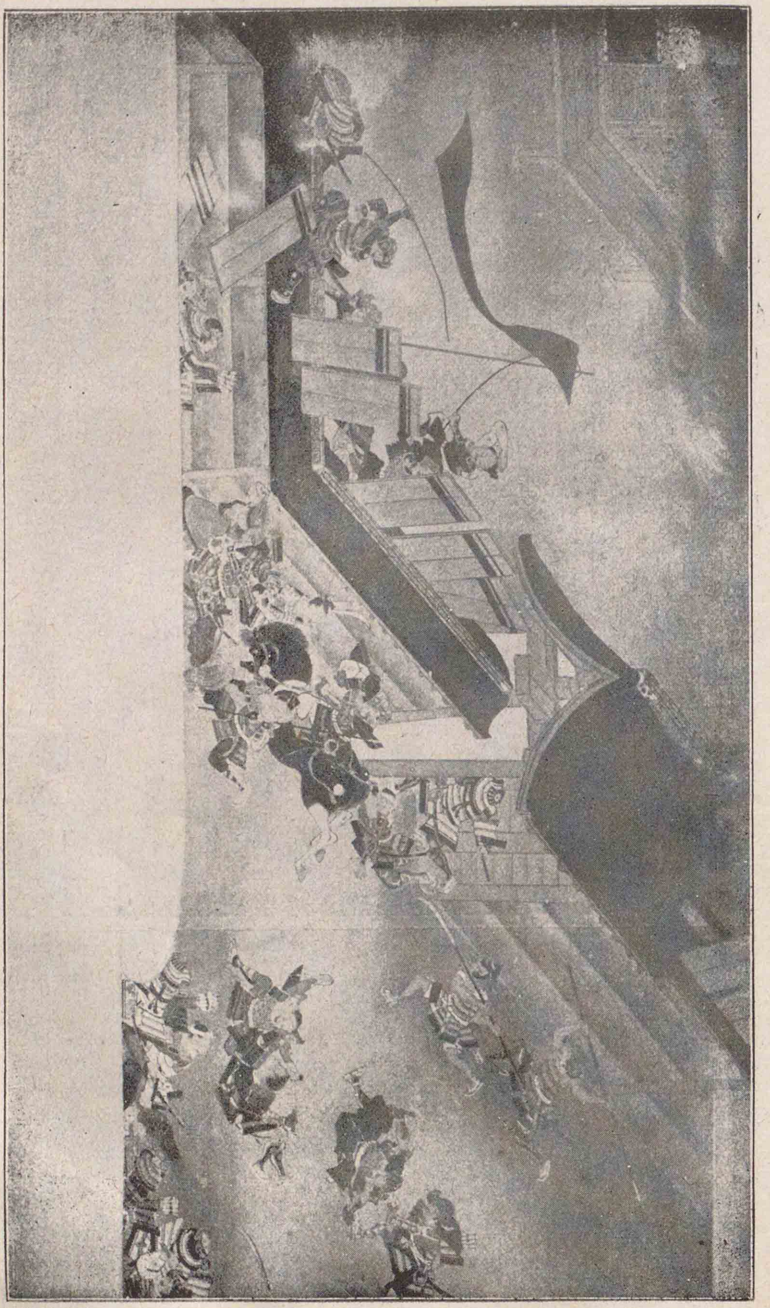
(三)結果

戰後家康は三成等を捕へてこれを斬り、景勝・輝元等諸將の領地を削りて有功の將士に分ち、秀頼には僅かに攝津・河内・和泉の三國を與へたり。これより豐臣氏はただ一大名たるに過ぎずして、天下の政權全く家康の手にうつれり。

㊂豐臣氏の滅亡

(一)原因

されど豐臣氏は、なほ要害堅固なる大阪城にあり。秀頼の生母淀君は大野治長等と謀りて、いかにもして豐臣氏の盛んなりし昔に返さんとし、諸大名の中にも大閤の恩を思ひて、これに心を寄するもの少なからず。されば家康常に之を憚りしに、たまたま秀頼は父の建てたる方廣寺の大佛を再興し、その新造の鐘に『國家安康』の銘



大坂陣の圖（狩野探幽の筆）

（二）大阪冬の陣

（三）大阪夏の陣

【豐臣氏系圖】

- 木下彌右衛門
  - 秀吉
    - 秀次（養子）
    - 秀頼 ＋ 德川秀忠女
      - 國松
      - 女（東慶寺の尼）
  - 秀長
  - 朝日姫 ＋ 德川家康

ありしかば、家康これを以て己を呪へるものとなし、嚴しく大阪を責む。秀頼の臣片桐且元等種種辯解につとめしも、家康さらにこれを聽かず。

ここに於て（一〇七）後水尾天皇の慶長十九年冬、淀君・治長等は忠臣且元をしりぞけ、秀頼にすすめて兵を擧げしめたり。家康は秀忠と共に大軍を率ゐて之を圍みしが、城固くして容易に陥らざるを以て、やがて和を結べり。

然るに講和の條件によりて濠を埋むるにあたりて紛議起り、翌元和元年（紀元二二七五）夏、大阪方の將士再び兵を擧げたり。家康父子また來り攻むるに及び、忽ちにして城陥り、秀頼母子自殺して豐臣氏亡び、これより天下全く德川氏に歸しぬ。

㊀江戸幕府

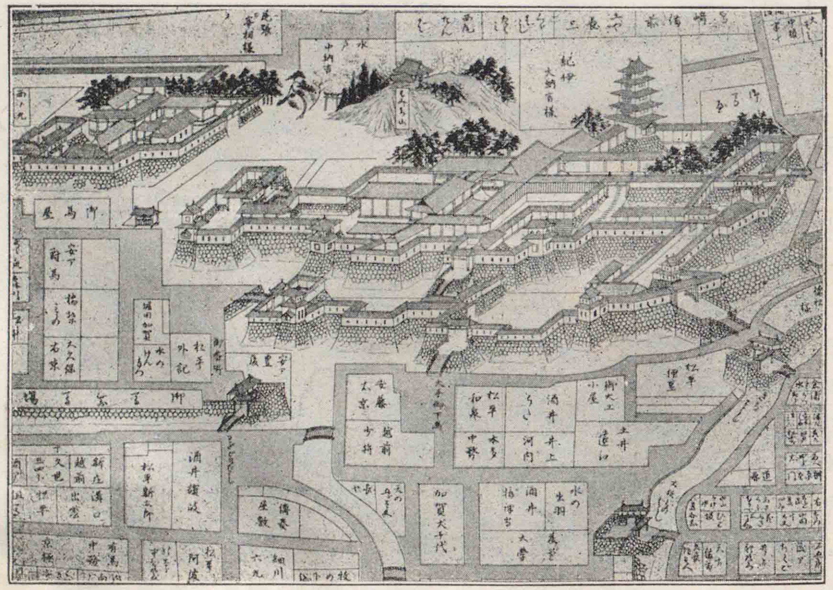
江戸城の圖

徳川秀忠

第二十章　江戸幕府

徳川家光

闘ケ原の役より三年を經て、慶長八年（紀元二二六三）家康征夷大將軍に任ぜられ、幕府を江戸に開きしが、間もなく職を子秀忠に讓りて駿府（静岡）に隱居し、大事はなほ自ら決したり。かくて大阪を滅ぼし種種の制度を設けたる後、元和二年（紀元二二七六）病



㈡徳川家光

みて薨じ、翌年日光山に葬り、華麗なる社殿を造り、のち朝廷より東照宮の號を賜はれり。

秀忠は温厚にしてよく父の遺法を守り、職を長子家光に傳へたり。

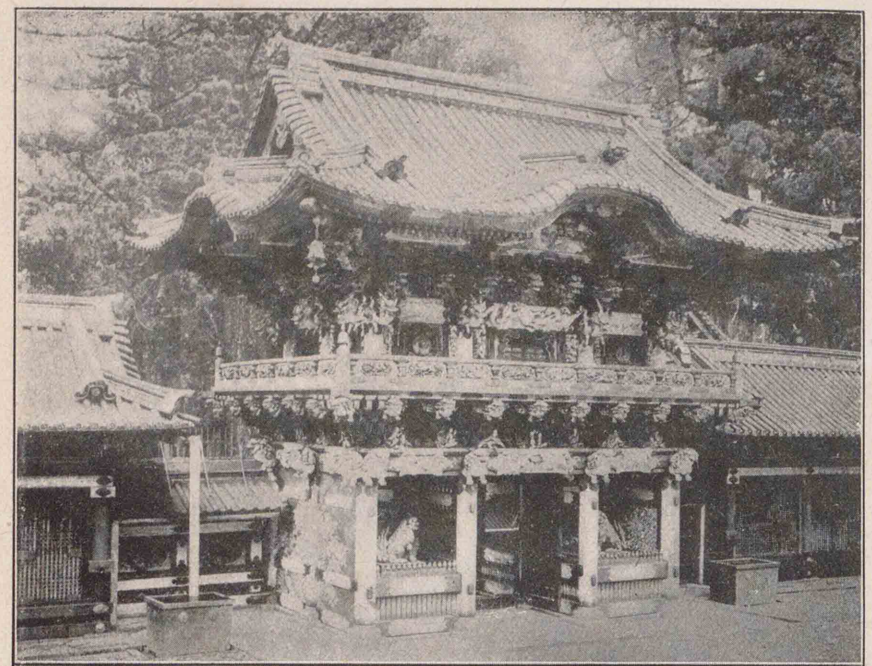
徳川家光

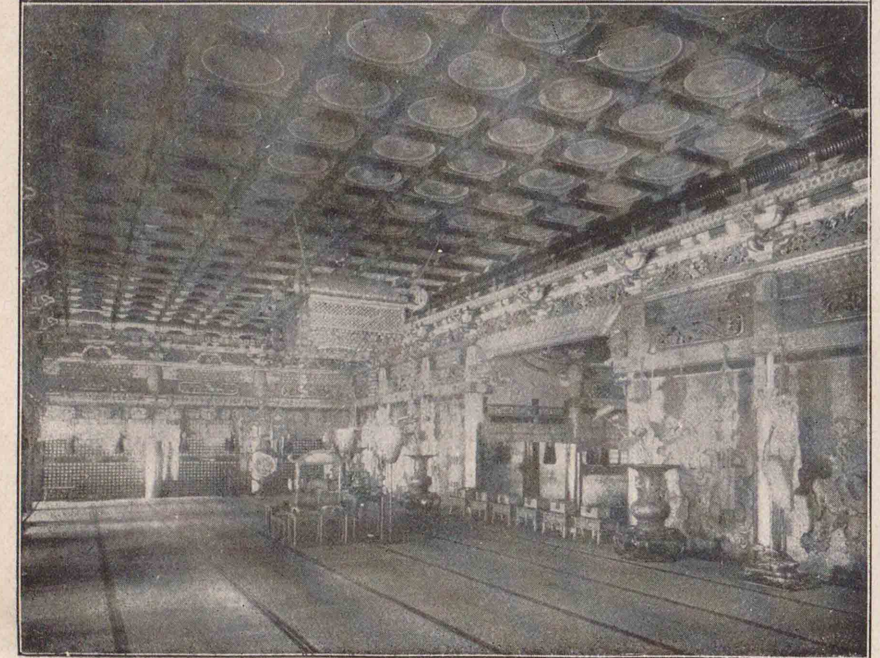
家光は女丈夫のほまれ高き乳母春日局に養育せられ、生れつき豪邁にして諸大名を威服し、また土井利勝・松平信綱等の名臣これを輔けたれば、幕府の基いよいよ固く、もろもろの制度頗る整へり。

春日局とその筆蹟

㈢幕府の職制

幕府のおもなる職には、大老・老中・若年寄あ





日光東照宮陽明門と三代將軍廟の拜殿內部

(一)幕府の組織

り。大老は諸役の上に立つものなれど、常に置くことなく、老中主として政を執りて、若年寄これを助く。次に寺社奉行・勘定奉行・町奉行の三奉行あり。また別に大目付・目付ありて大名旗本を監察せり。

(二)地方の職制

地方には諸大名を封じたれども、重要の地は幕府の直支配となし、京都には所司代、大阪・駿府には城代を置き、その他の直支配地はそれぞれ奉行・代官をしてこれを治めしめたり。

四　封建制度

(一)大名の配置

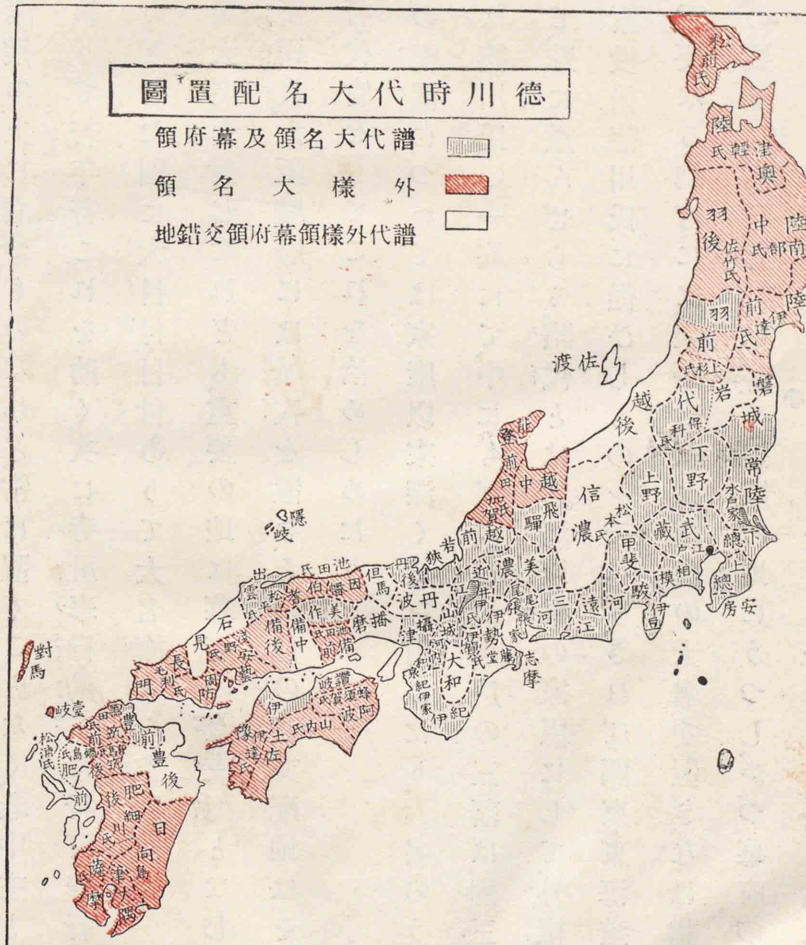
(一)諸大名の配置については、家康以來深く意を用ひたり。大名のうち親藩とは徳川氏の一族にて、中にも尾張・紀伊・水戸の三藩は御三家と稱して、殊に重んぜらる。譜代とは三河以來の家臣にして、外樣とは關ケ原役後徳川氏に從ひしものを云へり。されば關東・東海道・近畿など重要なる地方には、親藩または譜代の大名を置き、なほ譜代を幕府の要職に用ひ、外樣は多く邊鄙の地にうつし、かつ幕府の直支配地をその間に交へ置けり。

(二)參勤交代

(二)また諸大名に命じて妻子を常に

（三）武家諸法度

江戸に置かしめ、一年かはりに江戸に參勤交代をなさしむる制を立て、なほ㊂また武家諸法度を定めて大名を取締れる等、封



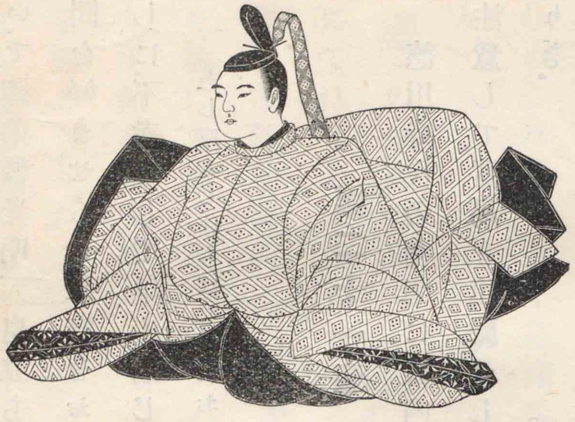
大名行列の圖　（歌川廣重の筆）

五 朝廷と幕府

建の制度よく整ひて、三百六十餘年間の太平を保つことを得たり。

朝廷に對しては、皇居を修め御料を豐かにし奉るなど、幕府はよく皇室を尊び奉りしも、政治上の實權は自らこれを握り、公家諸法度を定めて朝廷及び公卿をおさへ、また藤原氏の例にならひて、秀忠の女和子(東福門院)を後水尾天皇の中宮となしたてまつり、皇室の外戚となりて益〻幕府の威權を增さんとせり。

後光明天皇



後水尾天皇は英明の君にましまし、ことに歌道に秀でさせたまへり。天皇幕府の我儘なるを憤らせたまひ、俄かに御位を皇女明正天皇(一〇八)に讓らせたまふ。天皇は東福門院の御腹にて、女帝の立ちたまひたるは稱德天皇このかたなきことなり。つ

いで御弟後光明天皇立ちたまひしが、また英邁におはして、深く學問を好ませられ、幕府をおさへて大に皇威を張らんとの御志なりしに、不幸にして早く崩じたへまり。

あし原よしけらばしけれおのがまま、とても道ある世とは思はず（後水尾天皇御製）

第二十一章　海外諸國との交通

㈠朝鮮との交通
㈡支那との貿易

德川時代の初期には、內治の整ひしのみならず、家康深く外交に注意して貿易を奬勵せしかば、諸外國との交通はますます盛んなりき。

朝鮮及び支那との交通は、秀吉の征韓以來全く絕えたれば、家康はこれを復せんとし、對馬の宗氏をして朝鮮と交通の事をはからしめ、これより將軍の代る每に朝鮮より慶賀使を送ることとなれり。又明は我が交涉に應ぜざりしかど、その商人は每年長崎に來りて貿易を營みのち明亡び清代るに及びてもなほ通商を續けたり。

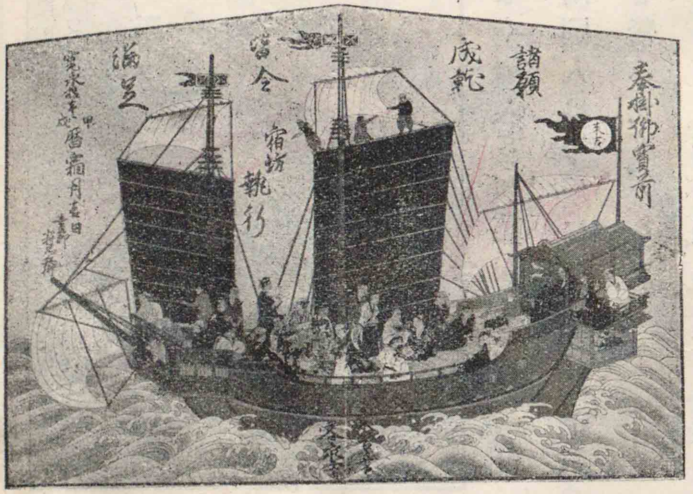
㈢琉球征伐

琉球はもと我が國に屬せしも、足利時代の中頃より明に通じて久しく入貢せず。家康は薩摩の島津氏をして之を招かしめしに聽かざりければ、島津家久をして伐たしめ、これより永く島津氏の領とせり。

㈣西洋諸國との通商

この頃歐羅巴にては、葡萄牙・西班牙の外、和蘭人も新に東洋に來りて、熱心に貿易を開きたり。たまたま慶長五年和

自日本到
東京商船也
右
慶長第十乙巳年九月十日

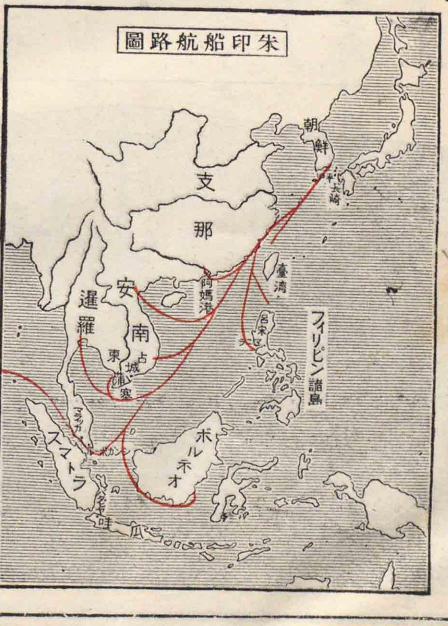


朱印狀と御朱印船

五　國民の海外渡航

支倉六右衛門

蘭の商船わが國に漂着せしに、家康はその船に乗れる和蘭人ヤン・ヨーステン及び英吉利人ウヰリアム・アダムスを江戸に召し、委しく海外の事情をたづねて通商の利を知り、永く二人を留めて外交の顧問となせり。のち程なく蘭人及び英人にも通商を許し、兩國人は平戸に商館を建てて貿易を營みたり。



外人の渡來漸く盛んなるに從ひて、わが國民の進取の氣象ますます振ひ、みな幕府の朱印ある免許状を得て阿媽港・フィリッピン・印度支那等に交通して貿易を營めり。その船を御朱印船といふ。また家康は遠く西班牙領のメキシコに商人を遣はして、通商を開かんとし、伊達政宗はその臣支倉六右衛門を遙かに西班牙羅馬に使せしめたりき。

山田長政

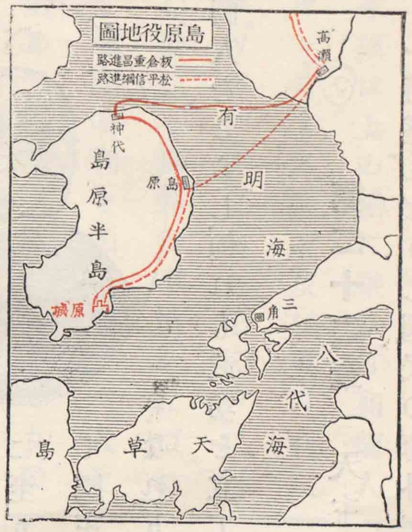
かくて海外に移住する邦人もまた少なからず、呂宋・暹羅等には日本町さへ開くに至りしが、中にも山田長政は暹羅に於て國王を助けて内亂を鎭め、その女婿となれり。また濱田彌兵衛は臺灣に渡りて蘭人をこらし、何れも武功を立てて國威を海外に輝かしたり。

第二十二章　天主教の禁　島原の亂

一　天主教の禁

一時盛んなりし國民の海外交通は、宗教上の事より忽ち絶ゆる

に至れり。天主教は、さきに信長その布教を助けたるより、全國にひろまりしが、宣教師のなす所、まま我が國の習慣に背きて害あるを以て、秀吉・家康は相ついでこれを禁じたり。されど當時海外との交通盛んなるにつれ、宣教師のひそかに來りて布教に從事するもの絶えざりしかば、家光は一時禁令をきびしくし、遂には洋書の輸入及び邦人の海外渡航をも禁じたり。

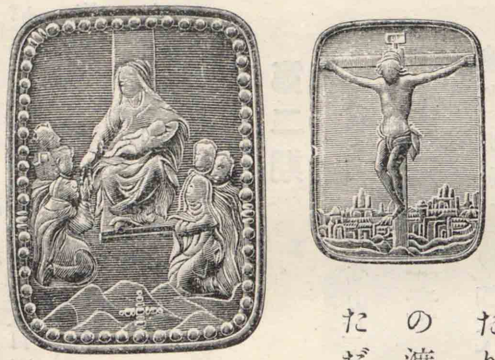


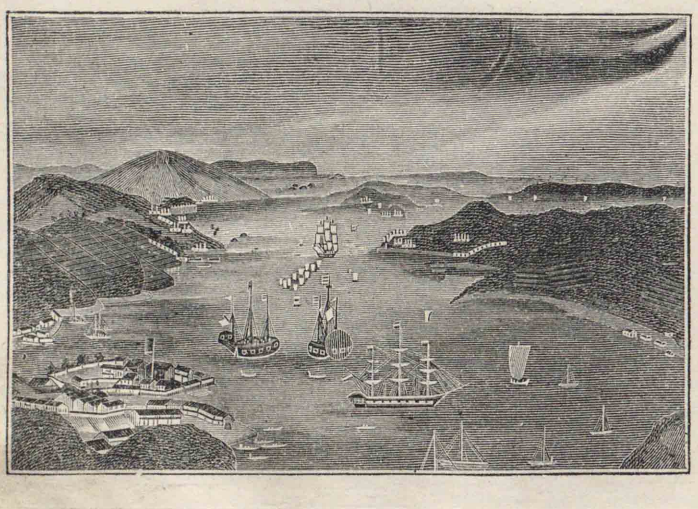
㊂島原の亂

ここに於て明正天皇の寛永十四年（紀元二二九七）禁令に不平なる島原半島（肥前）天草島（肥後）の信徒等亂を起して、原の古城に據れり。幕府すなはち板倉重昌をしてこれを討たしめしが、更に松平信綱を遣はし、翌年に至りて漸くこれを平ぐることを得たり。

㊁鎖國

これより幕府はますます天主教の禁を嚴にし、宗門改めを行ひ、踏繪を踏ましめてその信否をただし、國民をして悉く佛教につかしめたり。また西洋人の渡來を嚴禁し、ただ天主教に關係なき和蘭人のみは、長崎の出島を以てその居留地と定め、支那人と共にここに來りて貿易す


踏繪


長崎出島の圖

㊁家綱時代

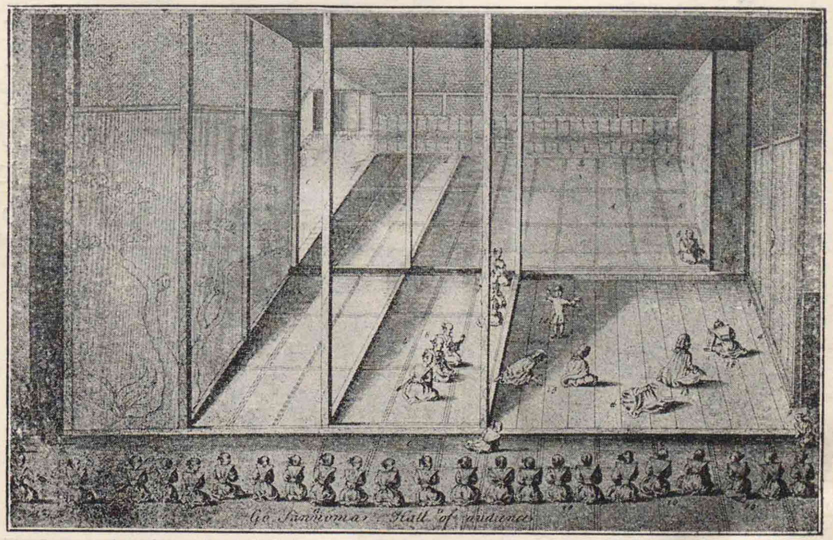
ることを許したり。ここに於て我が國は永く鎖國の有樣となり、唯蘭人の手によりて僅かに海外の事情を知ることを得たりしのみ。

第二期

（後光明天皇より仁孝天皇まで）

第二十三章　徳川綱吉

後光明天皇の御代に家光薨じ、子家綱幼にして將軍職をつぐや、浪士由井正雪等これに乘じて亂を起さんとし、あらはれて誅せられたり。これより家綱の叔父保科



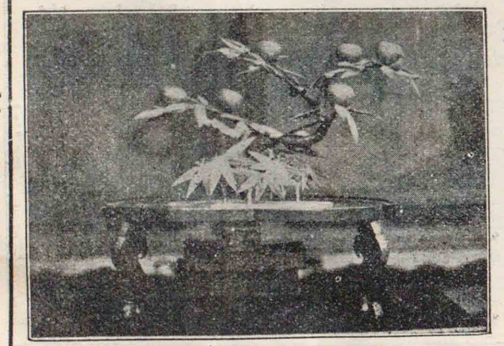
和蘭使節の將軍拜謁圖

㊂綱吉の政治
（一）奢侈
（二）佛教の迷信

正之等將軍を輔けて國内よく治まりしも、後には大老酒井忠清ひとり威權をほしいままにし、幕府の政稍〻亂れたり。

後光明天皇の後、（二一〇）後西院天皇を經て（二一一）靈元天皇の御代に至り、家綱薨じてその弟綱吉將軍となる。綱吉は初め堀田正俊を大老に用ひて前代の弊政を改めたりしが、程なく政に倦み、柳澤吉保に諸政をまかせて、自ら遊樂を事とせり。また將軍の生母桂昌院夫人と共にあつく佛法を信じて盛んに寺院を建て、ある僧の説にまどひて生類憐みの令を出し、殊に己が戌の年の生れなるを以て、最も犬を愛護せしめて人民の苦

保科正之



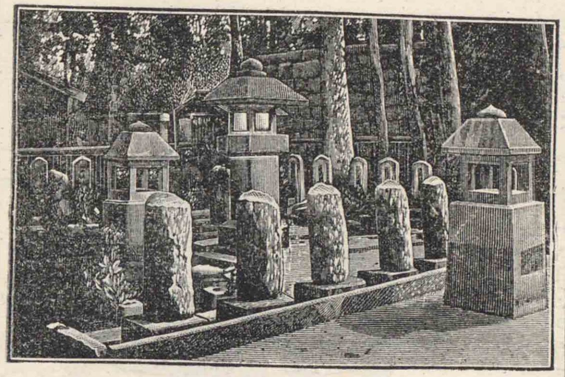
桂昌院夫人の遺物

天皇御系圖（四）

一〇七 後陽成天皇—後水尾天皇—一〇八 明正天皇
　一〇九 後光明天皇
　一一〇 後西院天皇
　一一一 靈元天皇—一一二 東山天皇—一一三 中御門天皇

（三）財政の困難

㊂元祿風



東京泉岳寺内義士の墓

㊃赤穗の義士

みを顧みず。かくて幕府の費用漸く乏しくなり、これを補はんとて、しばしば粗惡なる貨幣を鑄たりしが、之がために物價騰貴し、かへつて財政を亂すに至れり。

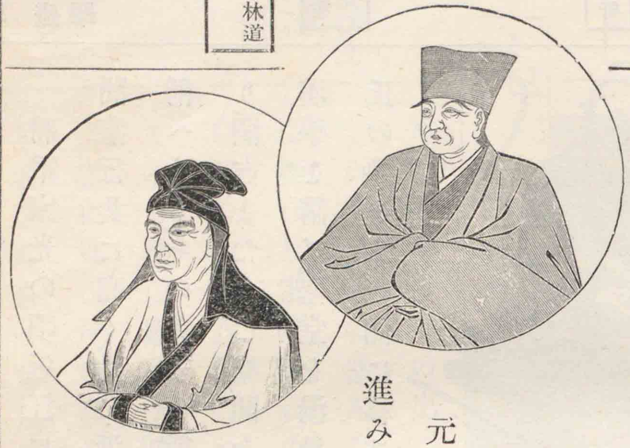
㊂幕府の政治かくの如くなる上に、この頃太平久しく打續きたれば、士民漸く遊惰に流れ、淨瑠璃・芝居・能樂など盛んに流行し、奢を好むの風一般に行はれて、衣服・調度も頗る華美を極め、世にこれを元祿風といふ。ここに於て江戸時代の勤儉・尚武の美風はまた見るべからざるに至れり。

かかる時に當り、播州赤穗の城主淺野長矩の遺臣大石良雄等四十七士辛苦をなめ

元祿時代風俗畫（菱川師宣の筆）

て、東山天皇（一一三）の元祿十五年（紀元二三六二）吉良義央を討ちて舊主の仇を報いければ、世擧りてその義を感じ、稱して赤穗の義士といふ。その妻女にも貞烈なるもの少なからず、永く傳へて美談となせり。

萬山不重君恩重、一髪不輕我命輕（大石良雄）



藤原惺窩と林道春

（一）文教の復活

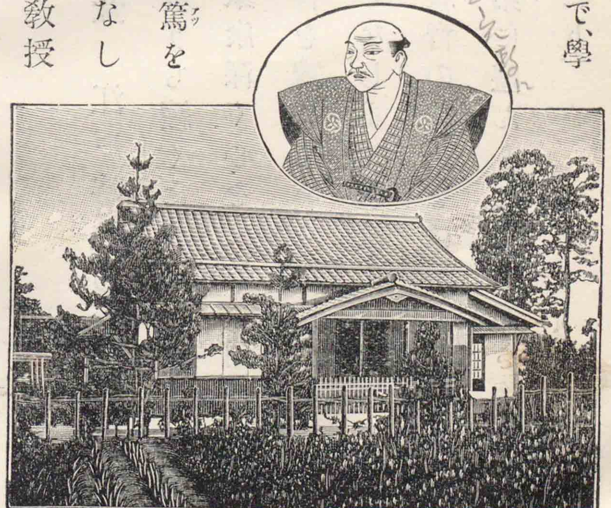
第二十四章　江戸時代の文物・佛教

元祿時代太平のうち續くにつれて、文運も大に進みたり。はじめ家康深く心を文教に用ひ、藤原惺窩を召して書を講ぜしめ、その門人林道春を擧げて儒臣となし、また學校・文庫を設け、古書を出版して、教育の普及をはかりしかば、これより學問次第に盛んとなり、名高き學者おひおひに出でたり。

㈡漢學の隆盛と女子の學問

將軍家光の頃近江に中江藤樹出で、學問德行共に高く、世に近江聖人と稱へらる。その弟子に熊澤蕃山あり。綱吉また大に學問を好み、自ら漢學を講じ、聖堂を湯島に建て、林氏の塾をその側に移さしめ、道春の孫林信篤を大學頭となして學生の教授に當らしむ。これ後の昌平黌なり。かくて文運大に起り、京都には伊藤仁齋・東涯父子、江戸には木下順庵・荻生徂徠等の學者出で、各一派の學風を起し、また筑前の人貝原益軒は、多く假名交り文を以て有用の書をあらはし、頗る世を益したりしが、中にも『女大學』は女子の修身書として最も廣く世に行はる。この他儒者の女訓も追追にあらはれ、上流の女子は多く家庭にて學び、井上通女を始め博學なるもの出づるに至れり。

貝原益軒



中江藤樹と藤樹書院

㈢國學及び文藝の振興

かく漢學の盛んなりしのみならず、文學もまた元祿時代より大に興れり。㈢當時大阪の僧契沖は、古語を研究して始めて國學を興し、京都の荷田春滿これをつぎ、江戸の北村季吟も和歌・和文に名ありて、みな後の國學大成の基を開けり。㈣この他通俗文學も盛んに起り、俳諧には松尾芭蕉、淨瑠璃には近松門左衛門、小說には井原西鶴など名をあらはせしが、この後に至りて瀧澤馬琴等の小說家出でて、

井上通女と其の筆蹟

平民文學はいよいよ發達したり。隨つて歌文に長ぜる女流も少なからざりき。

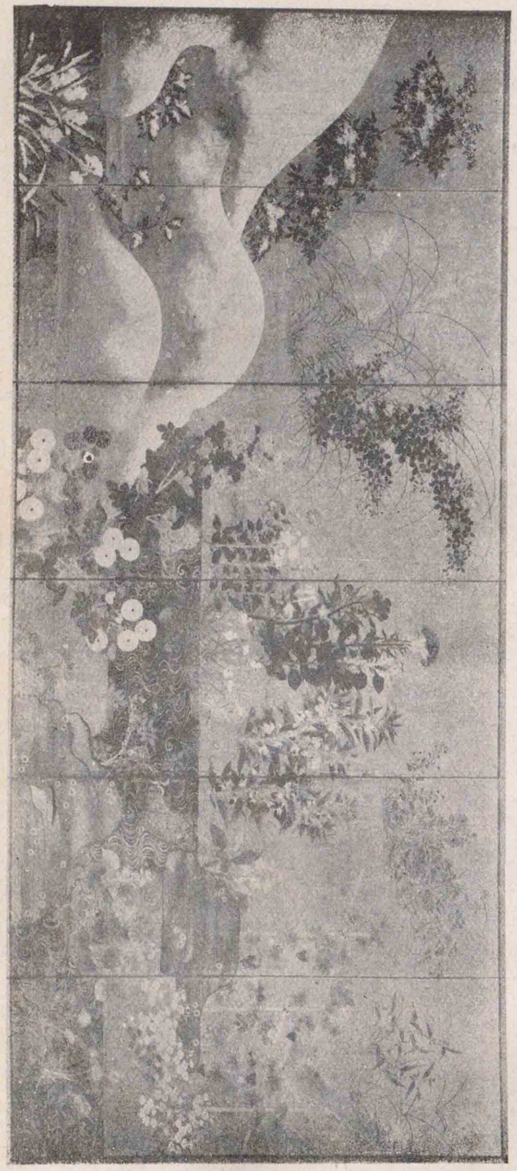
　ふる池や蛙飛こむ水の音　はせを(芭蕉)

四 美術・工藝の進歩

狩野探幽

世の奢りにつれて美術工藝も著しく進歩したり。さきに家光の時狩野探幽・土佐光起各〻その畫風を中興したりしが元祿の頃には菱川師宣浮世繪を能くし尾形光琳は蒔繪に新法を出し、かつ華美なる畫風をあらはせり。その後圓山應擧は寫生畫に妙を得葛飾北齋は浮世繪に長じ、谷文晁また支那畫に基づきて一派の畫風を起し、司馬江漢は西洋畫をはじめたる等、名高き畫家多くあらはれたり。その他陶器などの製作も益〻發達し、織物には元祿頃より紋縮緬織り出だされ、友禪染もはじめられ、また木綿織も各地に起れり。

丸山應擧筆保津川の圖



尾形光琳の圖

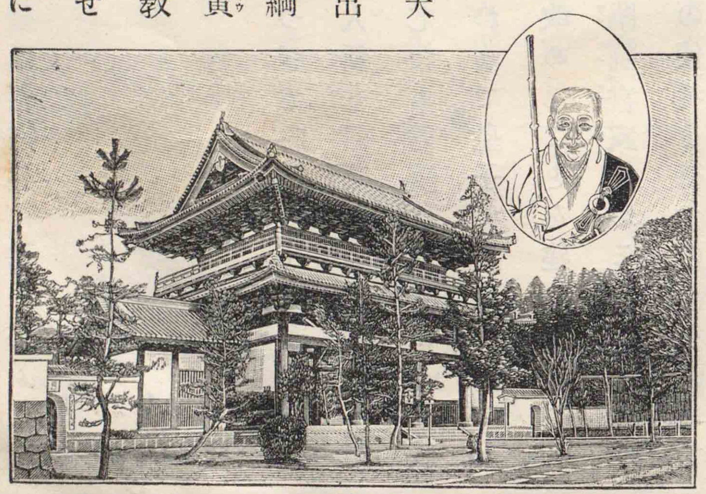
司馬江漢の畫

谷文晁の畫

五 佛教

天海僧正

隱元と萬福寺



宗教界にありては、さきに家康諸大寺に法度を下してこれを取締りたれど、また諸宗を保護して、その興隆をはかりたり。當時天台宗に天海、禪宗に崇傳の如き名僧出でて、重く家康に用ひられ、ついで家綱の時明の僧隱元來りて禪宗の一派黃蘗宗を傳へたり。されど幕府が天主教を禁じて、國民をして悉く佛教を奉ぜしめたるより、僧侶はかへつて安逸に

なれ、また名僧を出すことなく、元祿以後は各宗共に勢を失ふに至れり。

第二十五章　徳川吉宗

新井君美

㈠新井君美の政治
（一）皇室の尊敬
（二）朝鮮使節待遇法の改良
（三）財政の整理

綱吉薨じて、甥家宣、家宣の子家繼、相つぎて將軍となり、在職いづれも短かりしが、その間木下順庵の門人新井君美（白石）を用ひて、諸般の改革をなしたり。君美は博學にして政治の才あり。これまで㈠皇子・皇女の佛門に入りたまふ風を改めんことを建議し、之によりて朝廷後ち閑院宮家をおこしたまへり。㈡君美また朝鮮の使者を待つの禮を改めて、我が國の體面を重くし、或は㈢前代の惡貨を鑄なほし、外國貿易の額を限りて、金銀の外國に流出するを防ぎし等、大に財政をも整へたりき。

【徳川氏系圖】（二）

家光—（四）家綱
　└（五）綱吉
　└綱重—（六）家宣—（七）家繼
和子（東福門院）

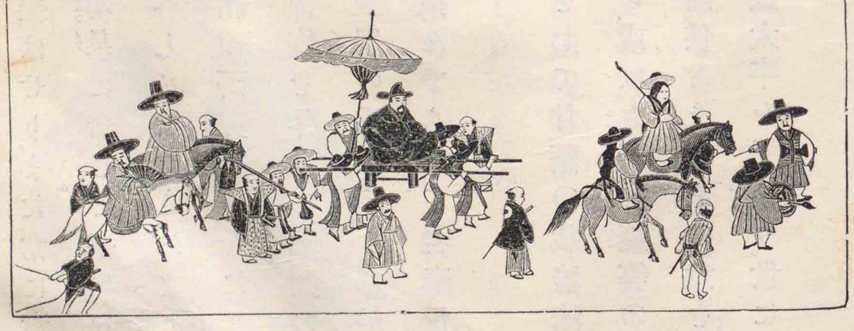
㈡江戸幕府の中興
朝鮮使節の來聘

㈢徳川吉宗の政治
（一）勤儉尚武と實學の獎勵

徳川吉宗

（二一三）中御門天皇の享保元年（紀元二三七六）家繼幼くして薨じ、嗣なきにより、吉宗紀州家より入りて將軍となれり。吉宗は英斷にして政に勵み、世に幕府中興の英主と仰がれたり。

吉宗は、まづ元祿このかた世の奢りに流れて、士風のいたくすたれたるを憂へ、自ら節儉を守



朝鮮使節の來聘

りて下を率ゐ、しきりに武藝を勸めて士氣を振はせり。また常に實用の學を重んじ、自ら天文・暦學を修め、室直清（鳩巣）に命じて平易なる修身書を作らしめて、廣くこれを兒童に教へしめ、またこれよりさき洋書の禁を弛めて、天主教に關係なき書籍の研究を許したり。

（二）司法刑法の改善

吉宗はまた深く意を刑律に用ひて、御定書百箇條を作りて裁判の標準を明かにし、また足高の制を立てて人材登用の道を開きしが、中にも剛直なる大岡越前守忠相は、町奉行に抜んでられて名奉行の譽高し。

（三）産業の奬勵

吉宗殊に心を産業の發達につくし、青木文藏をして甘藷の栽培法を記さしめ、之を諸國に分ちてその栽培を勸め、或は人蔘・甘蔗等の培養を盛んにして、藥料・砂糖の輸入を防げり。諸侯もまたその意を受け、競ひて國産を勵みたれば、國豐かにして民太平を樂めり。世にこれを享保の治と稱す。

第二十六章　徳川家齊　諸藩の治

（一）田沼意次の專權

吉宗職をやめ、子家重・孫家治相つぎて將軍となる。その間田沼意次權を專らにして、吉宗中興の政を破り、加ふるに天災頻りに起りて、人民ますます苦みたり。これよりさき、吉宗は田安・一橋の二家を立て、家重また清水家を立てて、世にこれを御三卿といひしが、家治薨ずるや、一橋家より出でたる家齊

【徳川氏系圖】（三）

紀伊侯徳川頼宣—光貞—（八）吉宗—（九）家重—（一〇）家治
　家重—重好（清水家）
　吉宗—宗武（田安家）—松平定信
　吉宗—宗尹（一橋家）—治濟—（一一）家齊—（一二）家慶

（二）寛政の治

將軍職をつげり。

家齊年なほ幼なかりしかば、田安家より出でたる白河城主松平定信（白河樂翁）老中となりて、これを輔けたり。定信は賢明にして、熱心に前代の弊を改め、幕府の政再

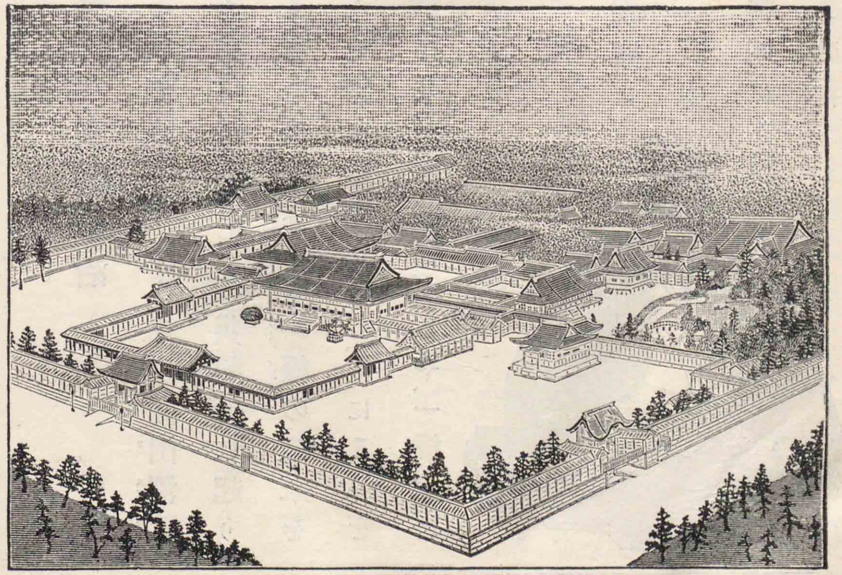
松平定信

(一) 備荒儲蓄

び振ひたれば、世にこれを寛政の治といふ。

定信は、專ら吉宗の遺法に從ひて、勤儉尚武を主義とし、或は諸大名に命じて、備荒儲蓄をなさしめて財政を整へ、また孝子・節婦等を

光格天皇



現在の京都皇宮

賞して、風俗を正したるなど、美政甚だ多し。

(二) 皇居の造營

これより先き、京都にては、中御門天皇ののち四天皇を經て、(一一八)光格天皇閑院宮より入りて御位に卽きたまへり。天皇英明にましましかば、世の人喜びて『聖天子西にゐまし、賢相東に出づ。天下の太平期して待つべし』といへり。たまたま天明の大火に皇居炎上せしかば、定信自ら造營の事に當り、古制によりてその規模を大きくなし奉れり。

天皇御系圖 (一五)

東山天皇 ┬ 中御門天皇 ─ (一一四)櫻町天皇 ┬ (一一六)後櫻町天皇
　　　　　│　　　　　　　　　　　　　　　 └ (一一五)桃園天皇 ─ (一一七)後桃園天皇
　　　　　└ 閑院宮直仁親王 ─ 典仁親王 ─ (一一八)光格天皇 ─ (一一九)仁孝天皇 ─ (一二〇)孝明天皇 ─ (一二一)明治天皇 ─ (一二二)今上天皇

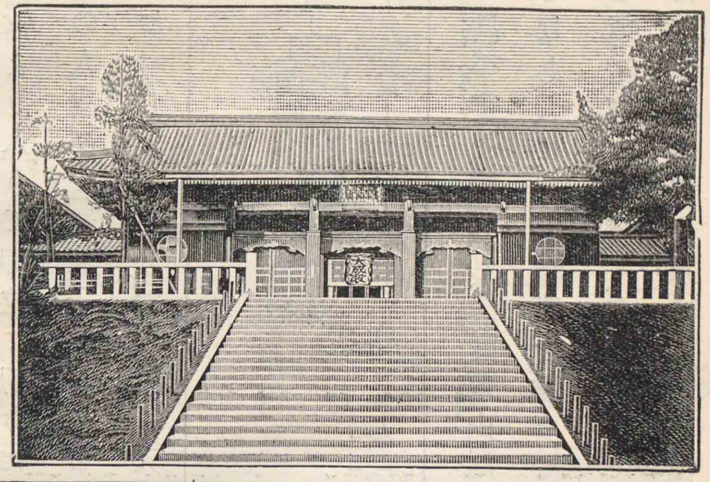
(三) 學問教育の獎勵

定信また林大學頭とはかりて、昌平黌を擴張し、柴野栗山・尾藤二洲等の學者を召してその教授となし、大に學問教育を勵ませり。

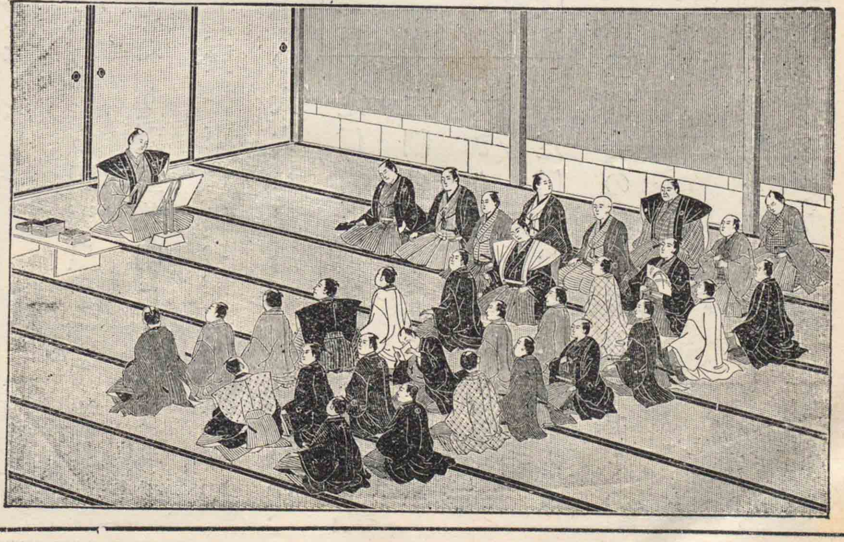
㊂ 諸藩の治

この頃諸藩に於ても、名君出でてよく領內を治めたるもの多し。さきに備前の池田光政は熊澤蕃山を用ひて文教を興し、會津の保

科正之は山崎闇齋を招きて良風を養成し、殊に水戸侯光圀は、忠孝の教を布き、奢りを禁じ、殖産をすすめて最も著はれたり。家齊の前後に至りては、熊



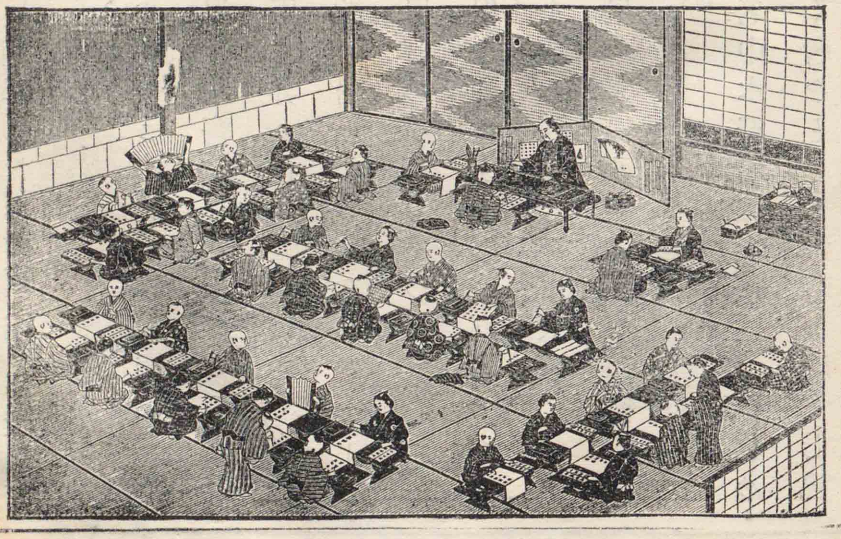
湯島聖堂の圖



聖堂講釋の圖

本の細川重賢は平生節儉をつとめて士民をめぐみ、米澤の上杉治憲は細井平洲を用ひて、産業を勵まし、貯蓄をすすめ、共に名聲世に高かりき。而して學問・教育は諸藩のひとしく奬勵せしところにして、何れも學校を起し、藩士に文武の技藝を授けたり。また儒者も、各地に私塾を開きて子弟を教育し、その他到るところに寺子屋の設けありて、

上杉治憲



寺子屋の圖

平民に讀み書きを教へ、女子もこれに通學したれば、學問は上下一般に普及したり。

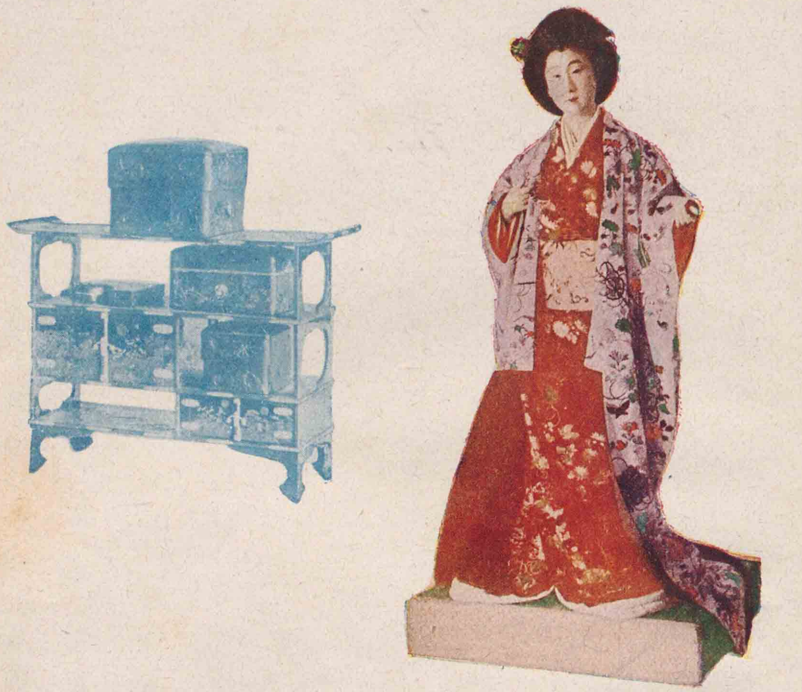
四 文化・文政の治

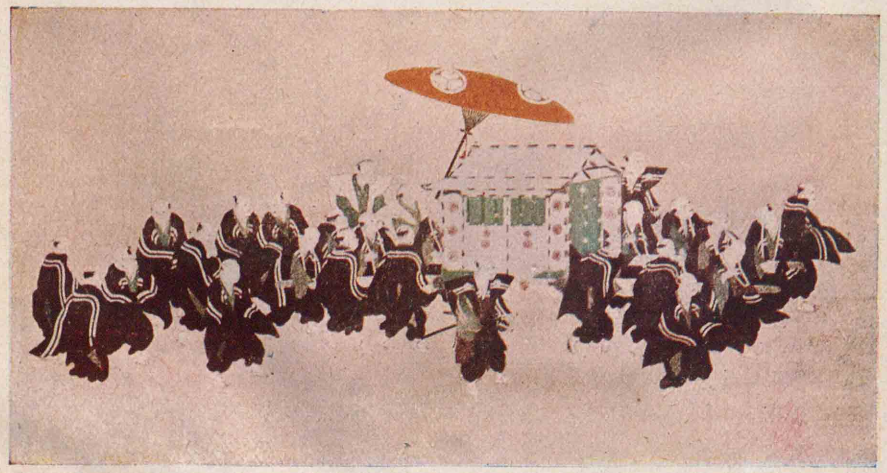
事足れば足るにまかせて事足らず足らで事足る身こそ安けれ　（紀伊侯德川治貞）

定信は職にあること七年にして退き家齊政を親らすること凡そ四十餘年、その身は從一位太政大臣に昇り、世は太平にして文學・藝術著しく發達し、いはゆる文化・文政の治をなせり。されど上下漸く太平になれて、奢侈安逸に耽り、士風おのづからくづれて、既に幕府衰運の兆をあらはしたり。時に天保の初めより饑饉打ちつづき、餓死するもの多かりしに、幕府これを顧みざりしかば、大阪の與力たりし大鹽平八郎は怒りて、（一八三七）仁孝天皇の天保八年（紀元二四九七）亂を起ししが、程なく敗れて自殺せり。

五 天保の改革

この年家齊の子家慶將軍となり、老中水野忠邦大に政治を改めて、寛政の治にかへさんとし、きびしく奢をとどめ武藝を勵まし、風





（上圖）江戸時代婦人の盛裝と貴族の調度　（下圖）江戸時代貴族の嫁入

俗を正さんとせり。これを天保の改革といふ。されど、その改革あまりに嚴しかりしため、かへつて上下の怨を受け、忠邦は遂に職を退くに至れり。

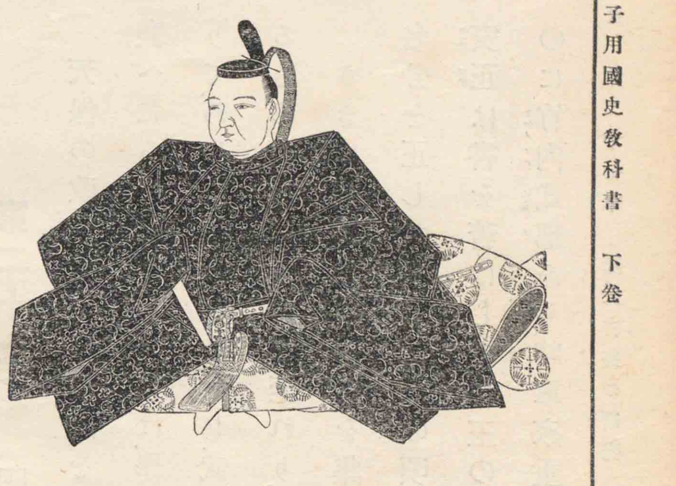
第二十七章　國史古典の研究・尊王論

㈠國史の研究と尊王論の由來
(一)徳川光圀
(二)山崎闇齋と淺見安正

天保の改革もその目的を達すること能はずして、幕府ますます衰へたるに當り、一方には、學問の開くるに從ひ國史・古典の研究起りて、わが國體を明かにし、武家政治の非をさとりて尊王論を唱ふるものあらはるるに至れり。

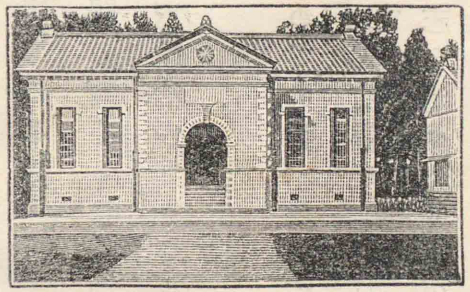
さきに徳川光圀學者を集めて大日本史を編纂し、はじめて大義名分を正したりしが、その頃山崎闇齋も神道を唱へ、その門人淺見安正は書を著はして、尊王の志を述べたり。この學説をうけたるものに竹内式部あり、將軍家重の頃京都に出でて公卿の間に尊王の

(三) 尊王の魁



徳川光圀と水戸の彰考館

大義を講じ、ついで將軍家治の時、式部の友人山縣大貳・藤井右門もまた江戸にありて大に皇室の衰へたるをなげきたりしが、いづれも幕府に忌まれて罪せられたり。



二 國學の勃興

(一) 國學の四大人

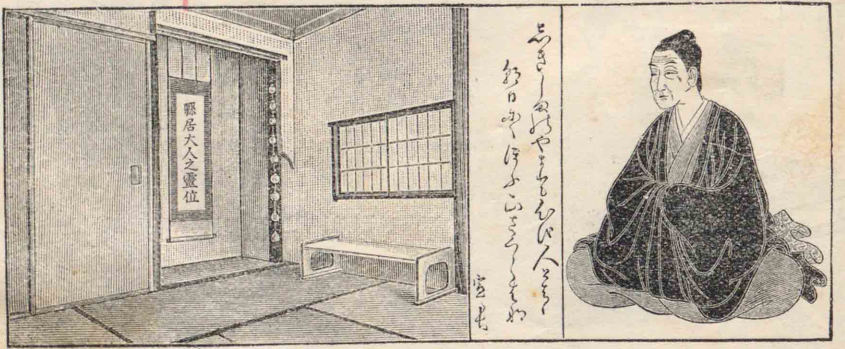
されど尊王の思想は、とても止むべくもあらず、かへつて國學の興れるにつれて益弘まれり。國學はさきに(一)荷田春滿・僧契沖の後をつぎてこれを興し、その門人(二)加茂眞淵を經て、寛政の頃(三)本居宣長に至りてこれを大成したり。宣長は眞淵の門に出で、古事記傳を始め數多の書を著はし、また世の儒者が支那を尊び、かへつて自國を卑む風あるをなげきて、大に我が國體の貴き所以を主張し、その門人(四)平田篤胤はさらに神道を説きて、尊王憂國の精神をはげませり。以上を世に國學の四大人といふ。

(二) 塙保己一

また宣長と同時に盲人塙保己一あり、博く古典に通じ、幕府の保護を得て和學講談所を立て、古書を集めて群

山崎闇齋

塙保己一



本居宣長とその筆蹟及び鈴の屋

書類從を編纂せり。かくて國學研究の便もおひおひに開け、女子にも眞淵門下の三才女を始めこの道に通ずるもの少なからざりき。

ふみわけよやまとにはあらぬからとりの、あとを見るのみ人の道かは　（荷田蒼滿）

人はよしからにつくともわが杖は、やまと島根に立てんとぞ思ふ　（平田篤胤）

高山彦九郎と蒲生君平

賴山陽とその筆蹟

㈢尊王家の輩出

（一）寛政の三奇人（高山・蒲生・林子平）

かくて寛政の頃、上野に高山彦九郎出でて皇室の復興を志し、四方を巡りて交りを同志に結び、また下野の人蒲生君平は、御歷代の山陵のすたれたるを歎きて、

（二）賴山陽

山陵志を著はせり。ついで賴山陽もまた日本外史等を箸はして尊王の意を寓し、大に世の人心を動かしたり。これらはみな後の王政復古の源をなせり。

林子平

第三期

第二十八章　（仁孝天皇より明治天皇まで）

露國人の來航　蝦夷地の開拓　海防論　西洋學術の傳來

㈣東洋の大勢

内には國學興りて尊王の論漸く盛んなるに當り、外には外國の刺激をうけて、海内の形勢はまさに一變せんとせり。さきに幕府が國を鎖してより既に百五十餘年、國民の海外の事情に通ずるもの少なかりし間に英吉利は印度を略して南方より我に向

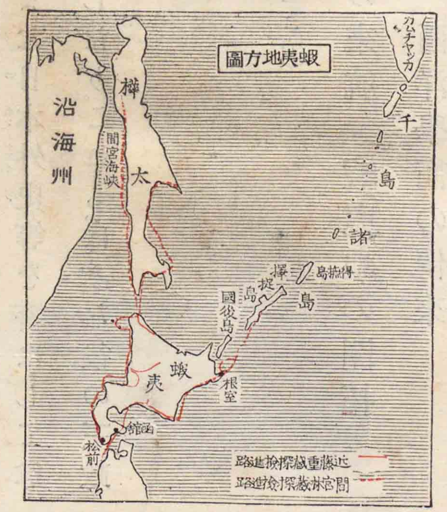
㈡露國人の來航と蝦夷地の開拓

はんとし、露西亞は早くシベリヤの地を併せてカムチヤツカ半島に達し、北方より我に近づかんとせり。時に仙臺の人林子平は獨りこの形勢を察し、書を著はして海防の忽にすべからざるを說きしが、幕府は世を惑はすものとしてこれを罪せり。

親もなし妻なし子なし版木なし金もなけれど死にたくもなし　（六無齋）

されど子平の先見は違はず、間もなく寛政四年（紀元二四五二）露西亞の使者根室に來りて通商を開かんことを請へり。幕府はこれを許さざりしかど、これより俄に海防の必要を悟り、松平定信をして伊豆・相模・安

伊能忠敬



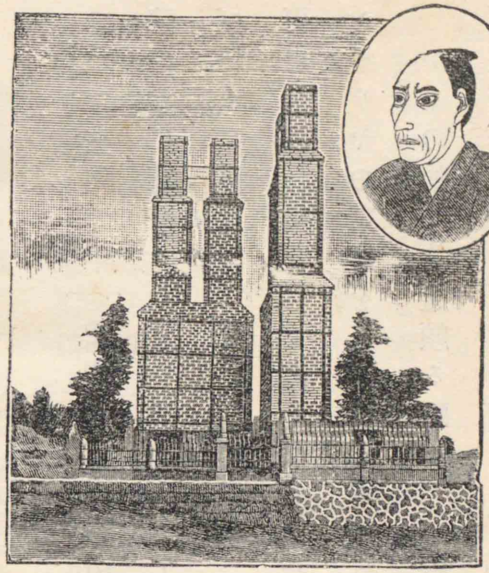
房等の沿岸を視まはらしめき。殊に北邊の警備最も急なるを以て、近藤重藏等は命を受けて、たびたび蝦夷地を探檢し、遠く擇捉島に渡りて我が國標を建て、伊能忠敬もまた蝦夷及びその他の地方を測量し、前後十七年を費して精密なる地圖を作れり。

「黒船の圖に題す」　この船のよるてふことを夢の間も、わすれぬは世の寶なりけり　（松平定信）

ついで文化元年（紀元二四六四）露西亞の使者再び長崎に來りて通商を請ひしに、幕府また之を許さざりしかば、そののち露人は屢〻千島及び樺太に寇せり。ここに於て、幕府は松前奉行を置きてこれに備へ、更に間宮林藏をして樺太を探檢せしめしが、林藏は海峽を渡りてシベリヤの東岸をも視察して還れり。

㈢攘夷・海防論

かくの如く北邊頗る騷がしき時に、英吉利船もまた長崎を騷がし、長崎奉行はその責を引きて自殺せり。これより攘夷の論漸く起

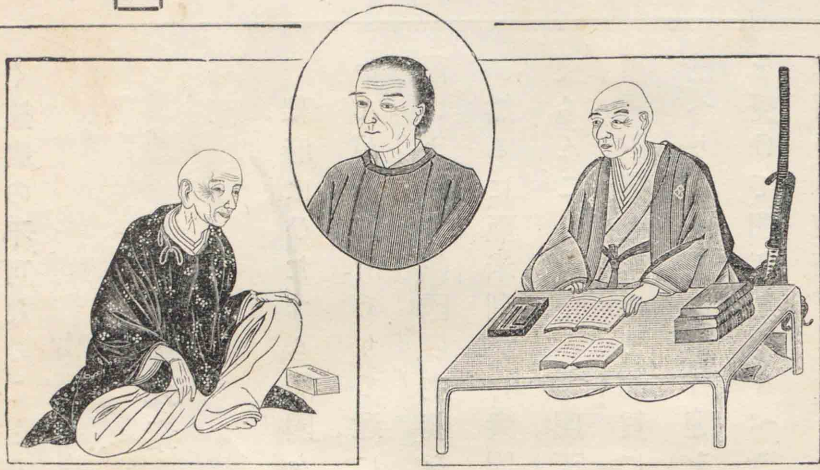


江川太郎左衞門と韮山の反射爐

り、仁孝天皇の文政八年（紀元二四八五）幕府は諸藩に令して、外國船の岸に近づくものは、一切これを撃ち攘はしむ。ここに於て海防・攘夷の論はますます上下にかまびすしく、幕府はついで高島四郎太夫・江川太郎左衞門をして、西洋の兵學を研究せしめ、且兵器を作らしめ、諸藩の中にても、水戸の德川齊昭・薩摩の島津齊彬等は大に海防の策を講じたり。

四　西洋學術の傳來と開國說

かかる時勢に當り、獨り蘭學者の中には、はやくより開國の意見を抱けるものあり。さきに新井白石和蘭人につきて西洋の事情を聞き、これを書に著はせしが、將軍吉宗は洋書の禁をゆるめ、また靑

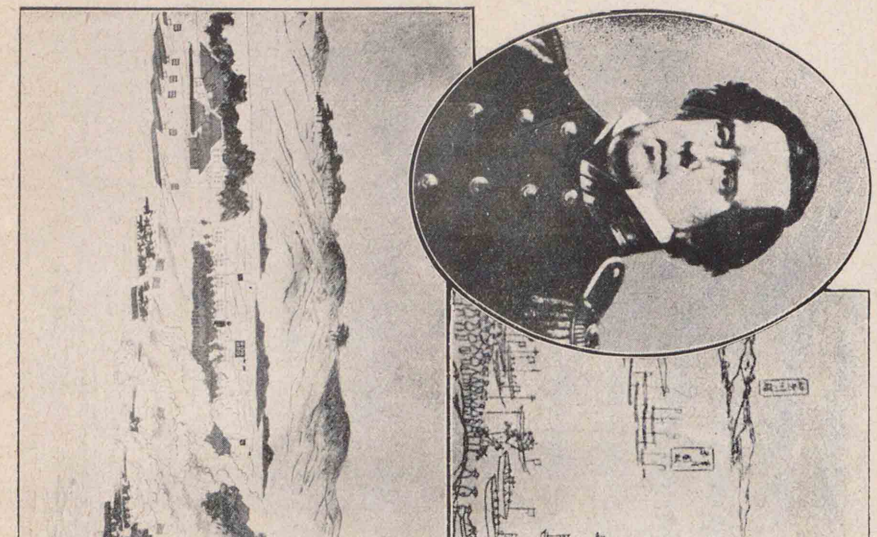


（中央）前野良澤（左）杉田玄白（右）大槻玄澤

木文藏を長崎にやりて蘭學を學ばしめしより、洋學始めて、發達し、その後前野良澤・杉田玄白・大槻玄澤など出でて益々蘭書の研究を進めたり。これ等の人人は多く醫學の學習を目的とせしも、海防の論盛んなるに及びては兵學・砲術の研究をなすものも現はれ、民間には海外の形勢に通ずるもの漸く多くなれり。

されば、こののち渡邊崋山・高野長英の如き蘭學者は、書を著はしていた

渡邊崋山



上圖 ペルリの像と横濱村黒船來泊の圖
下圖 陸地御固めとペルリ上陸の圖

く攘夷の不可なることを論じ、爲に各ゝ罪せられたり。

第二十九章 亞米利加合衆國使節の來朝

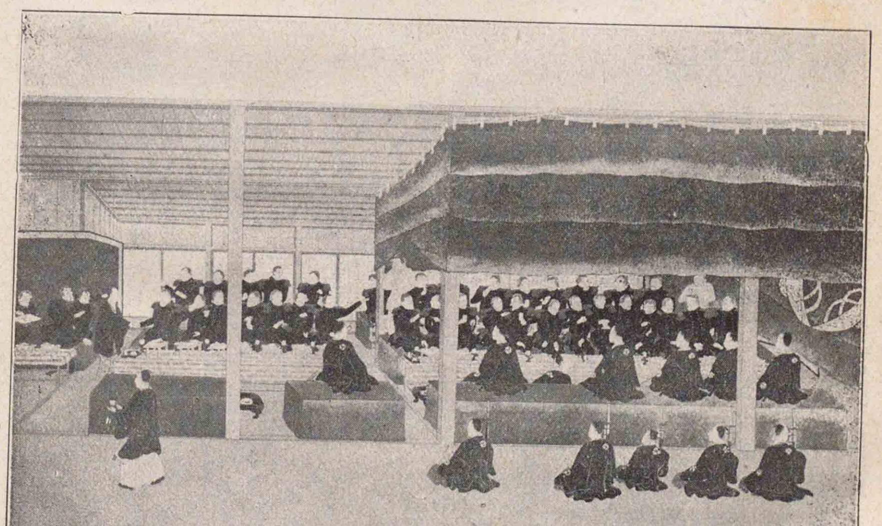
和親條約 開港・攘夷の論

亞米利加合衆國使節の來朝

幕府はひたすら開國を說くものをおさへたれども、また時勢にかんがみる所ありて、遂にさきの外國船擊攘の令を弛めしが、なほ舊によりて鎖國の主義を變ぜざりき。

然るに、亞米利加合衆國はさきに獨立し、新興の勢に乘じて我と交らんことを望み(一二〇)孝明天皇の嘉永六年(紀元二五一三)その使節ペルリ軍艦四隻を率ゐて浦賀に來り、國書を呈して通商を開かんことを請へり。幕府浦賀奉行等をして之と久里濱に會見せしめ、その國書を受けて、明年返答すべき旨を告げて歸らしめたり。ついで程なく露西亞の使節プーチャチンもまた長崎に來り貿易を開き且樺太の

横濱村應接場附近の圖



ペルリ以下饗應の圖

㈡和親條約

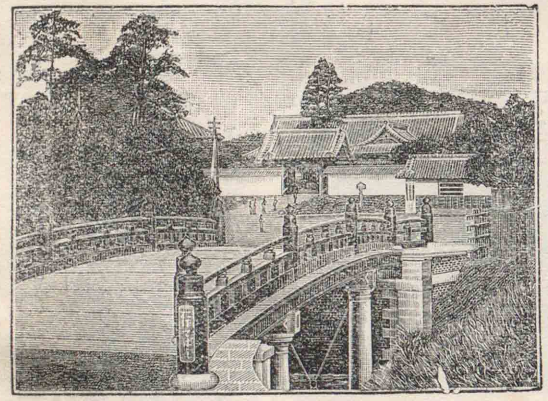
藤田東湖と水戸弘道館

德川齊昭

境界を定めんことを請ふ、幕府また期を延べて去らしめたり。

太平の眠をさます上喜撰、たつた四はいで夜もねられず　（落首）

かかる騒ぎの間に、將軍家慶薨じて子家定職をつぎしが、翌安政元年（紀元二五一四）ペルリは約の如く再び神奈川に來りて去年の決答を求めたり。時に幕府の意見未だ定まらざりしも、已むなく和親條約を結びて、下田・函館



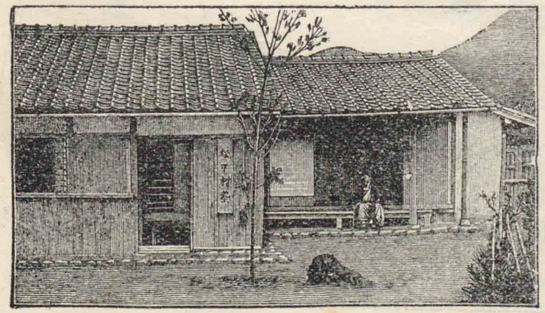
㊂開港・攘夷の論

の二港を開き、薪水食料を給することを許し、ついで英・露・蘭の三國ともほぼ同様の條約を結べり。

吉田松陰と松下村塾

佐久間象山

　されど世には幕府の處置を喜ばざるもの多く、世論ますますかまびすしくなれり。はじめ孝明天皇深く國事を憂へたまひ、御即位の初め幕府に勅して、外交の失態なからんことを諭したまひければ、ペルリの初めて來朝するや、幕府は事の由を朝廷に奏し、また諸侯の意見を問ひしが、重大なる事とて國論容易に決せず、水戸の齊昭は藤田東湖



等を用ひて文武を勵み、熱心に攘夷論を唱へ、また諸大名もおほむね開港に反對せり。然るに信濃の人佐久間象山は、はやくより開國の意見を有し、その門人吉田松陰は、ペルリ再來の時ひそかにその船に乘りて海外に赴き、外國の事情を知らんと欲し、事あらはれて罪せられぬ。

第三十章　假條約　安政の大獄
幕府の衰頽

㊀假條約の締結

　和親條約既に結ばれしかば、安政三年米國の總領事ハルリス下田に來り、ついで江戸に入りて將軍に見え、世界の大勢を說きて、更に通商條約を結ばんことを請へり。老中堀田正睦時勢の止むべからざるを察して、ハルリスと假條約を議定し、自ら上京してその勅許を仰ぎ奉れり。されど京都にては攘夷の論盛んにして、朝廷容易

ハルリス

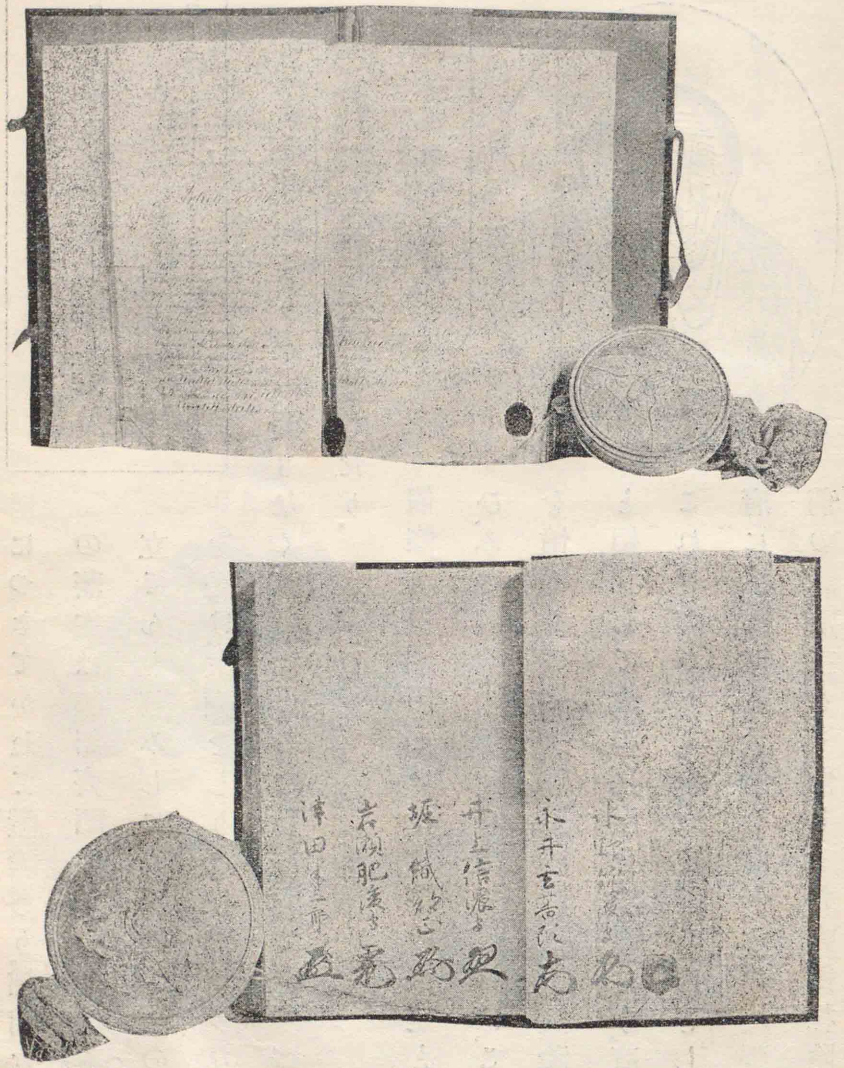
徳川家茂

にこれを許したまはざりしかば、正睦は空しく江戸に歸れり。

時に彦根藩主井伊直弼は、大老に擧げられてこの難局にあたりしが、たまたま英佛の兩國は清と戰ひ、之に勝ちたる勢を以て我が國に通商を迫らんとする風聞あり。ハルリスこれに乘じて頻りに條約の調印を促したれば、直弼遂に勅許を待たずして、安政五年(紀元二五一八)假條約に調印し、下田・函館の外に長崎・兵庫(神戸)・神奈川(横濱)・新潟の四港を開くことを約し、ついで蘭・露・英・佛の四國ともほぼ同じ條約を結べり。

㈡將軍の繼嗣問題

この時に當り、將軍家定子なく、その世嗣


米國及び英國との假條約文

【徳川氏系圖】（四）

徳川家康 ─ 頼宣（紀伊侯）……宗尹（一橋家）……（一一）家齊 ─ （一二）家慶 ─ （一三）家定
家齊 ─ 齊順（紀伊侯）─ （一四）家茂
徳川家康 ─ 頼房（水戸侯）─ 光圀……齊昭 ─ （一五）慶喜（一橋家）

㊂安政の大獄

につきてかねて議論あり。越前などの藩主は徳川齊昭の子一橋慶喜を立てんと望みしに、直弼は將軍の旨を受け、衆議をしりぞけて幼少なる家茂を紀州家より迎へ、間もなく家定薨ずるに及び立てて將軍となしたり。

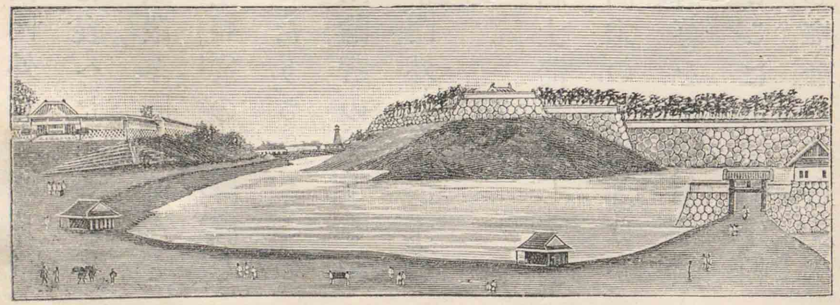
村岡とその筆蹟

かく假條約の調印といひ、世嗣の決定といひ、みな直弼の專斷に出でければ、これを憤るもの多く、尊王論者は攘夷論者と相和して大に幕府を攻撃せり。直弼これをおさへて幕威を張らんとし、幕府に反對せる公卿を幽し、水戸・尾張・越前の諸藩主をも罰し、また吉田松陰橋本左内・賴三樹三郎等數十人の志士を捕へて各、處刑したりしが、中にも近衞家の老女村岡の如く婦人の身にて國事に奔走し、遂に罰せられたるもあり。世にこれを安政の大獄といふ。

親を思ふ心にまさる親心けふのおとづれ何ときくらん（吉田松陰）

身はたとひ武藏の野邊に朽ちぬとも留めおかまし大和魂（吉田松陰）

妻臥病床兒叫飢、挺身直欲當戎夷、今朝死別與生別、唯有皇天后土知（梅田源次郎）



井伊直弼及び櫻田門

㊃公武合體

されど直弼はこれに

㊂幕府の衰頽

孝明天皇

よりて益上下の怨を受け、萬延元年（紀元二五二〇）櫻田門外にて水戸の浪士等のために殺されければ、幕府の威勢は大に衰へたり。ここに於て老中安藤信正等は、公武を合體して幕府の威嚴を回復せんとし、將軍家茂のために孝明天皇の御妹親子内親王（和宮）の御降嫁を請ひたてまつり、ついで内親王も東下あらせられたり。されどこの事より却つて尊王論者の怒りを招き、信正もまた阪下門外にて浪士に傷けられたり。

この頃四方の志士藩を脱して多く京都に集まり、同志の公卿とはかりて盛んに攘夷・討幕を唱へ、都下頗る騷がしかりき。ここに於て朝廷勅使を江戸に下して、將軍の上京及び

幕政の改革等を命じたまふ。家茂勅を奉じ慶喜を後見とし、前越前藩主松平慶永（春嶽）を政事總裁職として、大に諸政を改革し、大名の參勤交代の制をゆるめ、その妻子をおのおの國に就かしめたり。されど幕府の威力はかへつて益衰へたり。

第三十一章　長州征伐

㊀攘夷令とその實行

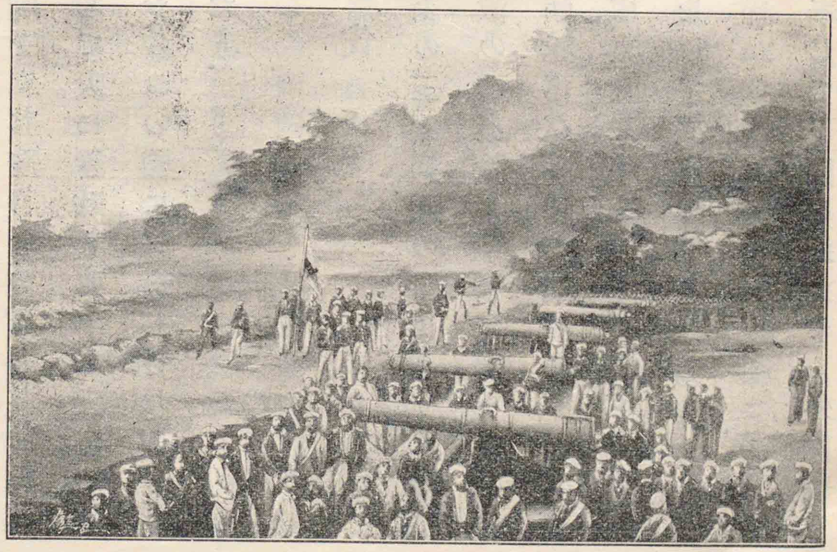
京都にては、これより先き薩・長・土の三藩朝廷の命によりて都下を鎭め、名聲天下に高かりしが、過激の攘夷論ますます勢を得殊に長州藩はその中心たりき。かくて朝廷再び勅使を江戸に下して、攘夷の決定を促さしめたまひしかば、文久三年（紀元二五二三）將軍家茂は京都に上りて勅を拜し、五月十日を以て攘夷の期と定め、あまねくこれを諸藩に告げたり。

期日にいたり、長州藩は獨り令を奉じて、下關を通過せる外國船を

下ノ關砲臺

砲撃せしかば、翌年英・米・佛・蘭の軍艦聯合して下ノ關を砲撃し、長藩敵せずして遂に和を講ぜり。またさきに島津久光の勅使を護りて江戸に下るや、歸途武藏の生麥に於

幕末外交要地圖



㊁朝議一變

三條實美

て、英人その行列を横ぎりしかば、從士怒りてこれを斬りたり。よりて文久三年英國は幕府より償金を收めたるが、更に英艦鹿兒島に來りて、被害者の遺族扶助料等を要求し、薩藩これに應ぜずして、遂に戰を開き、これを撃ち破れり。

かくの如く薩長二藩が外艦を砲撃せるの報天下に傳はるや、攘夷論者の意氣いよいよ揚り、朝廷には御親征の議さへあるに至れり。然るに京都守護職松平容保等薩藩と結び、溫和論者とはかるところあり、朝議俄かに一變して、長州藩の皇宮守衛の任を解きたれば、長州人は三條實美以下同志の朝臣七人を奉じて長州に走れり。ここに於て志士のこれに激して各處に兵を擧ぐるものありしが、皆ただちに平ぎたり。

㊂元治の變

翌元治元年(紀元二五二四)長州藩の家老等は、藩主及び七朝臣の赦を請はんとて、兵を率ゐて入京し、遂に宮門に迫れり。會津・薩摩等の兵これを拒みて蛤御門等に戰ひ、長州の兵敗れて國に歸れり。これを元治の變といふ。

七卿落

㊃長州征伐

ここに於て幕府は勅命を受け、諸藩の兵を發して長州を伐たしめたり。長州藩主毛利敬親は、家老等を斬りて罪を謝し、專ら恭順をあらはせしかば、開戰に及ばずして事治まりたり。

しかるに長州藩士高杉晉作等は、この恭順を喜ばず、藩主父子を奉じて山口に據り、再び兵を擧げたり。よりて慶應元年(紀元二五二五)幕府再征の令を發し、將軍家茂自ら大阪に進み、翌年幕軍長州の國境に迫れり。時に薩藩は既に長州と連合し、諸藩の中にも幕命に從はざるものありて、幕軍の士氣甚だ振はざりしに反し、長州兵は洋式の兵法を用ひて頗る強く、幕軍は戰ふごとに敗れたり。たまたま家茂病みて大阪に薨ぜしかば、朝廷勅して戰をやめしめ、翌年遂に征討の兵を解かしめたまへり。

第三十二章 大政奉還

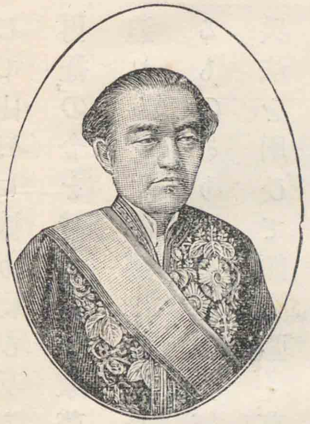
㊀明治天皇の御踐祚

慶應二年(紀元二五二六)慶喜家茂の後をつぎて將軍職に就きしが、時に孝明天皇崩じたまひ、翌三年正月御子睦仁親王御年十六にて踐祚したまふ。すなはち(一二二)明治天皇なり。

㊁當時內外の形勢

これより先き、長州再征の役に、將軍家茂大阪に入るや、英・米・佛・蘭

徳川慶喜

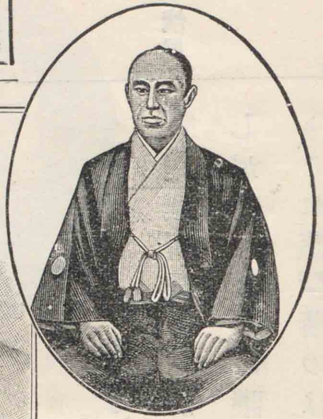


岩倉具視

の四國は軍艦をつらねて大阪灣に入り、さきの假條約の實行を迫りたり。朝廷世界の形勢にかんがみ、兵庫開港を除くの外、すべて諸外國との條約を許したまひしが、今や明治天皇踐祚したまふに及び、間もなく兵庫の開港をも勅許したまひ、外國との交際は之より益盛んならんとせり。

この時にあたり、幕府は長州征伐の失敗より全く威信を失ひて、もはや内外の政務を處する力なく、又諸藩の中にも、幕府を倒して政令一に出でざれば、綱紀を振ふ能はざるを考ふるものあり。つひに岩倉具視は薩摩藩士西郷隆盛・大久保利通・長州藩士木戸孝允等と謀

㊂大政奉還



山内豐信と後藤象二郎

を通じて、ますます討幕の密議を進めたり。

前土佐藩主山内豐信(容堂)大にこれを憂ひ、事を平和の間に決せんとし、その臣後藤象二郎をして政權を朝廷に還し奉らんことを慶喜に說かしむ。慶喜も深く時勢を察し、遂に意を決して慶應三年十月上表して大政を奉還せんことを請へり。天皇直ちにこれを許したまひしかば、江戸幕府はここに亡べり。家康將軍となりてよりここに至るまで十五代二百六十五年、なほかつて賴朝武家政治を創めしより、およそ七百年にして、大權再び朝廷に歸りたり。

當今、外國之交際、日に盛なるにより、愈朝權一途に出不申候而は綱紀難立候間、從來の舊習を改め、政權を朝廷に奉歸し、廣く天下の公議を盡し、聖斷を仰ぎ同心協力、共

に皇國を保護仕候得ば、必ず海外萬國と可並立候、慶喜國家に所盡是に不過と奉存候。（將軍上奏文の一節）

四王政維新

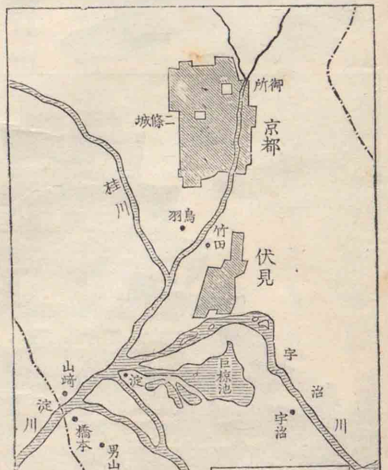
ここに於て、朝廷公卿及び諸大名を召して新政を議せしめ、まづ三條實美等を召還し、毛利敬親等の罪を赦し、ついで王政復古の大令を發したまひ、攝政關白征夷大將軍等の舊來の官職を廢し、新に總裁・議定・參與の三職を置き、有栖川宮熾仁親王を總裁とし、親王・公卿・大名・藩士の中より人材を擧げて議定參與に任じ、大小の政令悉く朝廷より出づることとなれり。世にこれを王政維新といふ。

第三十三章　鳥羽伏見の戰　明治戊辰の役

一鳥羽・伏見の戰

朝廷新政を布かるるにあたり、前將軍慶喜は京都二條城にありしが、少しもこの議に與からざりしより、舊臣等いづれもこれを憤り、これ薩摩藩のはからひに出づるものとなし、形勢甚だ穩かならざりしかば、慶喜はこれをなだめて一旦大阪に退けり。されどなほ衆情を鎭むる能はず、明治元年戊辰の年（紀元二五二八）正月會津・桑名等の兵士に擁せられ、討薩の表をささげて再び入京せんとせり。薩長の兵朝命を受けて鳥羽伏見に迎へ擊ち、大にこれを破る。さらに嘉彰親王（後の小松宮彰仁親王）征討大將軍として、これを

西郷隆盛と勝安芳

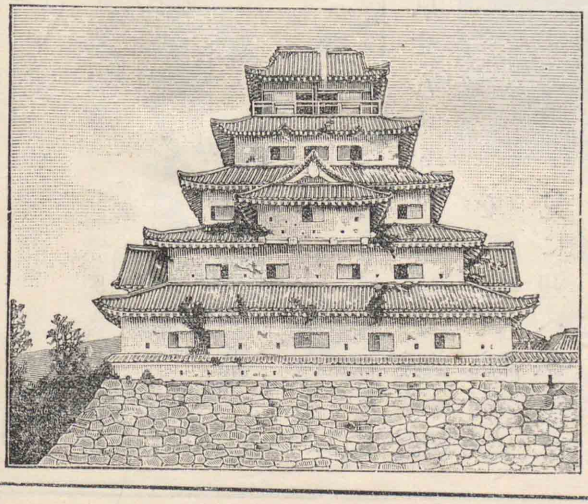


鳥羽伏見戰地圖

討ちたまひしかば慶喜は大阪より海路江戸に走れり。

㊁江戸征討

ここに於て朝廷慶喜等の官爵をけづり、熾仁親王を東征大總督となし西郷隆盛等を參謀として、江戸に向はしめたまふ。慶喜すなはち上野の寛永寺に退きて恭順の意をあらはし、勝安芳等をして隆盛につきて罪を謝せしむ。よりて江戸の攻撃を止め、江戸城及び軍艦兵器を收め慶喜を水戸に退かしめ、ついで田安家達をしてその後をつがしめられたり。

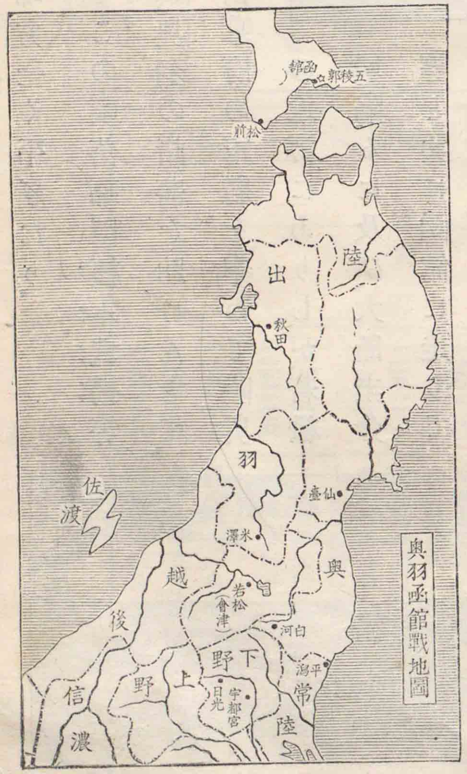


松平容保と若松城

㊂上野及び奧羽の戰爭

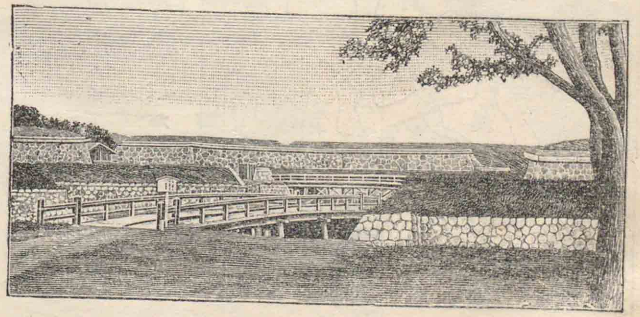
然るに舊幕臣のうちに、慶喜の恭順を喜ばざるもの集まりて彰義隊と稱し輪王寺宮公現親王（後の北白川宮能久親王）を奉じて上野にたてこもり、大鳥圭介等は走りて宇都宮・日光に據りしが、いづれも程なく官軍に破られたり。

これより先き會津藩主松平容保は、幕府の恩義を思ひて、奧羽・越後の諸藩とむすび官軍に抗せしかば、官軍進みて若松城を圍めり。城中にては、老幼婦女に至るまで皆軍に從ひ、死守して屈せざりしが、遂に糧盡きて城陷り、同盟の諸藩も亦これと相前後して降り、奧羽



奧羽函館戰地圖

(四)函館の戰爭



榎本武揚と大島圭介及び五稜郭

地方全く平ぎたり。

この頃舊幕臣榎本武揚等は、奥羽の諸藩を助けんとて、舊幕府の軍艦を率ゐて陸奥の近海にありしが、若松城陷るに及び、大島圭介等と共に函館に走りて五稜郭に據れり。官軍海陸並び進みてこれを擊ち、屢〻激戰を重ねたりしが、武揚等力屈し、官軍の將黑田清隆の勸めに從ひて、明治二年五月遂に出で降りぬ。ここに於て海內全く平定せり。

第二期（江戶時代中期）　(1)

	後光明(二三一…)		…の亂
一一〇	後西院		德川光圀大日本史編纂を始む
一一一	靈元		明亡び淸興る
一一二	東山	二三六二	湯島に聖堂を建つ 元祿時代の弊政 元祿十五年赤穗義士の復仇
一一三	中御門	二三七六	新井白石將軍家宣・家繼時代の政治を輔く 享保元年德川吉宗將軍となり幕府を中興す
一一四	櫻町		
一一五	桃園		竹內式部尊王を唱ふ
一一六	後櫻町		山縣大貳・藤井右門罪せらる

第三期（江戶時代末期）約三〇

			…亂
	仁孝(二四九七)		外國船擊攘の令を弛む
一二〇	孝明	二五一三	嘉永六年ペルリの來朝
		二五一四	安政元年和親條約の締結
		二五一八	安政五年井伊直弼大老となる、假條約の締結
		二五二〇	萬延元年櫻田門外の變
		二五二三	文久三年長薩二藩外國船を砲擊す、七朝臣長州に走る
		二五二四	元治元年元治の變、長州征伐
		二五二五	慶應元年長州再征
一二一	明治(二五二七)	二五二七	慶應三年天皇踐祚、大政奉還
		二五二八	明治元年鳥羽伏見の戰、戊辰の役
		二五二九	明治二年函館の戰爭

近世略年表

第一期（江戸時代初期）約五〇

御代數	天皇	紀元	重なる事項
一〇六	後陽成（二二五九）	二二六〇 二二六三	**慶長五年**關ヶ原役 **慶長八年**德川家康征夷大將軍に任ぜらる **朝鮮との交通再び開く** **和蘭人と貿易を始む**
一〇七	後水尾	二二七五	**英人と貿易を始む** **元和元年**豐臣氏の滅亡、公家法度武家法度を頒つ
一〇八	明正	二二九七	家光江戸幕府の制度を整ふ **寛永十四年**島原の亂
一〇九	後光明		

第二期（江戸時代中期）(1)

御代數	天皇	紀元	重なる事項
	後光明（二三一一）	二三一一	**慶安四年**德川家光薨ず、由井正雪の亂
一一〇	後西院		德川光圀大日本史編纂を始む
一一一	靈元		**明亡び淸興る**
一一二	東山	二三六二	湯島に聖堂を建つ 元祿時代の弊政 **元祿十五年**赤穗義士の復仇
一一三	中御門	二三七六	新井白石將軍家宣・家繼時代の政治を輔く **享保元年**德川吉宗將軍となり幕府を中興す
一一四	櫻町		
一一五	桃園		竹內式部尊王を唱ふ
一一六	後櫻町		山縣大貳・藤井右門罪せらる

約一九〇 (2)

御代數	天皇	紀元	重なる事項
一一七	後桃園		
一一八	光格	二四四八 二四五二 二四六七 二四六八	松平定信將軍家齊の老中となり政を改む **天明八年**皇居炎上、定信之を新造す **寛政四年露國の使者始めて通商を求む** **文化四年露人蝦夷に寇す** **文化五年英國船長崎に來りて亂暴す**
一一九	仁孝	二四八五	**文政八年外國船擊攘令を發す**

第三期（江戸時代末期）約三〇

御代數	天皇	紀元	重なる事項
	仁孝（二四九七）	二四九七	**天保八年**家齊退隱、大鹽平八郎の亂 **外國船擊攘の令を弛む**
一二〇	孝明	二五一三 二五一四 二五一八 二五二〇 二五二三 二五二四 二五二五	**嘉永六年ペルリの來朝** **安政元年和親條約の締結** **安政五年**井伊直弼大老となる、**假條約の締結** **萬延元年**櫻田門外の變 **文久三年**長薩二藩外國船を砲擊す、七朝臣長州に走る **元治元年**元治の變、長州征伐 **慶應元年**長州再征
一二一	明治（二五二九）	二五二七 二五二八 二五二九	**慶應三年**天皇踐祚、大政奉還 **明治元年**鳥羽伏見の戰、戊辰の役 **明治二年**函館の戰爭

第六編　現代（明治天皇・今上天皇）

第三十四章　明治時代

㊁明治維新の新政

(一)五箇條の御誓文

明治維新の新政

明治天皇維新の政を布きたまふに當り、明治元年三月親しく神祇をまつり、五箇條の御誓文を下して、大政の方針を示したまふ。

一、廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スベシ。

一、上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フベシ。

一、官武一途庶民ニ至ルマデ各其志ヲ遂ゲ人心ヲシテ倦マザラシメンコトヲ要ス。

一、舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クベシ。

明治天皇

(二) 立后と東京奠都

(三) 廢藩置縣

木戸孝允

(四) 内治と外交

一、智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スベシ。

やがて江戸を東京と改め、ついで藤原美子を皇后に立てたまひしが、翌年東京に行幸して、永く帝都と奠めたまへり。

當時政權は既に朝廷にかへりたれども、諸藩はなほもとのままに藩主の支配にまかせて、統一の政治を行ふこと能はざりしが、明治二年薩・長・土・肥を始め諸藩主きそひて、土地・人民を奉還せんことを請ふ。朝廷これを許し、ついで四年全く藩を廢して縣となし、縣令を置きて之を治めしめ、また廣く人材をもとめたり。ここに於て政令一に出で中央集權の實全く擧るに至りたれば、これより益、内外の政を盛んにしたまふ。

すなはち御誓文の御趣意により、内には門閥を重んずる舊習をやぶりて、四民平等となし、散髮・脱刀等の風を許すと共に、西洋諸國の文物を採りて、新學制・徵兵令を布き、太陽曆を用ひ、大に通信・交通の機關を改良したり。又外には廣く諸外國と和親するの主義を執り、岩倉具視・木戸孝允・大久保利通等を歐米諸國に遣はして、國交を厚うし、兼ねてその文物制度を視察せしめたりき。

大久保利通

㊂ 地方の亂

(一) 征韓論

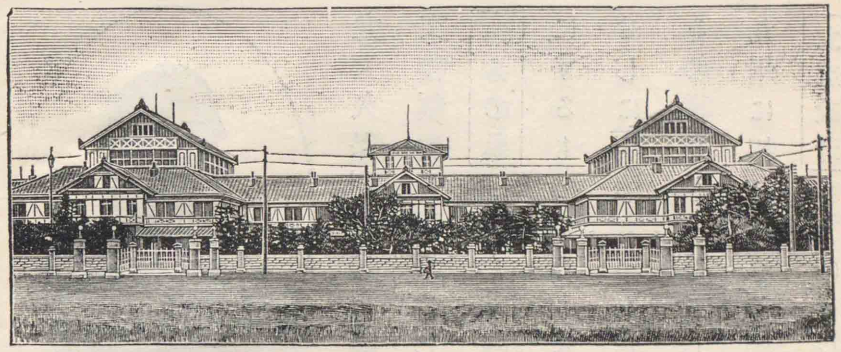
(二) 西南の役

㊃ 立憲政治

地方の亂　かくて内外の新政益進むにつれ、またこれと意見を異にするものもあり。たまたま征韓論起り、西郷隆盛等はこれを主張せしに、明治六年岩倉具視等の歸朝するや、内治の急なるを說きてその議をしりぞけしかば、隆盛遂に官を辭して去り、明治十年兵を九州に起したれど程なく平ぎたり。

立憲政治　この後は内亂また起らず、一般の政治思想おひおひに

（一）立憲政治成立の次第
（二）內閣制度
貴族院と衆議院
（三）憲法發布と帝國議會の開設
（四）明治二十七八年戰役



進みゆきしが、政府にても御誓文の萬機公論に決する御趣意に基づきて、次第に元老院・地方官會議・府縣會等を開きて、輿論を採用する途を進め、明治十四年に至り、遂に國會開設の詔を發せられたり。

よりて政府はその準備のために、伊藤博文を西洋に遣はして列國の制度を視察せしめ、十八年に至り大に官制を改革して內閣制度を立て、二十二年紀元節のめでたき日を以て、上下和樂のうちに帝國憲法を發布し、翌年十一月始めて帝國議會を東京に開きたまへり。ここに於て立憲政體の實全く備はれり。

帝國議會開かれてよ

明治二十七八年戰役

（一）朝鮮事變
（二）日淸戰役

り、その協賛を經てもろもろの制度益〻整ひ、陸海の軍備も漸く充實したりしが、ここにはしなくも隣邦と兵を構ふるに至れり。はじめ朝鮮はとかく我に無禮なること多く、明治八年江華島の守兵故なくわが軍艦を砲擊し、のち十五年・十七年京城の變には、暴徒起りてわが公使館を燒き、居留民を殺傷したれば、我はその度每に朝鮮政府と談判を開き、彼をして謝罪せしめたり。

しかるにこの十七年京城の變には、淸兵朝鮮の暴民を助けて我に損害を與へしを以て、この後我が國は朝鮮にて淸國と煩を起すことなからんがため、翌十八年天津條約を結び、兩國共に兵を朝鮮に置くことを止め、若し出兵の必要ある時は互に通知すべきことを約せり。然るにその後明治二十七年に至り、朝鮮に東學黨の亂起り、淸國兵を出ししかば、我が國も亦兵を送り、淸國に謀りて共に朝鮮の內政を改めんことを望みしに、淸國は我が誠意を容れず、かへつ

五 明治三十七八年戰役

(一) 露國の東方經略

て我を威壓せんとせしかば、ここに戰端を開くに至り、我が軍しきりに勝ちて、遂に清國をして下關條約に於て、遼東半島及び臺灣・澎湖島を割き、償金を出さしめ、朝鮮の獨立を認めしめたりしが、遼東半島は露・獨・佛三國の勸めによりてこれを清國に還附したり。ついで朝鮮は國號を韓と改め、獨立國の體面を保つを得たりき。

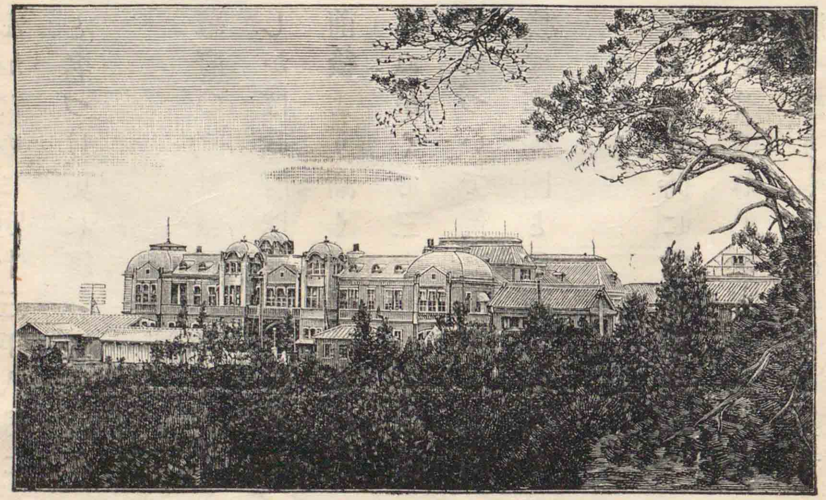
明治三十七八年戰役　露國は遼東半島を還附せしめし報酬として、清國より數多の特權を得、遂に遼東半島をもおのが勢力範圍となしたりしが、たまたま明治三十三年清國に義和團の亂起るや、露國はこれに乘じて、しきりに兵を滿州に送りてその地を占領し、更に進みて韓國をも威壓せんとせり。

(二) 日露戰役

ここに於て我が國は、清韓兩國の領土を全うし、東洋の平和を保たんがために、英國と同盟を結び、屢露國に注意を與へたりしも彼應ぜず、已むなく戰を交ふるに至れり。これより明治三十七八年海陸の大戰となり、奉天及び日本海の決戰に我が軍最後の大勝を得て、遂にポーツマスに平和條約を結び、露國は樺太の南半を割き、清國より租借せる地方を讓り、また我の韓國に於ける特別の權利を認むるに至りぬ。

六 韓國併合と外交の進捗

韓國併合　この戰勝の結果、韓國には統監府を置き伊藤博文を統監に任じて、漸く保護の實を擧げたりしが、なほ從來



伊藤博文と朝鮮總督府

の禍根を絶ち永く東洋の平和を保たんがために、四十三年八月に至り遂にこれを併合し、その地を朝鮮と名づけ、更に總督府を開きて治めしめたり。

かかる間に外交も益〻進み、さきに徳川幕府の歐米諸國とむすびたる安政の條約は、我に不利の點多かりしかば、政府は屢〻之が改正を企てたりしが、明治二十七八年戰役の前後より漸く解決せられ、三十二年に至りて改正條約は實施せられぬ。かくて三十七八年戰役の終る頃には、日英同盟は更に擴張せられ、ついで佛露兩國と協約を結び、北米合衆國と外交文書を取り換す等、列國との親交愈〻厚きを加へ、皇威益〻海外に輝けり。

七　明治天皇崩御

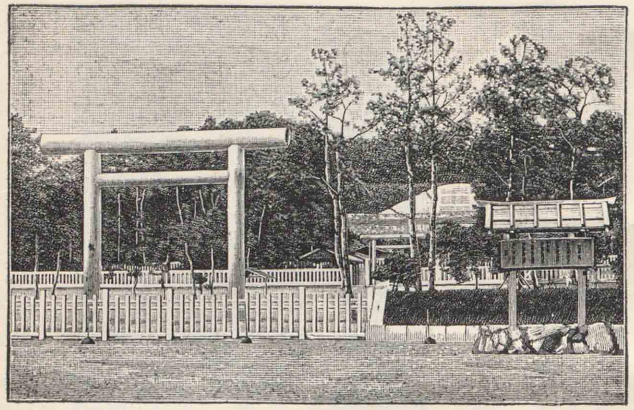
(一) 天皇の崩御

明治天皇崩御

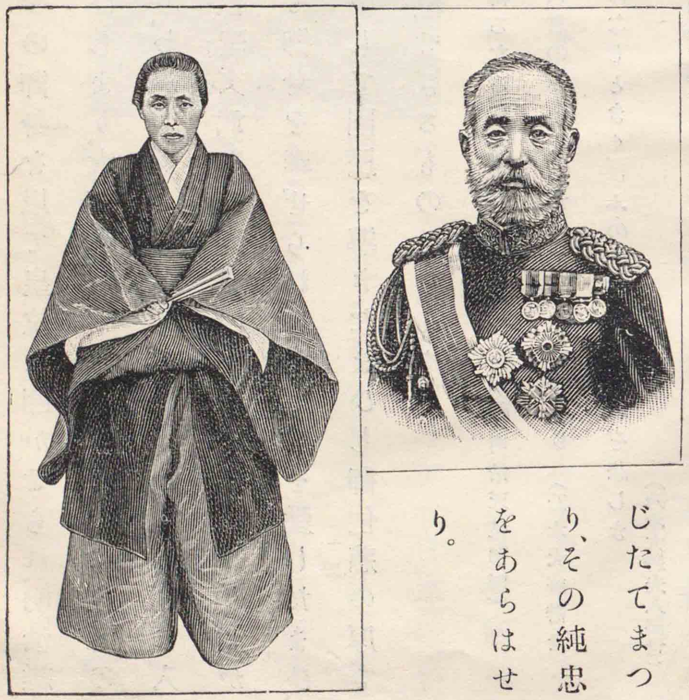
かくて國運いよいよ盛んなる時に當り、明治四十五年七月はからずも天皇御不豫にわたらせられしかば、全國の民擧りて熱誠をこめ、ひたすら御平癒を祈り奉りしかひもなく、三十

(二) 乃木大將夫妻の殉死

日遂に崩御あらせられたり。上下悲痛の狀たとふるにものなく、九月東京に御大葬を行はせられ、伏見桃山の御陵に斂めたてまつる。靈柩宮城を出でます際、陸軍大將乃木希典夫妻自殺して天皇に殉じたてまつり、その純忠をあらはせり。



伏見桃山御陵



乃木大將夫妻

（三）天皇の御盛德

天皇は國家多難の際、年少の御身を以て皇位に卽かせられ、明治維新の大業をはじめたまひしより、大御代四十六年の間、內に立憲の制を布き、外に國權を張り、わが帝國をして忽ち世界强國の列に入らしめたまひしは、全く叡聖文武なる天皇の御盛德によれり。然かもこの間常に儉素を以て御身を奉ぜられ、日夕下民を愛したまひ、教育勅語・戊申詔書等を下して、國民を導きたまひし御仁慈の厚きに至りては、國民誰か感泣せざるものあらんや。

とこしへに民やすかれと祈るなる我が世を守れ伊勢の大神（明治天皇御製）

うつし世を神さりましし大君のみあとしたひて我はゆくなり（乃木大將辭世）

出でましてかへります日のなしときくけふのみゆきにあふぞ悲しき（乃木大將夫人辭世）

第三十五章　大正時代

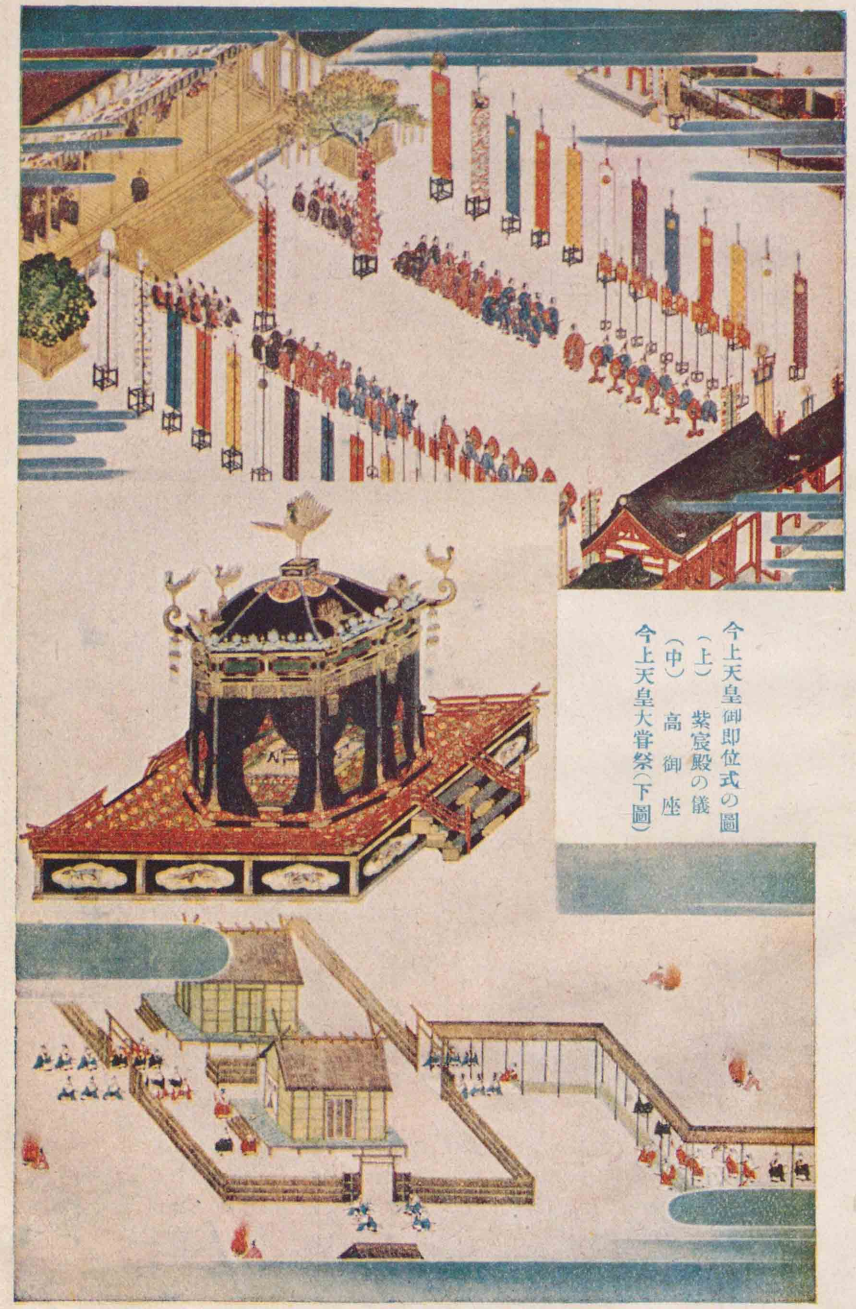
（一）今上天皇の踐祚

今上天皇の踐祚　明治天皇の崩御あらせらるるや、その日直ちに皇太子嘉仁親王踐祚したまひ、年號を大正と改めらる。翌日文武百官を宮中に召して朝見式を行はせられ、勅語を下して大政の御方針を示したまへり。

（二）昭憲皇太后の崩御

昭憲皇太后

昭憲皇太后の崩御　國民みな先帝の大喪に服し、先帝を哀慕したてまつる涙いまだ乾かざるに、昭憲皇太后また大正三年三月御病にかからせられ、四月十一日遂に崩御あらせられ、伏見桃山東陵に葬り奉れり。皇太后は明治天皇の大業を助けたまひて、御功績の多かりしのみならず、淑德いと高く、殊に慈愛に富ませられ、實に內外婦人の模範として仰がれたまひき。



今上天皇御即位式の圖
（上）紫宸殿の儀
（中）高御座
今上天皇大嘗祭（下圖）

とりどりにつくるかざしの花もあれどにほふ心のうるはしきかな（昭憲皇太后御製）

㈢今上天皇御即位の大禮

㈣大正三四年戰役

御即位の大禮

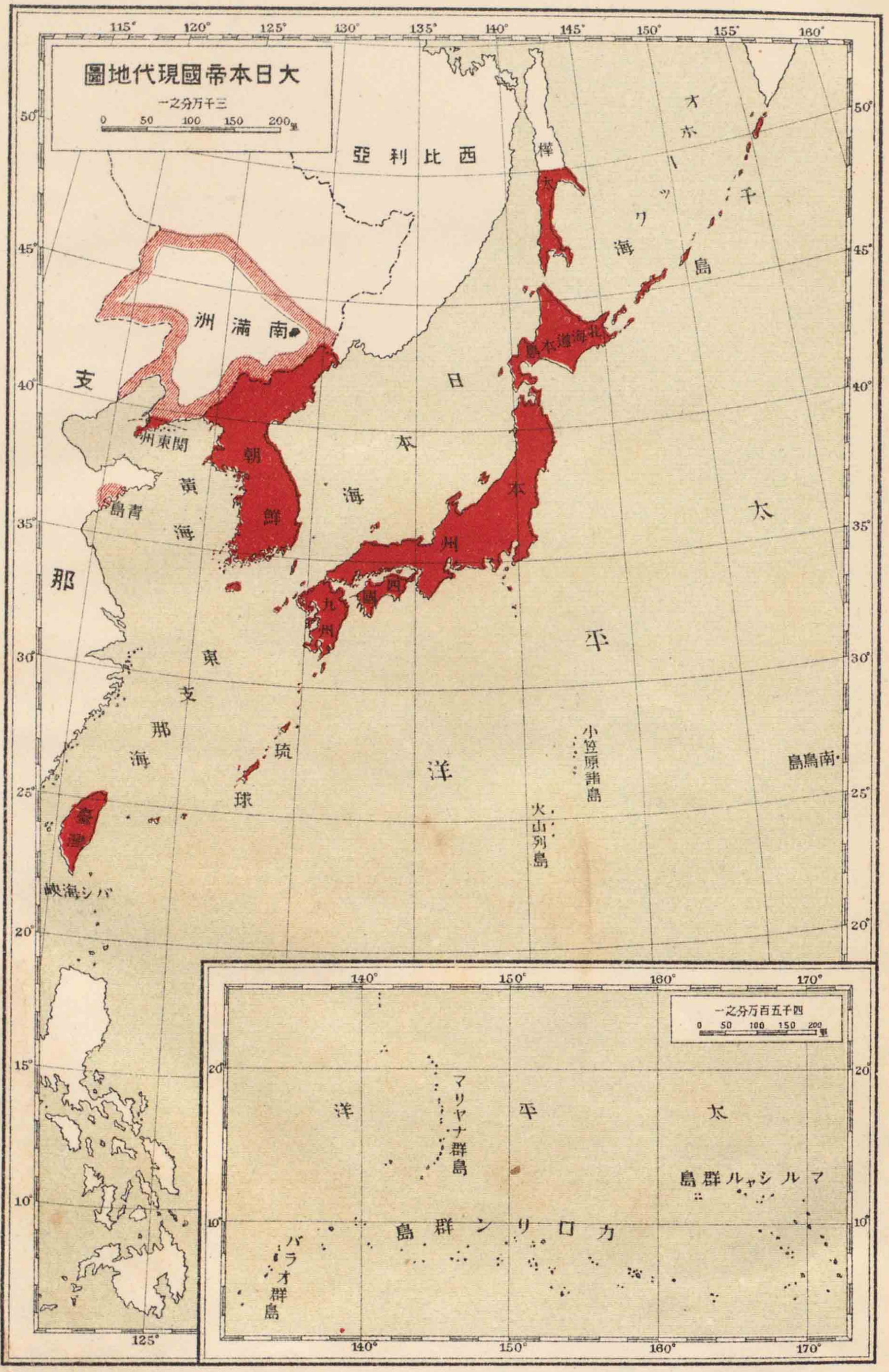
皇太后諒闇の期つくるに及び、今上天皇陛下は大正四年十一月京都にて御即位の大禮を行はせられ、廣く内外の百官を召して、莊嚴ならびなき儀禮を示したまふ。十日紫宸殿の儀に於て下したまへる勅語の中に、わが皇室と國民との間は『義は則ち君臣にして情は猶父子の如し』と宣べたまへり。國民深く聖旨を感銘して奉公の誠を致し深甚なる天恩に報いたてまつらざるべからず。

大正三四年戰役

この大正の新時代を迎ふるに當り、たまたま隣邦支那はこれよりさき清朝亡びて共和國新に成り、我が國を始め列國政府これを承認したれども、その後國內の秩序いまだ全く回復せざるものあり。

また大正三年歐洲に起りし大戰亂は東洋にも影響し、我が國は日

[illegible]


大日本帝國現代地圖
三千万分之一
西比利亞
樺太
オホーツク海
千島
北海道本島
日本海
南滿洲
支那
關東州
黄海
青島
朝鮮
本州
四國
九州
太平洋
東支那海
琉球
臺灣
バシー海峽
小笠原諸島
火山列島
南鳥島
四千五百万分之一
太平洋
マリヤナ群島
マルシャル群島
カロリン群島
パラオ群島

㊄國民の覺悟

英同盟の誼を重んじてこの戰亂に加はり、獨逸の租借地たる青島を陷れ、また南洋に於ける獨逸領の諸島を占領したりしが、のち露國に政變起り、今や忠勇なる我が兵は遙かにシベリヤの野に出動し、また勇敢なる我が艦隊は遠く地中海に進みて、獨逸の潜航艇の暴行を制し、獨逸は遂に屈して、列國の講和會議は佛國に於て開かれ、わが使節もこれに參列し、英・佛・伊・米と共に世界に於ける五大强國の一として、種々の會議にあづかり、講和の條件も既に議了し、これより益世界平和のために盡さんとす。

國民の覺悟

かくて國民の任務はこれよりいよいよ重きを加へたれば、苟も帝國の臣民たるものは、男女よくその本分を守り、各智德を進め業を務め、協同して國家の富强をはからざるべからず。われ等今光輝ある三千歲の國史を顧みて、ますます奮勵せずして可ならんや。

女子用國史教科書

下卷終

女子用國史教科書

下卷終

現代略年表

明治大正時代

御代數	天皇	紀元	重なる事項
一二二	明治	二五二八	明治元年五箇條の御誓文を下す
		二五二九	二年東京奠都、版籍奉還
		二五三一	四年廢藩置縣
		二五三三	六年征韓論
		二五三五	八年江華島事件
		二五三七	十年西南の役
		二五四二	十五年朝鮮京城の變
		二五四四	十七年朝鮮京城の變
		二五四五	十八年天津條約、內閣制度を創む
		二五四九	二十二年憲法發布
		二五五〇	二十三年始めて帝國議會を開く
		二五五四 二五五五	二十七八年日淸戰役、條約改正
		二五六〇	三十三年淸國義和團の變
		二五六二	三十五年日英同盟
		二五六四 二五六五	三十七八年日露戰役
		二五七〇	四十三年韓國併合
		二五七二	四十五年天皇崩御

御代數	天皇	紀元	重なる事項
一二三	今上	二五七二	大正元年今上天皇踐祚、改元、朝見式、先帝御大葬
		二五七三	二年支那共和國承認
		二五七四	三年昭憲皇太后崩御、日獨戰爭始まる
		二五七五	四年御卽位式
		二五七九	八年歐洲大亂講和成る

大正八年十一月十三日印刷
大正八年十一月十六日發行
大正十年一月十日再版印刷發行
大正十年十二月十日四版印刷發行

女子用國史教科書

定價 上卷金四拾壹錢 下卷金六拾五錢

大正十二年度臨時定價 上卷金七拾錢 下卷金壹圓拾壹錢

著者 藤岡繼平

發行者 東京市日本橋區鐵砲町三番地 合資會社六盟館 右代表者 杉本七百丸

印刷者 東京市京橋區弓町二十五番地 高橋郁

發行所 東京市日本橋區鐵砲町三番地 電話特長神田一三六四番 合資會社六盟館 振替口座東京一二五〇番

一手販賣所 東京市日本橋區本石町二丁目 電話本局一六九八番 杉本光文館 振替口座東京五六一三番

(東京 三協印刷株式會社印刷)

合資會社 六盟館 發行圖書 大販賣所

東京市京橋區
南傳馬町二丁目
目黑書店
電話京橋二一六三番 振替口座東京二八〇九番

東京市日本橋區
鐵砲町
榊原書店
電話神田一三一三番 振替口座東京三〇九〇番

東京市日本橋區
本石町二丁目
杉本書店
電話本局一六九八番 振替口座東京五六一三番

長岡市表四ノ町
目黑十郎
電話長長岡一八番 振替口座東京三六一九番

長野市大門町
西澤本店
電話長長野一二四番 振替口座東京一〇七〇番

二年ロ組
田坂ミサコ

田

愛媛県立今治高等女学校

二十五期生 山組

広島大学図書
2000065507